休申さるは、是より北にあたり松林の見へ候いか成ところにて候や、在所のものこたへて、御尋なくとも申上たき事にて候、あの林につきて御物がたり有り、抑あの林のうちに古寺あり、しかるにむかしより變化ありて、其形何ともしれぬもの三人出て、よる〳〵おどりくるふ、いかに成る法師にても三日と住せずして立のくなり、此寺古來より由來ある寺にて、本尊は一刀三禮春日の作とやらん申傳へ候なり、尤什物もあまたあるよしなれど、かの變化にてたれか住せんといふものなし、御僧貴くましませば、あはれ變化をもしりぞけ給ひて、此寺に住したまはい、これにすぎたるよろこびなしと、くはしく語りければ、和尚き、給ひそれこそ一だんの望みなり、佛道修行もさやうの寺をとりたてゝこそ、本意と申すべけれ、いづれもおたのみ申すはや〳〵肝煎られ給はれとのたまへば、いづれも大によろこびて、やがて同道し、彼寺にともなひ、和尚ひとりを殘して、皆々にげかへれり、しかるに其夜五更にもなれば、聞しにたがはず人音して、三人の變化出きたりおどりくるふ、一番に出しばけものがうたをきけば、

東野のばづはいとしい事や、いつをらくともおもひもせいで、せばねはねはそんじわしうちをりて、終にはのべのつちとなる〳〵。

又二番目の化ものゝうたに、

西竹林のけい三ぞくは、あるかひもなきかたわにうまれ、人のなさけを得かうむらで、竹の

はやしにひとりぬる〳〵。

又三番目の化ものゝ歌に、

南池の鯉魚はつめたい身やな、みづを家ともじきともすれば、いつもぬれ〳〵ひや〳〵しと〳〵。

とうたひ、ひたものおどりける、一休一々合點したまひ、何さまきやつらをしりぞけん事やすかるべしと思ひて、さて夜を明し、所の人々をよびよせ、變化のやうをかたり、先一ばんに東野のばづといひしは、是より東の野原に馬のされかうべあるべし、又二番に西のやぶのうちに三足のにはとりあるべし、三番はこれより南のかたに池ありて其うちに鯉すむべし、これを取あつめ給へとのたまふほどに、人々ふしぎにおもひ、それ〳〵さがし求むるに、其ものみな〳〵ありしかば、一休其品を葬りて讀經し給ひしかば、夫よりかつて怪しき事なく、一休すなはちしかるべき僧を住持せしめ、和尚はなは〳〵奥へと心ざし給ふ、よつて今にいたるまで一休を權者といはぬものぞなき。

○さて又讃州に榊原兵内と申す武士あり、久々わづらうて醫術を盡すと雖も、さらに其しるしなし、殊に重病なれば最期近づきぬ、折ふし一休郷内にましますよし、其かくれなく内々殊勝なる御坊のよしきゝ及ばれ、いそぎつかひを以て、此度りんじうの一大事をもきかせ給ひて、

すぐなる道へ引入たまはゝ有がたかるべしと、申つかはしける、一休聞しめし、それこそ易き御事なりとて、其まゝつかひとつれて參らるゝ、和尚取つくらふ事もなく、やぶれ衣にやぶれ紙子の所々はのりはなれ、さながらとびの身ぶるひしたる風情も、これよりまだましならんといへる風体にて、病人の間近くより給ふ、家内の人ども日頃きゝおよびし僧なれば、如何さま成佛安心至極のむねを聞くべきと、我もわれも次の間につめかけ、かうべをかたぶけ耳をすましてきく所に、一休なにとなく病人の耳に口をあてゝ、大音にて曰ふは、

汝すでに末期や、我も行き、人もゆく、只これ一生は　如レ夢　如レ幻

かくいひすてゝかへりたまふ、何れも勝手には一門家の子あつまり、扨も〳〵めづらしからぬ一休坊主のすゝめかな、夫りん終をすゝむるといふ事は、成佛かんじんをいひきかせて、心安くおはらするをこそ、りんじうの一大事をすゝむるといふものなるに、かゝる語は坊主のいふ迄もなく、皆かんせんに人毎にいふ事なり、さても一狂の坊主かなと口々に申しあへり、かゝる處へ、ある出家きたり、此よしをきゝ、いや〳〵それは何れもの不合點なり、一休はどこそ候へ、かやうの語こそいかにも、殊勝におはえ候、總じて禮宗悟道の坊主などゝいふものは、餘宗などのやうに、あるひは念佛題目をとなへ尊ぶところへ御參り、やれありかたき事のおはするなどゝいふ事は、禪僧なんどは申さぬなり、いかにも〳〵右のすゝめ、しゆしやうやと申し

ければ、いづれもはじめてさもこそと得とくなし、皆一同にかんじける、さて御内に恩を深くかうむりたるものども、御さいごの殉死の面々、たれ〳〵なるぞと、其用意とり〳〵にひしめきけるを、一休ほのかにきゝ給ひて、其夜門前に一首の狂歌をたてられける、

世の中に生死の道につれはなしたゞさびしくも獨死獨來

明れば御内のものこれを見付て、さつそく老士へもち出て、何れもうちよりいかなるものゝ立つらんとせんぎしける折から、又かの僧申さるゝは、この作者別人ならず、一休禪師に必定せり、實に尤の狂歌かな、此のうたはみな人はひとり來てひとり死する身なれば、たとへ誰かれ冥途の供をすればとて、便にはなるべけんや、五十人百人殉死するもの自業自得果なれば、めい〳〵の罪障により、百人が百所へわかれ行きて、主人に付從ひ行くものにあらず、されば若者どもを殉死なさせんを歎きて、此歌を立られたるならん、今殉死せん命をもつて、世繼の君を守護なし給はんこそ御家長久ならんと、理を盡して申されければ、みな此理に同じつゝ、かさねて殉死のさたはなかりけり、されは死するに定りたる面々は、一休を活佛と尊みしは理りせめて道理なり。

○爰に一休津の國の山里を通り給ふに、二人の山がつ有り、一人は伏倒れてあり、今一人は畑をうつ、父子なり、よりて見給ふにむすこ毒蛇のためにさゝれて俄に死したり、父なげくけし

きもなく、一休にむかつて、御房そのおはする道のほとりに小家有り、これ我等の内なり、それよりめしを持きたるべし、只今息子は俄に死したり、さすれは一人の食ばかりもちて來れと申してたべといふ、一休ちかくより給ひて、それ父子の別はかなしかるべきが、いかなれば汝はなげきの色なきぞと問ひ給へば、男こたへていはく、親子鳥夜林明方々如飛去と答ふ、此意は親子のちぎりは鳥の夜る、はやしにより合て夜あけては方々へとびさるが如く、わづかのちぎりの間なれば、なげく事なしといふ心なり、一休それよりをしへの家に行き、くだんの通りを女房につぶさにかたらるゝ、扨はとて二人のこしらへ置し食物を一人分さしおき、只一人のばかり持て出る、一休とひ給ふは、其死たるはなんぢが爲にはいかにと問はれければ、わらはがためには夫なりと申して少もなげく氣色なし、一休仰けるは、それ世の中に死するといへば他人の身としてさへ、あはれをもよふすに、まして夫ならばかなしかるべし、殊に女性ははかなきものなれば、いかゞあるべしと、ひたまへば、女こたへていはく、夫婦契市人行合要事過方々如散とこたへて行き過ぎけり、この意は夫婦のちぎりは市により合ひてようじをとゝのへおはれば、めい〳〵方々へちるがごとし、ながらへそふべきものにあらずといふ心なり、一休もふしぎの思ひをなして、さてもかやうなる山家にかゝる生死無常のことはりをよくわきらめたる男女もありけるよと感じ給ふ。

○一休伊豆の國にてある山人、猿を一疋とらへ、柱にしばり付なさけなくもうちたゝき、すでに打殺さんとすべきところへ、和尚行あはせ、ふびんにおもひ乞ひ取て、はなしやり給ふ、折から夏の頃なりしが、或夕ぐれに、くだんの猿いちごといへるものをふきの葉に包みもち來りて又其袋に栗を入れてきたり、一休かはゆく思しめし布袋に豆を入てとらせらるれば、とりて歸りかさども命を助けられし恩の程をよくしれり、然れば人間の身として是非のわかちを知らぬは猿にも劣れりとかんじ給ひ、此事を旦那がたにてかたりたまふ、すこしもいつはりのなきとなりけり。

○又其ころ猶右衛門といへる百姓あり、常に百姓の業をなさず、殺生をこのみ大酒博奕はいふに及ばず、其外わるき事のこりなく大いたづらなるもの有り、常々猿をかひ置ける、然るに猶助といふ一子あり、嫁をむかへしのち姙娠にて七ヶ月といへる頃、右飼おける猿何やらんすこしいたづら致しけるとて猶右衛門大にいかり、猿を柱にくゝり付七八日も食をあたへずせめければ終には飢死なしけり、かくて此嫁十月に滿て出産する處の女子目つき面つき猿の如くにして全身しかも五六部ほど毛生てさながら猿のとき小兒なり、これ全く親の邪見孫にむくふ處にして、和尚まのあたりに見給ひしとの物がたりなり、おそるべし。

○一休初發心のとき、越後路へ修行に下りたまふに信濃上野のさかひ近きところに湯澤といへるところにて、はや日の西山にかたむくゆゑ、宿をこひ給ふに、在所のもの申すやう、御房宿を求め給ふならば、むかうに見ゆる山中に古き堂あり、これへ行き一夜を明し給へ、さりなからかの堂には天狗住むよしいひて住持するものなく久しき空院なり、その心して行き給へ、和尚それこそ望む處なりとてやがて行て見給ふに、此邊すべて山さくして陸奥の方へ峯つゞきにて、駒ヶ嶽坂戸山清水白峯松ヶ岳などゝていづれも高山ありて物すごき土地なり、和尚かの堂へ行きて佛だんの上におがり、隱形の印をむすび心をしづめておはしけるところに、夜半のころうへの山より、人ならば二三十人許の音して、さゞめきはたり來る、一休すはやと思ひ見給ふ所に、堂のうちへむらがり入るを見れば、色白きけなげなる法師を手ごしにかきのせて、小法師ばら二三十人前後をかこみて來りしが、此法師小法師ばらを庭にをひ出して、なんぢらはあれにて遊ひ候へといふ、かしこまつてばら〳〵と外に出て遊ぶ、とさに此僧一休を見て、それにかくれ居給ふ御房これへ出られ候へといふ、一休さては見付られたりと思ひて、何の用に候やと申さるゝ、いや御房の隱形の印のむすびやうのあしきゆゑ見え申すなり、是へおはしませ敎へ申さん、さらば物見給へ、所詮なきやつばらに見せ申さじとおひ出したり、先印むすびて見たまへ、さらばとて一休むすびたまへば、よし〳〵只今は見えたまはぬぞといふてそのゝち

は主從ともにうちまじはりて舞あそび、わかつきがたに奥山へかへりけり。

○一休關東心外寺にしばらくおはせしが、此住持もそのかみ同學なれば、むかしのよしみを思ひ種々馳走したまふ。あるとき一休とせんのあまり客殿に出て四方をながめておはする折から地侍と覺しき人供四五人をつれ來りて一休にむかひ、いかに御坊、此寺の寺號山號はなにと申すぞ、一休こたへて山號は別法山寺號は心外寺と申す、貴殿はいかなる御方にてましますぞ、某は矢奈木雪折と申して、此邊近き在所ものなり、此寺はかぬ〳〵承りおよびしまゝに參詣申すなり、しかるにめづらしき寺號山號なり、それ三界唯一心外無別法にして心の外に法なし、いか成をか是別法心外寺とたづぬるに、一休とりわへず答へていはく、それ柳の枝に雪折なく、いか成か雪折とこたへ給へば、此侍大にかんじさても〳〵答話かしこき坊主かな、我等は内々たくみてさへさしあたれば失念する事あり、又はかつて出ざる事多し、そく時にかやうのへんとうせられし事あつぱれの御坊かなとぞかんじける。

○又御雲水のころ駿州富士郡大石寺に知音の僧おはすとてたづね給ふに、互になつかしう思召し、しばらく足を留め給へとて、少しの滯留ありしより、近村の凡俗を集め、寺僧の法談など給ふを助講などありし折から隣り村の村山といふに喜兵衛とて大百姓あり、常に隙なる身なれば殺生のみ樂みとせしが、庭先の柿木に鳩二羽來りとまりしを、得たりと鐵砲とり出したち

まち一羽をうちおとしけるに一羽の鳩おどろき飛去りしが、また元の枝へきたりとまりしを、又、も玉をこめかへ同じく打落せしが、ふと一休和尚の法談を思ひいだして、鳩に三枝の禮ありと聞しが、まさしく此鳩はつがひのはとにして、雌をさきへうちしや雄を先へ取りし事や、殘りし鳥の元の枝へ來りしは、死を共にせんと我が玉さきを待ちし事うたがひなし、扨々鳥だにも夫婦の約あるものを、まれに人間とうまれながら、殺生をこのみ、是までわまたものゝ命をとるを樂しみと心得し業因のほどこそおそろしやと、たちまち發心して、一休のもとへはしり行き、若さよりの我があやまりをさんげして、御かみそりをさづけさせ給へとて、其座にて剃髮染衣の身となり、全證居士と法號をうけ、明くれ念佛三昧に入り、八十有餘の年齡をたもち子孫榮へけるとなり、其とき法名を下さるゝとて、

こゝろよりくびにかけたる傀儡師兒をださふと佛出さふと

○越前の府中に長野銀助とて、馬上の名人あり、一休福井より上り此府中に二三日とうりうして萬をとり行ひ給ふに、彼銀助きゝおよび、御齋も上け申したしとて和尚をむかへ、御齋もすぎて四方山のものがたりのころ、さる方よりはね馬を曳きてきたり、御六かしながら此馬を只今二馬場せめて給はれと申すに、やすき事なりとてやがて馬引よせのられしが、此銀助と申すは元來せんきの病にて陰囊大に腫たりけるが、鞍の前輪につかへて事のほかのりにくきやうす

を一休見てをかしくおもひ、

はね馬のまへわにかゝる大ふぐりきんふくりんとこれをいふらん

とよませられければ、銀助大に興じけるとなり。

○又下總國相馬郡を通り給ふ頃、和知川といへる水上に大ぬまあり、此近村にあるものゝ妻十二三歲なるまゝ子むすめを右の大沼のほとりへつれて行きて、此沼のぬしに申しけるは、此娘を其方へ參らせ聟にし參らせんと、たびくいひけり、あるとき又件の沼へつれ行き、かくの如きいひけるに做に空すさましくなり、雨風しきりにして、沼の水立、すさまじき事かぎりなくいそぎ、家につれ歸りしに物のおとより追くるようにおぼえければ、いよ〳〵おそろしく思ひ、かの娘父に取りつき、日頃我等を沼へ母のつれ行きいひし事をかたるに、其夜大きなる蛇來りてくびの上に舌をうごかして、此むすめを見てはしばらくありてはうせぬる事度々なり、爺親此事なんぎに思ひいかゝわらんとなげきかなしむ、其頃、一休同國にまします事、國中にかくれなければ、知識と聞きたづね行き、因果の仔細を語りあかしなみだを流して賴みければ一休さても不便の事やとて猶もくわしく尋給ひ、さらば我文を書て得させん、かさねて蛇きたるとき、此文をとなへ聞かせよ、二度きたるまじとて其文にいはく、

此女我女也母繼母也無我冤爭可取

かくとなへきかすべし、重て來りまじとかきてつかはさるゝ、此文の心は此女めは我子なる母はまゝはゝなり、我がゆるしなくてはいかでかとるべきといふ心なり、男よろこびくだんの蛇の來るを待ける所に、又れいの如くすさまずくして來る、さればこそとおもひ、さづかりし文を一々となへ聞かせしかば、たちまちきへて失せにけり、畜類といへども物の道理を能わきまへ、二度來らずと申し傳へ侍る。

○こゝに常州德念寺と申す淨土寺あり、住持の長老の且那にて有りけるが、いかゞおもひけん、先祖より代々淨土にて候が、不斗禪寺へ參り久しくわづらひて程なく死しけり、其子すなはち禪寺の住持にゐんどうを賴むよしを、かの德念寺ほのかにきゝて、中々先祖よりわが且那にまぎれなし、しかるをなんぞや禪家へわたしてゐんどうさせん事、前代見聞の耻辱なるべしたとひ、此事に於てはすくびに、おほふとも、わが引導せんものをと思ひ定て在所のもの其外あふれものを二三十人ばかりかたらひ、みぢんになさんとひしめくを、此よし禪寺に聞へしかば、いや〳〵さやうな六かしき死人を、取をかざるとても何かはくるしかるべし、入らざる事なりとて打すてぬ、三十五日のとぶらいすぎて、此德念寺俄に狂乱して狂ひ出で色々の事を口ばしりけるを、何れも且那衆めいはくして、座敷牢を作りおし入れおけば、牢をやぶつて出で、屎をたれては手ににぎり、あるひは貝にぬり又は已が食する飯器に入て在所中をもて歩行き丸裸になり、着ものずん〳〵にくひさき、家々へとび入り、人の妻子をおし付うち倒しなどして、さま〴〵の惡わるくくるひけるほどに、終にくるひ死にしゝける、やかて火葬にしける山のごとくにつみて燒ども少しも燒ず、弟子もこれをみて大におどろき、これ只事にあらず、石などを打くべたるやうに、黑くはなりけれども、灰にもならず、ふしぎにおもひ炭木をいかゞはせんと評議なす折から、一休和尙其ころ常州にまし〳〵けるが或人の申すやう、上方より一休和尙といふ知德の僧下りゐたまふ、此和尙に委細を尋ね見たまへかしと申しける、弟子坊主幸ひの事かな、さらばとて弟子一休へ參り、しか〳〵と申しける、一休きゝ給ひて、そは不便のとかな、それ佛法と申すは人我の相をとゞめて、心を納るをもつてせんとす、まして僧法師は大じひ心をもつて專らとして人をおしゆるものなるに、愚痴放逸にしてかばねをあらそう事、生なから犬に似たり、あさましき次第なり、それがしたちまち灰にして參らせんとて諸行無常の四句　文を書たまひて、是を死人のうへゝなげかけ給はゞ、即時に灰となるべし、早とく〳〵とあれば、忝なしとてとりて歸り、彼ふすぼりたる死人の上へなげかけければ、あぶらをかけてやくが如く、べら〳〵と燒て忽ち灰とぞなりにける、ふしぎなりし事ともなり、さるによつて和尙を佛の再來といはぬ人こそなかりけり。

○一休北國より京都へのぼり給ふとき、越前敦賀の宿をうち過ぎ、かいづの山中に一宿し給ふ

が、何ものかいひけん、今よひ此宿にとまりしは、都に名高き舞まひの大かしらにて、いまは入道して世間をすて、諸國を修行し給ふと承る、いざ〳〵方々みな參りて一ふし所望せんはいかゞ、皆々是は一だんの事かなとて、大勢旅宿へ詰かけて、一休に對面し、御坊はうけたまはり候へば、都がたにて舞の大かしらどのゝよし、遠國遠里までも其沙汰かくれなし、幸これに一宿し給ふこそ、後のかたり句になし申さん、一ふし舞てきかせ給ひ候へとせめかけて申しければ、一休は大に迷惑し、これは思ひもよらぬ仰かな、見給ふごとき坊主なれば、經陀羅尼などは少しぞんぜたるが、其舞といふものはさらにしらずと斷られければ、在所の者ども、いや〳〵なにとのたまふともたゞ一ふしの所望に候、せひ〳〵御舞なきならば、今宵の御やどはかなふまじ、いかに〳〵とせめかけて所望す、一休さて〳〵それは迷惑千万、さだめて人ちがひなるべしとさま〴〵わび給へども、皆もんもうなる里人なれば、更に合點せず、是非とも〳〵と所望すれば、しばし案じて、愚僧けつして其舞まひにてはなく候へども、一ふし舞はざれは御かへりなくばせんかたなし、愚僧わかきときに、高舘といふ舞を少し見覺えたるが、御ぼつかなく候へども、一ふし舞て見申さん、先鈴木三郎が紀州藤白より奥州衣川まで着し所を少しまひ申すべしといふに、在所もの、高だちが何やらんしらざれども、早く〳〵といひけるに、一休座をあらため扇をてうとうちて、さる程にすゝきの三郎しげ家は旅のしやうぞくめさ

れつゝ、藤白を立出で、奥州さして下られけるほどに、くだられけるほどに、〳〵、〳〵、と凡二三十ぺんくだられけるほどにとどかり、くりかへし〳〵申されければ、里人等はふしぎして、いかに御坊さきほどより同じ事をくりかへし〳〵のたまふは、いかゞの事にや、早や舞をまうて見せられ候へ、一休さあらぬ顔にて、三郎が紀州より奥州まで、七十五日が日數をかゝりて衣川へつかれたる事なれば、先くだられけるほどにと三十日も五十日も申しつゞけにして、それから衣川に着しての舞をまひて見せ申すべし、おの〳〵にも此家に八九十日逗留して衣川の處を見たまふべしと宣ひければ、いづれも顔を見合せ大にあきれしばらくの間さへ、くだられけるほどにてたいくつし侍るに、いかでか七か五日が間きく事はなるまじとて、皆々家にぞかへりたるとなり、是も一時の才智なりと人申しあへり。

○今出川通によしや如齋といふものあり、兼て和尚とまじはり厚かりしが打つゞき用事しげくて、久しく和尚のもとを尋ざりしかば心にやかゝりけん、文をしたゝめて此頃は用事つどひ候ゆゑ、御見舞も申し上げず、御ぶさた申候、いづれ近々御見舞申上ぐるなど、斷りの文をつかはしける其返事に、

見舞とて見まふてくれぞ見まはずとよしやじよさいと思ふ身ならば

とよみてつかはされける、如齋これを見て御坊の今にはじめぬかるき御事かなとかんじけると

ぞ。

○一休和尚高野山へ登り給ひ、四方の山々をながめてさても聞しより尊きけしきかなと、ながめおはしけるに、高野ひじりとも立いできて、一休を見ていかなる人ぞと尋ねければ、愚僧は名もなき道心者にて侍るが、此山はじめて一見仕候へば、餘り風景がおもしろく侍れば、こし折の詩か歌か一首つかまつらんとぞんじつく〳〵として侍るとのたまへば、ひじりども一休とは中々おもひがけねば、しほらしき事をいふ御房かな、とわざにいへるめくらの垣のぞき、すぐちの嘯で心なぐさむとや、その身はかゝみてこそとて、うそさむげなる形ふりにて、衿は此山の名産高野がみそりの及よりもうすきゑり付にて細首のいとあぶなき體にて詩歌を案づるとはできたりと、口々にいやしめ笑ひけるに、一休耳にもかけず空うそふきておはしけるがやう〳〵一首仕りたり、硯紙またはれと申されければ、何一首出來たるとや、さらば拜吟仕るべしとうち笑ひ、硯紙を出しければ一休筆をとり、彼東坡居士が經山寺の詩を山がたに作りしを例として、

七山秋葉落
五山春開花發空

三山迎連峰報下佛心亦
一山高近二都卒内院一土上進空。
二山閑表二華藏世界一地醒寂。
四山平幽臨化佛惱亦
六山夏涼風煩寂
八山冬素雪

かくのとく即時に筆をとり、さら〳〵と認め給へば、一山のひじり大におどろき、さても形容に似合ざる見事なる筆跡といひ、又目なれぬ詩の體かなと、明たる口をふさぎかね、扨〳〵先刻は皆々よしなき事ともをいひて、御僧をはづかしめ候事かへす〳〵はづかしうこそ、いかなる人ぞ御名をなのり給へと口々に申しければ、其詩の下に候とのたまへば、まことに小文字候が何一とか申すぞとたづねける、其中に一人のひじり眉をしばめ、此詩の筆跡をよく〳〵見るに、京紫野なる一休和尚の書なり、さるから一としるされたり、さればこそ曲者なりとふり歸り見るに、和尚は彼方へ下向したまふ、ひじりたちそれとゞめまねらせて、過言をあやまれとてはしり付て引とゞめ、一休和尚とも存せずして段々無禮を申たり、御免ありて先々坊中へ

入らせ給へとゐんぎんにのぶるに、一休いや〳〵何も斷はり給ふべき事には さら〳〵なしとて、きげんよく坊へ歸り給へば、ひじりたちさま〳〵馳走をまゐらせける、さて厚く禮をのべ下向し給ひける跡にて、一人のひじり申すやう、かゝる名僧また登山し給ふ事まれなり、願くば大師の御影に贊をたのみ申したらばいかにといふに、いづれも、尤と同じ、さらば今一たびよびかへしまゐらせんと、又追かけ奉るに、一休は何事にやと仰らるれば、しか〳〵のよし申すに、一休わらひ給ひて、夫はどの事また立歸らずともなるとなり、御影を急持きたられよとて、道なる茶屋に、休ておはしける、人々おどろき大師の贊を請ふに、立ながら思案もなくなさるゝ事聞きしより大博學の祖師かなと、舌の根をふるひけり、扨大師の御影をもち來りければ、

弘法大師活佛死ねば野はらの土となる

と一筆にさら〳〵としたゝめ給ひて下向し給ふ、人々ふかき事もありといそぎ登山して學匠に見せければ、格別のおどけ事ありしかば、またひじりども口を得ふさがざりけるとなり。

一休諸國物語圖會卷四 畢

一休諸國物語圖會卷五

○さても一休和尚能州蜷川村の草庵にましませし頃、泉水のきしに水の上へおよんで横ばひにねたる松のありける、弟子衆をあつめて、此松を眞直に見たるものやあるとたづね給ふ、皆々立かはり入かはり見られけれども、横ばいの松なり、其とき蜷川新右衛門參り合せて、われらいかにも眞直に見て候と申されければ、さては如何にと仰あれば、まことにいかみてこそ候へと申されければ、和尚手をうちてよく見られたりとて、五十則をゆるすと仰られける。

○和尚熊野山へ御參詣まし〳〵て本宮へあがりたまふ、ころしも春の半なれば、山々谷々の櫻、都三月の頃よりもいと目出たかりければ、拜殿にうちのぼり、四方の風色をながめましましける處へ、社僧一人まかり出て客僧はたゞ人とは見參らさずと申しければ、中々われらはたゞ人にては候はず、御らん候へ出家にて候と申されければ、彼僧はきもをつぶし、こは興がる御僧かなとひとつふたつと物がたりし給ひて、和尚この僧は少しはなせる者とおぼしめし、高野山の詩の事をおぼし出させ、此山にても一首を作りてなぐさまんと矢たてをとり出し、さら〳〵と書て彼僧に見せ給へば、其まゝ神前へそなへて、さて〳〵御筆跡見事に候、都人と見申すは

ひがめかと申しければ、和尚答へでよく社察しられたり、われは都紫野の一休といふものなりと仰られければ、さてはかねてきゝつたへし和尚にてましますかとて、かの神前にさゝげおきしをとりさたり、とてもの事に御名を書付給へとねがふに、さらば後の代かたり草ともなりなんと、一休老人偶題とぞ記し給ふ、其詩に、

七山—里　放—光
五山—瀧　吟—落—碧　三—
三山—海　浪—高　船—片　雲—社—景。
一山—廟　等ゝ一　扶—桑—神。片。漲。
二山—客　成ゝ群　數—萬—人。輪。塵。春。
四山　樓　鐘—動　月—輪—惱—宮
六山—谷　洗—流—煩—本
九山—花　猶—馥

一休老人偶題

さて彼僧は一休和尚なりとて自宅へ招し、横槌で庭をはき、杓子で芋をすり、御馳走申事おろ

かならず、折ふし花のさかりなれば、庭前のはなをも見たまへとて、酒肴をいだしてなぐさめ申す、さてかの僧申しけるは、此山へまた御越なさるゝ事もはかりがたし、末代の寶ともなすべければ、何にても一筆遊し給れと申しければ、安事なり、御望みあれとのたまへば、さてもの拜殿にての御作の詩体はいにしへよりもかゝる体の侍りけるかとゝふに、いかにも古へよりわりし事なり、唐土の東坡居士が徑山寺にて作りし詩体なりとかたり給へば、さて〳〵めづらしき詩や、されどかゝる山奥に住みて、とに學文もなき文盲の我々が目なれ耳なれず候、相成べくは愚なる我々が耳なれ目なれたる事をねがふなりと申し上げゝれば、和尚うちうなづき給ふ折から、春風ふきて櫻のばら〳〵とちりければ、貫之のうたを思し出されて、

櫻ちる木のした風はさむからで空にしられぬ雪ぞふりける

これはいかにとのたまへば彼僧いや是もいまだ、耳なれ申さるゝ處なりといふ、又さくらの花の風にちらされ、さつ〳〵とみだれければ、其まゝ、

雪やこんこあられやこんこ御寺のかきの木に一ばいふりつもれこんこ

是はいかにと申されければ、彼僧大にうちわらひ、さてもおどけたる御僧かな、いかに耳なれ目なれしものとても、それはあまりにと申せば、一休もわらひ給ひて、實もつともなり、いで〳〵其望の目にも耳にもなれしとをかきてまいらせんとて、かく、

きねが鈴海山木こり谷のこゑ入あひのかねに庭前のはな

とあそばしければ、かの僧さてもよき御かるゝ口や、實に見なれ聞なれしものをのぞみけるこそ愚なれとて、御口のかるゝをか心じ侍る、かくて色々馳走申しければ、次手なればかの東坡が詩を書おくべしとて、

一山花發二茂林一　二山遠路幽深、沈、吟、尋、
三山雲飛一片偸一　四山水碧一沈抱一相
五山鳥巣來一僧問　六山猿樹還
七山客　八山花發二茂林一　九山遠路幽深
十山雲飛片々　十一山水碧沈々
十二山鳥巣偸食　十三山猿樹抱吟
十四山僧來問レ道　十五山客還相尋

かく書あたへて、いとま申してぞかへり給ふとなり。

○爰に堺にての事なりしに、一休和尚へ常に參りて、御心安く御意を得たる又次郎といふ町人

ありける、あるとき河豚汁をしたゝか食ひてけるが、殊の外に醉ひ、終にその日のうちに死しけるが、今はの時に申しけるは我世にありしときは死る事はいつの頃ぞやと思ひけるなれば、後世とて願ひ置し事もなく、されども一休和尚へ常にしてう申し御物がたりとも承りし結緣あれば引導をもたのみ奉れ、かゝる不慮の死を仕けり、さこそ哀れとも思召すらめ、かならずといひ置て終にむなしく成りにける、妻子眷屬なげきかなしみ、遺言の通りつぶさに一休和尚へ申し上げゝれば、いとやすき事なり、扨々ふびんの仕合と仰られける、しかる處へはや時分もよく候間和尚樣御出をあふぎたてまつると再三人をおこしければ、一休仰られけるは、いやゝゝわれら罷出るにおよばず、引導つぶさに書てつかはすべし、誰にてもよみあげてほふむれよと仰られければ、妻子なげきて遺言にて侯間、ひらに御出下されよ御慈悲なりとさまゝゝねがひければ、一休のたまひけるは、いやゝゝ我等が出ればかへつてかれがまよひとなるなり、別書してつかはすべしとて、

海中有毒魚一　名云河豚魚一
面腹白背斑　人不レ食此魚一
嗚呼痛哉又次郎食レ之忽死來

彼歳五十四　彼歳五十四

合て數珠一連百八煩惱のきづなをふつときつて行たい方へつゝとゆけ。
木曾十七寅の年角のないこそ添よけれ。

とあそばしてつかはされけるとかや、しかればおの〳〵肝を消しけれども仰なれば其如くにおこなひけるが、其引導の書きたるを、其子供秘藏して今に傳へ、其家のたからとし、又もなき墨跡にて代々所持仕りて有りけるとなり。

○扨一休和尚の御袋は淨土宗にて有りしとかや、一休常にかな法語をかきてつかはし、又は水かゝみといふ雙紙を送りて道ををしへ給へども、しか〴〵御さとりもなく、明暮たゞ念佛のみにて過し給ふ、一休聞しめし一段の御心入なり、念佛にて佛にならせ給はん事はうたがひなけれども、此所より愚僧が庵へ御出あらむに何のうたがひなく御出あるべし、是よく常に道しり給ふゆゑに、苦もなくうか〳〵とありき給ひても、庵へは御出有るなり、又かた田舍人がわが庵をたづね來らんに、いか程道にまよひても我等が庵ある上は何れたづねあふなり、そのたづぬるまでの心苦しきわいだがまよひなりと仰られければ、しからば何にても示し給へと仰られける、一休さあらば一句申て見まゐらせんとて、

目なしとち〳〵聲についてましませ

皆人のさとりとやらんいふことを悟る、其ならひはじめに父母もなく、とつと已前の我身は何

なるぞといへどもといふものを知らずと丶がむるものもしらず、然ば釋迦彌陀はよし日のとはずがたりやといふものはとはずがたりかといひければ一默しておりける、此心を見給へと仰られければ、御袋のいはく、

いへはいはすいはねはむねにさはかれておもはぬさきや佛なるらむ

とあそばしければ一休よろこびたまひてとりあへず、一首をよみたまひける、

いまは丶やこ丶ろにか丶る雲もなし月のいるべき山しなければ

とよみ給ひて、御工夫尤〳〵とてよろこびてかへり給ひける。

○一休和尚の旦那に狗子佛性の話をさづけ給ひしに、この人狗子とは犬の子なり、これに佛性とは何とも合點まゐらずと申しければ、聞て見給へとて仰られけるは、

犬の子にあやかる人のしわざこそほとけともなり地こくへも入れ

むかひとの丶ゑのころはまだ目があかぬおつぼにま丶を入てころ〳〵や

と仰られければ、いま目があきて狗子のところはやう〳〵わかりて候が、超州の有無の處は、千年工夫仕り候へども愚痴の我等は得道仕る事はなりがたしと申しければ、歌よみてきかすべし、此歌を常に吟しで心得て見られよとて、

なしといへはなしとや人のおもふらんこたへもぞする山彦の聲

ありといへはありとや人のおもふらんこたへてもなき山びこの聲

とわそばしければ彼ものしばらく工夫して、しからば有ともなしともしれぬものにてござ候かと申しければ、

有無をのする生死の海のあまをぶね底ぬけてのち有無もたまらず

と仰られければ、彼人此うたにて得心して、一首、

有無ぞしるなにおもひけん趙州もなかりしさきの犬の一聲

と申しければ、一休きゝたまひて、おつぼのまゝを、一くちまゐりけるよとてわらひ給へは、

且那禮拜して歸りけるとなり

○さて爰に頃しも八月下旬なれば、大風大雨しきりにして洛中の家堂祉塔もそこねければ、蜷川新右衛門取る物もとりあへず、一休和尚へ御見舞申して、御坊御内に御ざるか、何と〳〵との外なる大風大雨、御寺はいづくもそこね申さず候やと申しければ、一休出合たまひてよくこそ御心付候ものかな、誠にめづらしき大風にて候、さりながら當寺は何事も候はずとて、

わが宿ははしらもたてずふきもせず雨にもぬれずかせもあたらず

と仰られければ、其御庵はいづくのほどにて候ぞと申しければ、一休わらはせ給ひて、さればこそ大事のことをおたづねおれとて、

わが庵は都のたつみしかぞすむよをうぢ山と人はいふなり

と仰られければ、さては喜撰法師と相住なされ候かとたはふれければ、いや喜撰法師にかりて居るなりとありければ、さては借家どのにて候かと申してわらはれしかば、一休また一首をよみ給ふ、

かりの世にかしたる主もかりぬしもかすとおもはずかるとおもはず

とよみ給へば、新右衛門此歌を感じて扇子にかき留め、かりそめに參りても得道の德侍るとてよろこびて歸りけるが、門より立かへりて、さて〳〵をかしきたはふれ事仰られしにうかゞひ申すべきと思ふ事を打わすれかくすでに歸らんと仕り候、此心はいかゝ心得申すべきとて、

吹ときはものさはがしき風なるがふかぬときにはいづちなるらん

と申しければ、そのまゝ御返歌ありける、

吹ときはうべさわがしき山風もふかぬときにはふかぬなりけり

と仰られければ、新右衛門ものをもいはず、うなづきて暫く禮拜をなして歸りしとなり。

○爰に西の國の大名身まかりける、今端のときに申されけるは、我死してのち、種々の佛事をもつとむべからず、紫野の一休禪師を請じて引導を賴み申せ、是より外に望みなしとて死したりける、人々なげき御遺言なればとて、急ぎ都へ使者をたて一休を請じける、一休折節在庵に

て易きとなりとてかの使者と丶もにうち連て下り給ふ、既に葬送の日限きはまりしかば、音に聞えし紫野の一休こそ、此國の某どの丶御引導の爲とて御下向ありしとて、國々島々より聞ほどの人足を空にまとうて貴賤くんじゆし、御引導を聽聞せむとぞひしめきける、葬禮の儀式天には花をふらし、地には錦を散て其よそほひ詞にのべがたく、其日になれば數万の見物、かの一休の引導をぞ聞くべけれと、おしわひへしわひける、扨玉のこしをかきすへければ、一休立出たまひ龕の前に一默し給ふ、諸人すはや今や〳〵と耳そばだてゐるに一言をもいひたまはず、天を仰ぎ口をくはつとひらき、地を見て口をふさぎて、其ま丶すつと退き給ふ、彼大名の御れん中きん達をはじめ一門家來のともがらまで是はいかなる御事やらん、せめては一句をしめし給はれと、御衣の袖にすがりつ丶、諸人の見物も興をさましければ、一首の歌をよみおき、都をさして上りたまふ、人々是非なくその歌を見れば、

我はた丶後世のをしへをしらぬなりわうんの二字のあるにまかせて

とありければ、皆人これをきゝて、あともうんともいはれざる御僧かなと、默して感じあへりしとなり。

○又一休堺へ御下向のとき、淀の河瀬舟に乘りたまひけるに、乘合に山伏ありける、御坊は何宗ぞと問ふ、一休われは禪宗なりと答られければ、禪宗には我等が如き丶どくはあらじといひ

ける、一休申さる丶はいかにれきどく多し、其方に何にてもきどくあらば見せたまへと仰られければ、いで我等が法力にて此船のへさきに不動をいのり出して御目にかけんとて、一にこんがう二にせいたかをはじめてもみにもんで祈りければ皆々のり合のものども目とめを見合ゐるところにあんのごとく、舟のへさきにたちまち不動の像火えんをはなつてあらはれたり、其時山伏ぢうめんを作り、おの〳〵おかみ給ふかと申しければ、皆人ふしぎの思ひをなしけれ共、一休はさらにふしぎにもましまさぬふりなり、いかに禪僧か丶るきどくは如何にし給はんとせぐりかけて申ければ、我等が奇德には身より水を出して、あの火焰をはなつ不動尊をけして見せん、隨分いのり給へとて、かの不動の像の火えんに小便をした丶かしかけ給へば、火焰はそのまゝきえて山伏の法力つきけれ、皆人一休を拜禮して奇異のおもひをなしけるなり、さて舟よりおりて陸路をうちつれ行處にむかひより、なるほど大なる犬の山河にもひゞくばかりにほへてか丶りければ、山伏申すやう、いかに御坊さきの行くらべにてそまけたりとも、あのおそろしき犬のいかりを止め、たゞ今是へよび寄る法力をあらはさんが、御僧はいかにと申しける、一休是はいと安きとなり、まづ祈りて見給へとのたまへば、山伏いらたかの赤木の數珠をさらり〳〵とおしもんで、一いのりこそいのりけるか、一切犬ははへやまず、手元え來るねんもなかりければ、たつさまやよこさまかけて、十文字犬ののんどとめよ、あびらうんけんそわか

〜といへども、いぬはほへやまず、一休をかしく思しめし、そこのき給へ某はそれほどの事は、あびらうんけんもそわかも入事にはあらず、あのいぬのいかりを止め、たちまちこゝへ來らせんと、ふところより畫飯のやきめしをとり出し、かの犬に一目見せて、ころ〜〜〜とのたまへば、山伏もさもをけし、皆人さても格別なる心得かなと、感せぬものこそなかりけれ。

○爰に一休和尚の末期の句とて、世の人の口にまかせけるは、その數多し是が實なり是は虛なりといふも不實なり、いかにとならば彼も御影を書付て賛をもとめ、これも賛をもとむは、其賛には出るまゝにわそばしけるとなり、ある處の御影の賛に、

朦々而三十年。　淡々而三十年。

朦々淡々六十年。　末期脇ニ蕉捧ニ梵天一。

此句々もわり、又の語には、

借用申昨月昨日、返濟申今月今日、

借證し五つのものを四つかへし、本來空にいまそもとづく〜。

又ある末期とやらんに遊しけるとて人のいへるは、

生や死や、死や生や、柳はみどり、花はくれなひ、喝。

柳不レ綠花不レ紅、御用心〜。　一休題

○又ある人一休の御寺へ用事ありて參りけるが、或夜沙彌小喝食をこまづけて、一休の御遺言どもをおがみ侍しに、一々名譽を極めたる事ども多かりし中にも、自嘲自賛の御影を拜し侍りしに、かうべはいかにも長髮にして眼をきつと見出し、うす赤き衣をめし、丸竹の杖杖をつきいまにこしをかけ侍りし賛に、

柳は綠花は紅、
行脚事畢。　今日時節。
折ニ主丈子。　燒ニ六月雪。

○又ある舊家に所持せる自嘲自賛を拜見せしに、是は蜷川村の艸庵に居ませし頃にや、是も髮長くまし〜卓にかゝり給ふ山居の御影なり、

山居窮僧聽松風。
不須臨濟德山禪。
一箇住山三十年。
公案工夫了畢後。
長松風破罷參眠。

虛堂七世龍寶門客東海純一休老
書與詩一筆印

とそ有りけれ、見る目もすさまじくて身の毛もよだつ事なり。

○一休の御こゝろざしをおもひ見るに、寒山子の風相にかはる事なし、寒山子の詩句に、

我心如寒月。　秋水清無底。

とありしが、一休の道歌に、

我こゝろそのまゝほとけいきほとけなみをはなれて水のあらばや

とよませたまふ、これ寒山子の詩の心なり、寒山は文殊なりといひ傳へしが、一休は定めつ普賢なるべし、されば狂雲集に其詩文多しといへども、たゞの人の目には見へぬをにくみて、其中より金つんぼの耳へも入れやすき詩を書きぬき盲の目にも見あきらむべきひらがなにてしば

りつゝ、子供にも覺へさせ、大人にも未だしらぬ人に見せ侍らんと、かたことをかへりみず、反平をわきまへず、人の書あやまりをもつてわがあやまりとす、我あやまりても苦しからず、こかくなん出しぬ、

一休和尚狂詩二十首

題鉢敲

盡不笠兮夜不茵。　東西南北自由身。
瓢箪扣罷有何益。　花開十方淨土春。

題影法師

元來有物不離身。　揚手同揚伸足伸。
全躰分明無面目。　起居動靜似侮人。

彼岸

今日彼岸欲開鉢。　餘身貧乏雨晴稀。
無簑無笠又無杖。　結句食犬引腰皈。

梅法師

往昔江南沒落時。　起青道心成法師。

欲問横斜疎影古。　伊勢壺底暗皺眉。

虱

獨臥寒衾患幾千。　餘身貧極有誰憐。
夜深依被半風食。　天至曉鐘未作眠。

男　根

一生忍衆動焦身。　八寸推根尚勝人。
入道修行若時事。　須臾老去革頭巾。

女　陰

元來有口更無言。　百億毛頭擁九痕。
一切衆生迷塗所。　十方諸佛出身門。

宿少人三首

紅顏綠髮冠沙喝。　況忘御年十二三。
若有貧僧憐愍志。　寮前吹味致推參。

其　二

少年十五月如出。　一笑紅顏花似開。

木石無心多世上。　嗚呼是此玉瑕哉。

其　三

若衆天然好富貴。　摺切爭可入御意。
無酒無茶又無餅。　山僧風流只文字。

贊兒文珠

看書忽忘七佛師。　雲鬢霧髮少年姿。
手中經卷是何字。　定有愁人小艷詩。

贊阿彌陀佛

汝是桑願。　一人不救。　我無一願。
萬民不泄。

贊大黑

大黑尊天其面黔。　諸人信仰置棚陰。
平生愛鼠是何事。　足下平囊無用心。

贊布袋

菩提煩惱。　睡裏乾坤。　寂寂恒一。

佛無虛言。

青地扇切箔　日本晴時如見星。
本眞白物染青々。　宇治川畔乱飛螢。
又有縱横思出事。

八島之壇浦合戰圖

射手名人能登守。　兵法達者源九郎。
秋風有恨八島浦。　狼籍忠信亡菊王。

一谷合戰圖

万騎下山源氏兵。　平家運盡出堅城。
最江不洗英雄恨。　日夜風濤戰鼓聲。

源九郎流弓圖

漫々滄波已落弓。　恰如初月掛晴空。
忽伸左臂取來者。　天下英雄在彀中。

熊谷招於敦盛圖

生年十六美男兒。　身命碎珠回馬時。

熊谷道心從此發。　法然庵室念彌陀。
萬騎如雲宇水邊。　佐々木四郎宇治川先陣圖
功名誰出四郎上。　東關諸將各爭先。
一馬化龍何着鞭。

右

一休和尚往生道歌百首とて

阿彌陀佛さとれば即ち古此不遠まよへば遙のにしにこそあれ
三國の法はしな〳〵多けれどしやかのをしへにまされるぞなき
儒釋道三つのをしへの別ならず善に善報あくに惡報
むかしより智惠ある人の佛道は二世あんらくのをしへとぞなる
三ぐくの世々のかしこき君臣にしやかのをしへを仰がぬはなし
三寶に歸依する世々のためしみよとく士あんおん士民福樂
一心にまとの道にいる人のその行すへは子孫はんじやう
公家武家のぼだい信ずる手本にはかまたり大臣多田の滿仲
道にいるすゑはんじやうの例には藤氏源氏家をみてしれ

せんぢやうは忠孝多しとんせいはげにたぐひなきわかきものゝふ
ものゝふのとんせい修行手本とて西行法師さてはかまがへ
今も又十繻八素の友がなしろさんのむかしおもはれぞする
とんせいは不過の人はさもあらめ名とげてぼだい入はうどんげ
大唐の如福禪師と樂天はともに念佛產禪とぞきく
熊谷がとんせいしゆ行功德みよおんしん平等自他の成佛
四大五蘊みなくうにして中こそまことの念佛產禪とぞいふ
家にあり不忠不孝のともがらはとんせい修行あやしかりける
成佛は異國本朝もろともに宗にはよらず心にぞよる
おや主に忠や孝ある人々は家にありてもぼだいたのもし
萬法の行はよろづの事なればこゝろ〳〵に道をつとめよ
世をのがれ修行の道は別でなし智者愚者ともに產禪念佛
貴賤智愚僧俗男女別なれどぼだいの道はひとつ事なり
佛說はぼだいねはんの眞理にて二世安樂のをしへなり
善修すれどあく事きたると恨なよ先世ざいがう卽位消めつ

皆人のねはん常樂しらずして生死無事をなげくあはれさ
佛だに定業のがれ給はねばはやくいんぐはのうくふ幸
佛性は不生不滅の物なればまよへば生死流轉とぞしれ
何事も定業なりといふ人もまことのときはおどろきぞする
佛道にさとれといふは何事ぞいんぐはぼだいを得とくする也
よの常に工夫觀念つとめなばまことに心うごかし
智惠あるは若も道をつとむるに老てぼだいをしらぬおろかさ
人はたゞ平生志願なかりせば修身齊家もいかゞあるべき
何事もせんぜのがうといふ人のぼだいつとめぬこれぞ猶ぐち
我等今悲願祈誓をするをみて有爲の法とてそしる佛陀や
ふくとくはねがふに來るわざわひはつゝしむかとに入ぬとぞきく
一さいの諸ぶつぼさつもひぐはんよりぼだいねはんの成就し給ふ
一念の中よりまよふ雲おこりりんゑ永劫やみぢとぞなる
つら〳〵とめぐりもとむる人みればじひある人は佛ならまし
神儒佛みつのをしゑをとく人の何れの道もいらぬわざまし

一念のじひ眞實ぞたねとなる九品のれんげひらけ社すれ
よの人のゐんぐはぼだいを知すして五ぎやくのつみをつくるわはれさ
戒たもちざせんねんぶつつとめつゝじひある人は佛ならまし
比丘〳〵の其身のつみは扨おきぬ人の道心やぶるうらめし
當來の三會のはるの花もまた現世のじひぞたねとならまし
世中に我ぞさとると自慢して名利もとむる人のおはさよ
正法の花ぞの丶山の草や木をむかしのはるとなすよしもかな
名と到とをもとむるとのくげんやな人につかはれざいにつかはれ
今とても天地のみちのかはらねばまつせのわれらぼだい頼もし
財資は身のわだなりと聞ながらなほももとむる心はかなさ
釋迦も又あみだももとは人ぞかしわれもかたちは人にあらずや
あくねんはおこりやすくてじひしんはおこしがたきぞものうかりける
道はたゝせけんせ外のとともにじひしんじつの人にたづねよ
ごくらくもぢごくもわれにあるならばあくねんおこるこゝろせいせよ
のが氣にはたとひ入ざるとなりと人のいさめを用ひしたがへ

人の非はしり安けれどおのが非は知ゑもしることかたきとぞ聞
なにとも人のこゝろにさかふこそ世法佛法さはりなりけり
身を入て鳥けだものを救ひしは釋迦のゐんちの修行なりけり
眞佛は有さう無相にかゝはらず四相なきこそむさう成けり
ぼんのふをそくぼだいぞとなすとは一ねん回向そのうちにあり
賣僧して物とりくろふ沙門こそこれぞぢごくのかすとこそなれ
本來のむしん無さうの佛をも五よくにひかれぼんぶとぞなる
くはれいなる沙門をみれば皆人のめうがしやなりといふぞおかしき
躰ありてぼんぶこゝろのなかりせば本らいくうのむさう眞佛
いまどきの僧は中〳〵俗よりもいんぐはぼだいをしらぬ佛だう
戒たもち座禪念佛つとめてもこゝろわしきは造地獄から
儒佛道おしえはたとひ得せずとも生死大事とおもへ人々
物とに執着せざる心こそ無さう無心の無住なりけり
皆人におしへの道にまかせなば本來空にかへりこそすれ
みな人のとんじんぐちの惡水は三づの川のながれとぞなる

生は寄死は歸るぞといふとはふるさふみにぞおほくみべけり
六根につくるざいくはのちりはこり四手の山路の高根とぞなる
たびはたゞうき物なるにふる里のそらにかへるをいとふはかなさ
極樂の月まつ夜半の念佛はくもきりはろふ秋のにし風
際なく本來空にかへるこそそれや西方往生としれ
老の身の月日をおくる所作はたゞ香花にとくじゆ座禪念佛
西方の本來空に往生しむりやう壽佛となるぞめでたき
口ほどに身の行ひのならざればわが心にもはぢられぞする
わが禪はおしえの外の宗なるに往生要歌よむもおかしき
わが禪にきらふべき法あらざればこゝろのうちに一もつもなし
いにしへのちしきのをしへじひとのみいまはなにとてがまんけんどん
まやはたうりいたいけ夫人極樂へこれぞ佛のわうぎせつぽう
佛性は四大和がうの躰なるに五欲のちりをいかゞ引けん
佛乘をせち弁僧やわる知識世わたるものとするぞかなしき
妙にして神あるものはこゝろ哉天地にわたりみじんにもいる

不義にしてあつめたくはふざい寶はつもりてのちは二世の身のあだ
心より四聖六凡いでぬるに何とてあくしゆがうは作るぞ
名と利とにかゝはる心引かへてまとつくさば二世は安らく
何ごとも今日の歡樂すぎぬれば明日はかならずくげんぞなる
書寫寺の僕のころもと虱とりむかしの御僧今ぞこひしき
現在の苦修善行ぞ種となるかならず來世安樂のはな
をしへなる道は世外に事多したゞしん實に慈悲をたずねよ
罪障の露霜ふかき身にもたゞ座禪念佛題目ぞよき
まつしまやみなみの海も極樂の池水と同じ法の陸奥
十方は唯一心の淨土なれ衆生もつとめ已身彌陀佛

巳上

眞珠菴に末代まで出世すべからずと仰られ、和尚自の一代にも出世はましまさゞりけれども、出世の法語どもは名譽なるを書置き給ふ、和尚號は贈號なり、自のたまふは虛堂の再來なりと、其外ふしぎなる事を書おき給ふ事多し、又遺言のおくに、我死て百年すぎて唐より禪師きたらば、我再來とおもへ、また二百年におたる年、我死骸を土よりほり出し見るべし、もし

かたち朽たらば、いひ置し事は皆たはことおもひて火中すべし、大かた死がいはそこねまじとのたまひしとなり、然るに百餘年にして隱元來朝なり、これ相違なき隱元和尚は一休和尚の再來なるべし、しからば御死骸とても定てかはり給ふ事あるまじきなり、又今の御木像ははるがののちの作佛にて、諸旦那あるひは弟子衆まで一休和尚の御そり髮を守袋に納もちけるが、彼御像を作り奉るとき、御長髮の體なればとて、直の御剃髮を御眉御髮にいたるまで、佛工が植けるとなり、さても御剃髮をするの代の我に拜し奉る事有がたからずや、さて〳〵集めぬるに、昔の人の書誤るも聞たがへるも有るべけれども、今またつたなき筆に記したれば猶あやまる事も多からめ、こはわがおろかなる故ぞかし、ゆるし給へ、必しも古人をそしり給ふべからず、たゞ此書は兒童がひる寐の伽となし給はゞ、おのづから耳底のかせともならばあしきかずにもあらざらめ、かくいふおろかなる我も筆記せるまに〳〵、にごれる心のちりさへ、ひとつ二つは吹はらひ、一休和尚のかす成ともとおもふがまゝに、

鬼の目になみだは何の涙なるぢごくの釜の下がくすぼる
みがけたゞ力こぶしに實を入て地獄の鬼にまけて歸るな

一休諸國物語圖會 終

前集自畫像贊添文

山居窮僧聽松風之圖遂拜閲
一休和尚自畫自贊眞蹟無疑
不可涉議論者也頓首

臘月十六日　眞珠　宗賢

辻次郎右衛門殿

一休諸國物語圖會拾遺天之卷

薪村酬恩庵の事

一休和尚いまだ若くましませしとき、山城御見物のため大德寺を立出たまひ、南山城たきゞといへるにいたり給ひしに、古き寺一ケ寺あり、寺號酬恩庵と申しぬ、されども此寺久しく絶て住べき僧も無ければ、おのづから野干の住家となりて、ふるき苔は壁を閉ぢむぐらは軒をおほひつゝ物すさまじき有さまなり、所のものども集り申しけるは、かくまであれはて候はたゞ住べきといへる僧のなきゆゑなり、しかるべき僧もあらばまねき此寺へすゑ申し度と、かれやこれやと所のものゝつどひ來り申しければ、和尚つく〳〵と思し召し、さても風景といひいかにもをしき寺なり、我にあたへなば住みおほすべしとのたまへば、里人言葉をそろへ、是まで住むべきといへる僧達六七人もいろ〳〵としてすゑ候得ども、或は夜のまに身まかり、または行衛もなくなり、種々のあやしき事ばかり多ければ、いよ〳〵里人とても畫だに行かふとなくあれはてゝ候とかたりければ、一休つぶさに聞きて苦からず、いかにも我住おほすべしあた

へよとぞ仰ければ、里人ども日々にわかき御僧のいらざる事といひける中にも、いや〳〵禪僧は若きとて年によるべきことにはあらずといへる者もありければ、しからば貴僧にまかすべしとみな〳〵申しければ、そこかしこと御覽あり、いかさましれものゝ住むぞと覽ゆるぞとて、やがて出たまふ、在所のものどもこれをきゝていよ〳〵これまであやしきことの次第をのこらず申し上げ、さま〳〵制しとゞめ申せどもたゞ我にまかせよとのみ仰たまひ、たゞひとりすゞ〳〵と荒はてたる古寺のまばらなるに、其夜かすかなる燈灯をのみ便にて夜のふけ行くをまちたまふ、すでに子の刻ばかりとおぼしきとき、寺のうち震動していなびかりすさまじく鳴かみの如き音して、年の程は二八ばかりの女、いかにも容顔美麗のすがたにて忽然とあらはれて一休の御傍近ふ歩行よる、そのとき和尚すこしも驚ぎたまはず、大かた心得たるぞそこを去よとのたまへば、あとなく消うせぬ、しばらくありて同じ年ごろの兒銚子かはらけを持そへ、夜さむに候酒をすゝめたてまつらんとたわぶれて御そばに近ふあゆみよる、一休少しもおどろきたまはず、さいぜんのものよ又來るかとのたまへば、是も同くきへうせぬ、とかふするうちはどなくすでに丑の刻ばかりと覺しき頃、寺内ゆるぎさわぎ稲びかります〳〵すさまじくて、たけ一丈ばかりの法師おもてはわうだんを病もものゝ如きかほにて、眼は朱をぬりたるが如くおそろしきありさまにてひらり〳〵と飛めぐり、佛壇の下をしきりににらみながめたり、一休得と御ら

んじて三度まで來るとこそおろかなれ、はやく土底へ歸れよとのたまへば早もきへうせぬ、はどなくほの〳〵と夜もあけゝれば、在所のものども大勢がさそひ合ひかの寺へきたり、さてもいか成る一休とて定て變化のものにころされたまはんこのむざんさよと、念佛など申して一町ばかりもべだてゝふるひ〳〵和尚はおはしまするか一休坊やわたらせたまふかとくち〳〵によばはれば、そのとき寺の戸ぼそをひらき門の外に出たまひければ、一度にどつとかんじつゝしばしはなりもしずまらず、さて和尚樣をたよりにして皆々寺へ入にける、一休のたまひけるは、まづ此寺をくづし佛壇の下をふかさ三尺はゞ一間四方を堀て見よとのたまへば、在所のものども申しけるは、仰にて候得ども此寺は年久しきと承候、殊に故ある寺のよし申しつたへ候得ば、こぼち申さん事いかゞと言葉をそろへて申しければ、一休聞たまひ、さはどをしく思はゞ此寺をくづし、其あとにいかなるがらんをも我建立すべしと仰ければ、さらば仰に從ひ候はんとて人々あつまり、寺をくづし佛だんの下を堀て見れば、こがねをつめたる壺三つまでぼり出しける、其の金を一つぼは地頭へ進上し、ひとつは所のものどもに取らせたまひ、殘る金にて善つくし美つくしたる堂塔を建立したまひしとなり、其時より酬恩庵を大德寺の末寺と定められて、此寺に一休和尚住せたまふ事とし久しかりける、今の世に至るまで一休和尚の御隱居の寺と申しはやし、さるによつて御眞蹟靈佛靈寶あまた有りける、山城大和奈良までも眼下に

見わたし、絶景諸人の目をおどろかし、好士のもの遠きをもいとはず、歩をはこび、春ははな秋はもみぢあるひは松茸がりなどして群をなしけるとかや。

地獄の問答の事

一休かひのくにゝしばらく御逗留のうちに、地獄などいへる高山あり、古跡も又多ければ一見のために立出たまひけるを、所の地頭かねて當話よき事をきゝ、直ちに聞まほしくわざとわづかの供まはりにて、しらぬ體にて近く行きむかひ、それなる法師よ地獄極樂はいかにと問ひければ、一休まなこに角をたてゝ糞をくらへとのたまひければ、地頭もつての外に腹をたて、にくき坊主の惡口かなものないはせぞいましめよと下知すれば、かしこまつて若黨ども走りよつて、さん〳〵に打すへ高手小手にいましめければ、一休自若として地頭にむかひ、是こそ地獄よとのたまへば、地頭心づきあはてゝ馬より飛下り手づから一休のいましめをときて、さても有がたき御教化かなと禮拜し、則わが乘りたる馬に一休をのせまゐらせ、私宅へともなひ歸り、種々の珍味をそなへ、朝夕そばを離れず馳走いたさるれば、一休これこそまことの極樂なりとのたまひけるとかや。

文字御頓作の事

一休和尚御養生のためとて常に粥をまゐりけるところへ、長谷川與吉とて小ざかしき男參りわはせて御相伴いたし、さて〳〵和尚さまへ此かゆに付て御尋申し上げたきは、此かゆと申す文字は兩はきに弓を書き中に米といふ文字を書には仔細こそ候はめ、我等ふしん至極にぞんじ候、そもかゆと申すものは水の中へ米を入れしるくやはらかに焚きたるをかゆと申すなれば、さんざいに米とかわるひは食籍に湯などこそ書べきものにて侍るに、いかなる仔細にてかやうに書き申すやらんと尋ねければ、和尚こたへて宣く、此字は仔細こそあれ、昔大唐に神農伏犧と申す聖王おはしけり、其頃迄はいまだ文字定まらず、粥食などの文字はあれども粥といふ字なかりしを伏犧神農其外あまた聖賢たちを集めて、米を水の中へ入れしるくやはらかに煮てもちゆれば、腹中とゝのひて消しやすきものなれども、此文字いまだ定まらず、いかゞに造るべきやと有りけれども、何れもあたまをかたぶけさまゞと思案し給へども、思ひ出し給はねば案じわづらひて、先々かゆを煮て人々にすゝめ給ひけり、されども誰あつて思ひ出し給はざれば、神農うつはものゝ上に箸をからりと置せ給へば、弓のやうに、

かくのごとく見へたり、さてこそ兩わきに弓を書て中に米を書なりとこたへたまふ、與吉手を拍て申しけるは、天晴御とんさくにてまします、いかさまゆゑなき事にては候まじ、何を御たづね申し上げてもらちあけ給ふ御事とて呵々と笑ひけり、されば此おかしきにつけて又不審こそ候へ、只今の如くわらふといふ字を竹冠に犬と書くこそ心得申さず、わらふといふ文字口籍にひろがるとか、目籍に皺などゝこそ書べき物にて侍らめ、竹冠りに犬といふ字はいかなる仔細にて書き申し候ぞと尋ねければ、一休聞しめして仰けるには、是もかゆと一度に作られたり、笑といふ字をたくまんとてあまた聖賢ならび居給ふ處へ、小き犬かしらに籠をかぶりておどけ狂ければ、人々一度にどつと笑ひ給ふ、其故にこそ右のとはりにかくなりとのたまひけり、いかさまいはれを承ればおもしろき御事かなとかんじける處を和尚みすましたりと思し召し、惣體文字といふものは一々よく理をせめたるものにてござる、日用にみなみな書かねばならぬ金といふ文字は、中にもよく作りたる文字にて、觀音經の中にも金銀瑠璃硨磲などゝ七つの寶をいひならべし第一番に金銀といふてある、其金銀なれども持つべき人がもたねば寶とはならぬ、依て人といふ字の下に主といふ字をかきて金といふ字に讀ます、何とようしたものではないかと仰ければ、成程とはいひながら此男も何かなどんをつきたく思ひて、和尚さま御尤の仰ながら、草行でかくときはいかにも人の主に候へども、眞字で書ますと亞かようにかきますれば、主といふ字とは少しちがふやうに存ますが、いかゞと申しければ、されば其不審はなくて叶はぬところ、そこが第一の意のつけどころよ、一日もなくてはならぬ大切の金なれどもしんでは身につかず入らぬものよと仰られければ、扨も〳〵淺はかなる御たづね

を申し上げ、一生の寶を得たる事よと悦びてこそ歸りけれ。

天狗問答の事

一休常陸の國かしまの宮居一見のため參詣なされけり、すでに御社ちかく歩み給ふに、しげりたる森の木蔭より何ものとも知れず、丈け七尺あまりの山伏つと出來り、和尚にむかうて、佛法はいかにと問ひかけゝれば、胸にありと答へ給ふ、さらば割て見んとて氷の如くなる刀をぬきて心もとにさしあてけるに、一休すこしもさわき給はず、

春毎にさくや吉野の山ざくら
　木をわりて見よ花のありかを

と古歌を詠じ給ひければ、變化のもの恐るゝけしきにて、何方ともなく消うせぬ、いとめでたき歌にこそあれ。

輕口問答の事

甲斐の國へ一休御下向のとき、所の某かねて和尚の答話よきことを聞きおよびし故、一休の頓作をまのあたりに聞んと思ひめし、つかひの童にをしへいひけるには、和尚こゝを御通りのとき生徒麼のときいかんと申せ、和尚なにとか言句あらば喝といふて立されよといひふくめ教けれども、聞きなれぬ言葉なれば覺がたき貝に見へけるゆゑ、かさねていひきかせけるには生の字はなまといふ字なるぞ、徒麼はいもをいんとはねたるものと覺へよとねんごろにをしへおき、一休の御通りをおそしと待たる所へ和尚何心なく通り給ふを、かの童かけ出てなまのいもの時いかんといふ、一休取あへず煮てもよし燒てもよしと仰ければ、をしへのごとく喝といふ、一休こたへて忍ぐひかと有りければ、某とのもをかしき中に頓作なる事を感じられけるとかや。

蜷川秀句問答

一休ひえい山へ登り給ふとき、蜷川新右衛門といふもの御供申されける、折から彼山へかゝりし頃、和尚さまへ申し上げたき句ふとうかみ候間申て見候はん、御付被下よとて、

ひえの山路をひろひゆくかな

といひもはてぬに、

さしとけてふもとに四貫の錢をばらり

とつけ給ふ、かくいちはやき御頓作にてぞ有りける、それより山にのぼり給ひて、種々の詩歌あり（前集に出たればこゝに略す）

一文や二もんは何と思ふなよ阿彌陀も錢で光る世中
金持を十人よせてながひれば中に五人は無學文盲

蜷川一休

赤飯の答話の事

一休和尚したしき在家へ御出ありしとき、折ふし到來せしとて强飯を奉りけるが、亭主こびたる者にて、兼て和尚の當話をこゝろ見んと思ふ折から是幸ひと出しけるに、遠慮もなく手づからにぎりては喰ひ握りてはくひ、好物の由にてしたゝか召上られけるを、扨こそよき折から休そらさぬ風情にてひたものまゐりけるに、亭主しきりに一句なくしてまゐるはせんなし、いかに〳〵とせめければ、其時和尚答へ給ひけるは、これ見られよ赤はんと聞くからにぎりかため手形をつけて通すほどにいくらにても通るなりと仰ければ、亭主も理に折てあきれはて、赤飯を他よりもらひながらこゝろ見も得せざりけるとかや。

極樂の沙汰の事

一休の御寺へ日頃御出入申しける、白俗なるもの、たゞ一向に彌陀の淨土に生れん事を願ふこ

ころふかゝりしものありしが、さるほどに當時の名僧ときけば、八宗九宗のへだてなく足をそらさまになし、あなたこなたへ參りつゝ極樂淨土に生せん事の沙汰のみに日をくらしける、或とき一休和尚の御寺へ參り申しけるは、それがしは淺ましく愚痴暗昧の身と生れ候へども、たもちがたき佛性を具し申す上は、いかやうにも修行仕り來世はかならず極樂國へうまれ申したくとぞんじ申す誓願ふかく候、去によつて四方の能化たちへ參りてはうけ給り候に、他の師は十萬八千里のとをきあなたに極樂ありとをしへ給ふに、一休さまには地獄ごくらく目前にありとしめし給ふ、遠き道のほどに候得は百里や二百里のちがひも有るまじきにも候はねども、かやうに大相違あるにより某まよひ申候間、あはれ此上の御じひに實を示し給へとなみだをながしくどきける、和尚聞しめし、されば迷執ふかきものゝ爲には十萬億土と說き、悟了通徹のものには目前と說き御經にも去此不遠とあるはこゝなりとのたまへば、俗かさねて申しけるには、かやうに叮嚀に御しめしを承り候へども、終に七寶莊嚴の極樂いかほど尋申ても見申したる事なく候ほどに、とてもの御慈悲に今一句ねんごろに御示しにあづかり度こそ候へといふ、一休きこしめし、されば極樂目前にありといふは七寶さうごんのかたらあるにはあらず、人の爲に口に說てしめす極樂にあらず、人と自己に言句をはなれて悟り得ずんばしるとなし、しば〳〵坐禪工夫して見付よと仰られければ、辱なしとて家にかへり襖を

かぶり晝夜あんじ暮し明して、不斗あはたいしくも和尚の寺へ參りため息をつき、さて〳〵目前の極らくこそ見付候へとて、さても多の衆生の迷ひと知らざるこそ不便のことに候へ、此度こそ悟はひらけて候とて笑をふくみ小をどりして申しける、一休聞てさこそあらめ、こゝろの面目だにひらけなば何のうたがひか有べきぞ、去ながら其方の明らめやうはいかんととひ給へば、さればこそ此極樂と申すは貧賤富貴にもよらず、老若男女の隔もなく、朝夕きうりにある事に候といふ、和尚うちうなづきもつとも〳〵よき心得かな、さて其極樂に朝夕安坐したる心はいかんと問ひ給へば、されば其事にて候、美食蔬飯にかぎらず、朝夕のごくを樂しみにたぶる所こそ極樂にて候よと、さも自慢らしくじうめん作りて申しければ、一休も手をうつてわらひ給ひけるとかや。

俗より弟子を賴まれ給ふ事

一休の旦那におろかなる者ありける、此者折々まゐりて御物がたりを承りけるが、あるとき一子出家すれば九族天に生ずるといふ法語をうけ給はりて深くしんじ、只ひとりの子をもちたるが、此小兒を御弟子になし下され候へとてつれ來りける、易き事なりとて直さま髮をそり落し、小僧となしかしらを御手にてさらり〳〵なでまはし給へば、親は何ぞ有難き御引導もある

べきと耳をすまして閒居たるに、和尚作り聲してきんになれ〳〵牛のきんになれ〳〵と三べんまでのたまひければ、親案に相違し、大に腹立して、是は曲もない事をのたまふものかな、佛までは得ならずとも菩提になれとなりとも定てありがたき御引導も有るべきとぞんじの外なる牛の陰囊になつて何の益か候ぞやとて、一休をしきりに白眼ける、其とき和尚うちわらひ給ひて、されば末法の出家の行ひ難くして落やすし、さるほどに牛のきんはぶら〳〵と落さうに見ゆれども一生落たるためしなし、さるによつて斯はいふなりと仰ければ、彼旦那何とか心つきけん、いはれを承れは間白ありかたく候とて、一子を連て歸られける。

天の笠を着給ふ事

關東より一休御上京の折から然るべき大名と覺しきものとわとになり先になりて登らせ給ふ、頃しも水無月のすゑつかたなれば、暑氣はなはだしかりしかども、笠をもめさず歩行き給ふかの大名もこゝろやさしき方にて、使をもつて申されけるは、かゝる炎天に御坊はなど笠をめさいるや、幸に持し合せたる古笠候ゆゑこれを着せられよとて、笠一かいさし出させられければ、一休も禮を正しくして宣ひけるは、御心ざしのほど近頃祝着申して候、しかしながら此法師は天をかさに着し候へば、あつくもぬるくも候はずとのたまふ、使の者たちかへりかくと主

人に申し上げければ、大名もいかさま此坊主たゞ人にてはなきぞとて、必ず馬のけわげもかけぬやう日蔭をよぎて通せよとて、猶も同道申ける、さて留りの宿をも御かまひなく、同宿せ給へと申しつかはしける故、程なく暮に及びぬれば同し宿に泊り給ふ、其夜かの大名の御方より使をもつて申し送られけるは、晝のほど笠を參らせんと申したる者にて候、旅は物うきものにて候、殊に此ごろの暑さにさこそつかれさせ給はん、御酒一献まゐらせんとなたへ入らせ給へと有りければ、一休過分の御事なりとて使を案内にて行せ給ふ、さて奥の間へ通り給へば、大名聲をかけ給ひて、いかに御坊よ和國のならひ人に逢ときは笠をぬぐとこそ承るに、なにとて笠はぬがせ給はぬぞと、申されける言葉の下より、ぬぎ候てもかけおくべき處なく候とのたまひける、扨こそ一休和尚よとすいし參らせ、いよ〳〵種々御ちさふ申されけるとかや、其席さま〴〵のおもしろさ問答など有りつれども聞もらしぬ。

稚き時御引導し給ふ事

一休いまだわすか十歳の御とき、師の長老田舍へ行給ひ、御留主の處へ旦那うちに相はてたるものあり、いそぎ御引導被下度よし使申し來りければ、御他行にて候へば御歸りの日限もしれざるよし返答ありしに、さ候へば御弟子がたにても苦しからず、是非〳〵とおして賴み、早死

人を寺へ舁込みける、折ふしおとなの弟子も居あはせざりければ、一休さもしゆしやう氣に用意しさて、棺に向て死人をゆびさし、次にわが身をゆびさし、又兩手をひろげて何のこと葉も なく喝とぞのたまひける、かゝる折から長老の俄にかへり來り給ひて、物かげより此有さまを見給ひ、のち此引導はいかなる事ぞとありければ、一休申しけるは、さん候死人をゆびさしたるは汝が死たるゆゑにと申す事、それがしを指さし候は此小僧にと申す事にて、兩手をひろげたるは大なる耻を我にかゝせたるぞと申したる事にて候なりとこたへ給ふとなり。

泉州堺にて遊女と問答の事

一休和尚さかひの浦に御越ありしとき、其處に旅客を宿する家居のうちに地獄といへる遊女あり、此ものかねて一休和尚の名高きをしり、一首を詠じ奉る、

山居せば深山の奥に住めよかしこゝは浮世のさかひ近きに

一休其まゝ御返歌、

一休が身をば身はどに思はねば市も山家も同し住家よ

と返歌し給へども、こいつたゞならぬ者とおぼしめし、あたりの人にいかなる女ぞと尋給へば、おれこそ音に聞へし地獄と申す遊女なるよし申しければ、和尚其まゝ、聞きしより見ておそろ

しき地獄かな　と遊しければ、遊女とりあへず　しにくる人のおちざるはなし　とこたえけるとかや。

乞食に小袖を給ふ事

一休極月末つかた東山より田といへる所へ御越なされけるかへるさに、今出川口の河原に丸裸なる乞食の伏し居たりけるを御らんじて、さても不便の者やとおぼしめし、御小袖を一重ぬぎて取らせらるゝに、此乞食よろこぶけしきなく袖うち通しきたりける、一休仰けるはさてもふしぎなる乞食哉、一錢だにもいただき伏おがむは乞食のならひなるに、よろこぶけしきもみへざるは嬉しくもおもはざるかとゝひ給へば、乞食こたへて申しけるは、御身はわれに小袖をくれてうれしくも思はざるかとこたへければ、一休手をうち、扨もあやまつたり、一大事のさとりこゝなりけるぞや、いかさま此乞がひ人はたゞ人にはよもあらじ、愚僧が愚痴をはらしぬるこそうれしけれとて、たなごゝろを合せ目をふさぎておがみ給ふ、其うちにかの乞食は消うせけん小袖ばかり殘りける、不思議なりける事とかや。

大和峯の藥師御利生の事

みねの藥師は靈驗あらたなる御佛にて、願ひあるもあらざるも參詣の人たゝさりける、あるとき瘡を病る人ありて、七々日があひだはだし參りの願ひを立て、毎日〳〵おこたりなくまうでける、すでに四十餘日に及べども其しるしなかりければ、如來を恨たてまつりてさん〳〵に惡口しける、折から一休和尚の御下りと聞しよりいそぎ御迎ひに出てしか〳〵のよし申し上げければ、和尚聞し召し仰けるは、如來のれいげん無にはあらず、たゞなんぢが身を恨むべし、さりながら我いのり見んとて狂歌一首あそばし、藥師へ今ばんまうでゝ此うたをよむべしとのたまひければ、病人よろこびいそぎ參りけるが、頃しも五月中の二日なれば、貴賤群參のその中にあるひは現世安穩後生極樂といのるもあり、又南無藥師留理光によらいかれを助け給へこれをすくひ給へなどゝ口々にのゝしれば物さわがしくて心定かならず、しばらくは內院に入て人のしづまるをまちけるが、やう〳〵深更におよべばみな人下向して燈明の法師と病る人とばかり成りければ、件のうたを出しつゝしんでよみあげけり、

南無やくし諸病悉除の願なれば身よりはとけの名こそをしけれ

とよみもはてぬに內院よりけだかき御聲にして、

むらさめはたゞ一時のものぞかしおのがみのかさそこにぬぎおけ

と聞へけり、有がたき佛勅やとしばらく禮拜してたち上り見れば、身のかさはおちてわともな

し、病る人骨ずいに通りて尊く思ひ、すぐに發心して諸國修行に出けるとかや。

一休衆道くるひの事

和尚は衆道ずきにてまし〳〵て兒かつしきへの艶書こゝかしこに有りといへり、されど御心の動き給はざる事は騎河の府中に小玉辨之助とて鄙に似げなき美童ありけるか和尚ふく口說給へともしたがはざりければ、狂歌をおくり給ひける、

花は根に鳥はふるすにかへれども人はわかきにかへるとなし

とばかりにて、小辨どのまゐる都がたのづくにうと書てつかはされければ、御歌のこゝろにや恥けん、しみ〳〵と御返事申し上げてすなはち其夜まゐりて御のぞみに隨ひ申さんと申し上げければ、和尚うなづきよくこそ來りたり、今朝まではさこそ思ひしが、今はもはや用事もなしとて歸し給ひけるとかや。

傾城に御引導の事

赤坂の宿にいつきといへる名高き遊女ありけるが、しばらくの病ひにて身まかりけり、したしきものども集りて申しけるは、それ女は五障三從の罪ふかきにまして流れの身なれば大かたにては

はかなふまじ、いざや一休和尚を賴みたてまつりて吊らはんと、御旅宿へ參り、かく罪ふかき女にて候、御なさけに御引導なしくだされ候はゞありがたくこそ候はめとひたすら願がひければ、一休やすき事とて、すぐにかる〳〵しく其家にいたり御引導遊しける、

僧は衣を賣り女は紅をうる柳はみどり花はくれなゐ

喝とのたまひければ、棺のうちより光明かゞやくと見えしが、剩さへ其夜に日ごろしたしくなしたる者どもの夢に、成佛とげたるよしを告けるとなり。又同所に煎茶を往來の旅客にうりて世のいとなみとせし男ありしが、病もなくて頓死なしたるを近きあたりの者どもより集り、水などをそゝぎ氣つけなど呑せけれども更に其甲斐なかりしかば、折にふし一休お通りありけるを幸ひの事とて、其よし申し上げ御引導を願ひければ、

一ふく一せん一期の間末期の一句雲客の話

喝と御引導ありけるが、是も往生をとげたりと、ふしぎにあたりの者の夢に見へけるとなり。

大食の御咄しの事

或とき殊外大ふうをいふ男ありけるが、一休和尚の御相伴の非時を給けるが、和尚の仰けるは、さても其方はめづらしき大食かなとのたまひければ、かの男いや是はたぶると申すほどにては

なく候、某が若き友どちより合かけろくいたしたるとき、餅米一斗つかせ、我等一人して食すれどもいまだ食たらざりければ、あたりに粟もちしたゝか有りけるゆゑ、それをも殘らず喰盡したるに、あまりに腹ふくれたるにより河邊へ走り行き、大なる舟あるを見るより、其舟を横にもちて川水をせきとめ申したりと首ふりてかたりければ、一休聞しめしさてもおびたゞしき大食かな、それほどの大食は珍らしく、去ながら惣僧がぞんじたる山伏ありしがこれも大食人にて、かけ祿して餅米二斗をつかせてそれを一人して殘らずくらひ、餘りに腹ふくれけるにや廣き松原へはしり出で、三かゝへばかりの松の木を捻折てこしをかけ休みける所へ、小さき蛇の大なる蛙をのみくるしげに見えしが出きたり、かたはらの見なれざる艸を喰けるにぢみ〳〵と腹へりたり、山伏これを見てさてよき事を見付たる物かなと、くだんの草をとりて喰けるが、運のつきたるにや、此くさ人の消る草にて、山伏は忽きへて二斗の餅とときんすゞかけはら貝金剛杖など餅にもたれたるとかたり給へば、彼男顏色をかへて耻入り、早々歸りて其のち二たびまゐらざりけるとかや、總じて狂がる空言はいはざるものなり、かの男の大ふうをいましめ給ふ處なり。

化物御退治の事

北國方へ御雲水ありしとき、ある古き宮に大なる石燈籠のありけるが、いつくともなく毎ばん燈明をとぼしけるが、其燈籠のかたはらを大の法師夜毎ぐるり〳〵と廻りけるを、人皆これを見て恐れずといふものなく、されとも又誰あつて見とゞけんといふものなかりけり、一休これを聞しめし、拙僧今よひこれを退治すべしとのたまふに、所のものども大によろこび、日の暮るゝを待かねくだんの所へ行て見るに、其夜もたがはず燈籠をめぐるとかざ事をまはすが如く、皆人申しけるは、さても一休坊がたいじ有るべき由のたまひしかども中々そのしるしもなき事と、とり〳〵評判なす所へ、又法師一人あらはれて、其夜は二人はせめぐるほどに、皆人いよ〳〵恐れをなして歸りしが、翌日あくるを待て一休の宿所へまゐり、御房の御口とは相違して、昨夜は化もの又一人ふへて中々鎮るけしき見え申さずといふに、一休聞き給ひ其一人は拙僧にて、夜もすがら追かけ廻り、つゐに化ものは踏倒しけるほどに、もはや今夜よりは出まじきと化もの誓言をたてけるによりゆるし遣したり、心易かれ、今夜より出る事あらじと示し給ふ、はたしてそれよりは何の怪しみもなかりけるとかや、ふしぎも世にあるとなり。

豆の秀句の事

一休和尙はいたつての輕口にてましませば、ある地頭の奥方より御申越しあつて、何とぞ御咄

し承り度よし和尚聞しめし、何より安き御事とて早速まゐり給へば、上臈たち居ならびて聞き給ふに、和尚まづ佛說を切口上にて御物がたりありければ、上らう衆感に堪かね御教化の御はなし有がたく候得ども餘りみじかくて本意なし、ねがはくばながく〳〵と退屈する迄御物がたりあれかしと申されければ、一休ともかうも望にまかすべき幸ひはなしこそ候へ、拙僧さる方へ夜咄しに參りけるに、いり豆を菓子に出しけるが、かたはらよりこの豆秀句となしたべんといふ、皆尤とてまめの子のまめなやうになど口々に申す中に、賢こくもなく見ゆる人出て申さるゝには、奥さまのよしの參りとてしたゝかつかみて喰ふものあり、人々聞てこれはいかに豆の秀句におくさまのよしの參りとは心得ず、いかに〳〵とせむれば、さては御ぞんじなきにや、井の内の蛙大海を知らぬためしあり、いづれも御ぞんじのとうり當春それがし賴たる人の奥さまよし野へ參り給ふに、御供してまゐりしに道すがら名所舊跡うちながめ、さはの川邊井出の里玉水などやうの名所つぶさに見物して、ほどなく吉野にも成りぬれば、山はさながら雪かと見まごふばかりなり、神社ぶつかく殘らずめぐりおがみ、夫より高き所にのぼりて四方をうちながめ給ふ所、にはかに嵐ふき來て奥さまのぬり笠を谷底へ吹おとしける、其ときそれがし深き淵にのぞむがごとく、薄き氷をふむ心地して嚴をつたふてつひに取りて歸りぬ、されども笠は少しはげたるをおくさま御らんじて、さてもうたての事かなとのたまひし、それより立

田法隆寺奈良初瀨寺などいふ名所三つ山だるまじたえまなどやうの舊跡御見物わつて御上京あるりしところへ、御一門の御女中の見まひ被成けるに、さもじんじやうなるぬり笠をめしていづれも御越しありけり、それにつけて思し召し出され、彼はげたるをぬらせよと仰ありけるほどに、塗師屋へあつらゆれば銀三錢目にてぬらんと申す、奥さま聞し召てそれは六かしき事かな、さらば手ぬりにせよとてうるし屋へ鳥目二疋をもちてうるしを求めけるに、むくろじ程ありけるを惣じて奥さまは物事おびたゞしくのたまふゆゑに、是は少きとかな豆つぶほどありとのたまひける、さてこそ豆の秀句には三國一のことよとじまんらしく申されたりとかたり給へば、上臈衆退屈して色わるく成りにけり。

國司へ下帶を遣はさる事

或御大名の家中に片岡彌大夫といふ浪人が宅に一休ましましけるを、此所の地頭さゝつけて使者をもつて申し上げけるは、長の旅に御つかれなされべく見ぐるしく候へども私宅へも御入來ありて御うさを晴し給へかしと申しつかはしければ、和尚よくこそ御まねき忝けなしとて使者とゝもに地頭の宅へ來り給へば、地頭も本意にや思ひけん、さま〳〵御ちさう申し上げて、さて何にても御手跡をくだされ度と乞ければ、一休やすき事なり、旅宿へ歸りてしたゝめ進ずべ

しと約束し、程なく彌大夫が方へ歸り給ふに、引つゝきて使者きたり、先ほど御契約申たる御手跡、此ものへ下さるべくといひきたれば、和尚もあまりせはしくや覺しけん、彌大夫が蒔さしたる文のありしを使者にわたし給ふ、使者よろこび持かへりて主人に渡しける、則ひらきみれば見知たる彌大夫が手跡なり、是はふしぎ成るとかな使の誤りにてこそあるらめと、使の者を尋ぬれども直々御手より給はりしといふに、さては餘りにいそぎて申したる故御取ちがひありしものにやと、又も使をもつて最前下されしは彌大夫が手跡と見え申し候、ねがはくは御自身にかゝせ給ふをこそのぞみには候へと申しつかはしければ、和尚うなづき左ほどに深く御望ならばいかでをしみ申すべきと、したゝかに包たる袋をこそわたされける、使者もち歸りて主人にわたせば、やがて袋をひらき見れば、さもよごれたる古き下帶にてぞありけるが、地頭どのも手をうちて笑ひける、其のち又も御入の折ふし、柳とばかりの大文字にて一字かきて送り給ひぬ、又ふるき屏風に何ともかたちの知れぬ繪ありけり、亭主にとひ給へば、あまり古くなりて見分申さず、私親どもが申しつるには馬とか牛とかのやうに御座候よし申さるれば、和尚牛ならば角あるべし角なければ馬なるべきぞとのたまふ、亭主申されけるには御筆の次手に此繪にも讃をあそばし下されよと申されければ、易きことのたまひて大文字にて馬じやげなとぞ遊しける、其繪今にありていともめで度御藏におさまりて寶物の其一ッとぞ成りたるとぞ。

長話に退屈せしものゝ事

さて和尚さま先夜の御はなしはおもしろく候へども、あまり長き御はなしゆゑたいくつ仕り候、何とぞ今夕はみじかきありがたき事われ〳〵どもにてもわかり安き御話しを御きかせ下されたしと、一座のものども御願申し上げゝれば、一休いかにもよきはなしあり、皆おきゝやれや、日本はおろかから天竺までもこの上もないありがたきものは飯と汁じやげな、何と皆わかつたか〳〵〳〵と仰られた。

大俗問答の事

ある時出入の下男こゝろに思ひけるには、此寺の一休さまをば今での知識者とて皆々たづねて見えるが、問答とやらんを聞くに何でもない事いうて御じぎして歸らるゝ、我等も和尚ともんどうして見んとふと思ひ付て、和尚さまに御たづね申します、男と申すものは生れ出るより珍寶と申すものをもつて出ますが、それを成人して落す人は是いかんと申しければ、いまだ言葉もひかぬに金玉といへどもくろきが如し、

兩眼のわきらかなるを持ながら女にあへば目なしとぞなる

女房は辨才天とうつくいし美人といふも皮のとなり

子は寶なりとの事

一休の御寺へ常々おん心易く參りける百姓の、元より家貧しさうへに子多くもちて、其日も過しがたき程のものにて有けるが、和尚のもとへ參り、さて〳〵私どもはいか成る因果にて候哉、御ぞんじの如く子どもは追々出來まして當年二才に成るを下として都合十二人まで出來まして其中にはとし子もございます私夫婦のものは日に三度の食さへ腹に足ほど下された事とてもなく、是がまとの子の地獄へおちたと申すものがとぞんじ奔れど、夫ならばどの子が憎いと申すものもございませぬ、又かやうの貧家へ生れくる子供も不仕合かとおもへば、いよいよ不便にもぞんじます、是も前生のむくひにて候哉御聞せ下されよと云ひければ、和尚うちうなづき、尤々さりながら下の子はいまだ二つとおいやればまだ〳〵いくたり生まうやらしれぬ、かならず夫婦のもの、氣のつきぬやふにして有るときにはひとつ處へより寢酒でものんで氣をはらし仕込では出かし〳〵するがよいと仰ければ、びつくりして和尚さま此上出來ましたら夫婦の者は何と成ませうと申しければ、されば夫に付てはなしがある、昔奈良の都の頃白木の長者とて日本にたれしらぬものもなき大百姓があつたけが、其となりに丁度そなたの樣な貧家に種腹

ひとつにて十八人の子をもつて、今其方の申さるゝ通り親ふたりは正月元日より大晦日まで食の足るとしらず、隣の大百姓の事をうらやみ居けるが、ある時夏炎天に大勢をあつめ、麥をふみかこゐのうちは元より門外までにも干ひろげたるに、貧者は其麥を見るに付ても、此干たる麥むしろ十八まい丈あるならば、子供に一枚づゝ當てわかちなば、我等夫婦が此苦しみも有るまじきと思ふ事をもしらず、子供等はあしにまかせてあそび歩行て、目のとゞく所には一人も居ぬとよと思ふ折から、にわかに空かき曇り大雷なりはためき大夕だちふりきたり、大道忽大河のごとくなりて、件の干たる麥なか〳〵取入べき間もなく、殘らずながしたるが、隣の夫婦は門口へ出ていかゞせんと思ふ所へ、あちらこちらより走り歸りけるゆゑ、頭のかずを員見れば、一人も不足なく、剩格別身をもぬらさゞりける、依て昔より子どもは寶じやといふ程に出かしやれ〳〵、其長者といへるは大和國十市郡天の香具山の東北にすこし高き岡山を長者やしきといひ、また其わきに白木塚とも箸塚ともいへる塚あり、これは其時の長者主人は元より家内出入ものまで一飯ごとに其はしを捨てふたゝび用ひざれば、其捨たる箸しせんと山となりしとて箸づかといひて今にあり、又佛說の中にも鬼子母神といへるは、三千人の子を持給ふ其うち一人を隱され夜叉と成り給ふといへる事もありとて、歌よみて給はりけり。

親となり子と成くるも今ならす二世も三世も盡ぬ契ぞ

かずもなき子を賣人もありと聞く親ではなうて鬼の再來
親は過去わが身は現世子は未來後生大事と子をば育てよ

一休諸國物語圖會拾遺天之卷 終

一休諸國物語圖會拾遺 地之卷

八ッ橋にて狂歌の事

參河の國八ッ橋は名にしおふ名所にて、そのかみ業平もかきつばたの五文字を句の上におきて歌よまれけるとかや、一休にもいかなる名所にや御覽なされたくや思召けん、ところの里人にあんないさせて御らんずるに、八橋はあれてかきつばたもなくところせきまで田をうゑてければ、いづれをやつはしとも見もわかぬていなりければ、

おとにきく三河にかけし八はしも田ばかりありてかきつ葉はなし

とあそばされけるとかや。

瓢簞の曲遊の事

一休和尚御手まへ拂底のじぶんにて有りけん、一條もどりはしの辻に高札を立てられける、

一此度日本老和尚一休三明六通を得て瓢簞をひつくり返す望の方々見ぶつ可有者也、今月今日

よりはじめ申候、と遊ばされて紫野に芝居をかまへ給ける事とて言はやしければ、京わらんべ老若男女貴賤貧福をわかず足を空になして群集をなし、芝居もすみぬればさらば時分はよきとて一休御用意あり、御衣のまへに大ひなる瓢箪をぶらり〳〵と付たまひ、兩手にばちを持て西より東、ひんがしより北、北より南と飛めぐりはねかへりなんど幾たびもなしたまひ、大音をあげたんひやう〳〵とて二十ぺんばかりをどりまはりはねまはりなどし給ひて、其後樂屋へはしりいり御自身に太鼓をうち給ひ、是がかわり〳〵とて殘らず追出したまふ、見物のものども是はいか成る事ぞとて狂がるもあり、あるひは今にはじめぬ和尚のおどけ哉と、しばらくは口も得ふさがぬものも多かりけるとかや。

浪人御引立ありし事

しばらく甲斐の國に御とうりうのうちに一人の浪人御出入申しけるが、一休さまは生佛にてましますよし國中みな〳〵申す事に候へば、何卒我がみの不自由なるをたのみ奉りて身上にわり付やう偏にたすけ給へとて、ひたすら願ひければ、和尚もふびんに思し召され、一門にてもなきやととはせ給へば、某が一門歴々まかりあれども、尾羽うちからしぬれば恥かはしくて參り得ず、且は路銀のよすがもなく不自由にて迷惑申す身にて候、あはれ和尚さまの御かげにて身

代に有りつき申し度よし、ひたすら賴上げ〳〵れば、和尚うちうなづきのたまひけるは、其方藝能はなにを得たるや、浪人こたへて万事不調法にて候と申し上ぐる、いや〳〵れき〳〵の果とあれば禮樂射御書數のうち一々ゆび折立てとひ給へども、一つとして存せぬよし申し上げ〳〵れば、扨は浪人したるも道理と、にが〳〵しくしばらく思案し給ひけるに、彼浪人申すには外にぞんじたる事なく候へども、故あつて敦盛の舞一番ぞんじて候といふに、一休きこしめして、夫社日本一の事よとのたまひ、しみ〳〵と内談遊して不便がりするものをかたらひ、其外鼓打などをよびあつめ、天晴云合せあり、芝居にまくを打ち、こゝかしこに高札をたて給ひける、

一此度上方より幸若罷下勸進能仕勸進元者日本老和尚一休と遊されしかば、侍はいふに及はず、町人百姓五里七里をいとはず、貴賤群集してさも廣き芝居に小屋も破るゝほどに見へたる所へ、かの浪人しやうぞくつけ氣だかく身つくろひして舞臺へ出で、あつもりを一番舞すまして樂屋へ入とひとしく一人の男出て、まことに御歴々さま御入御見物のだん有がたきなどいんぎんに一禮をのべ、さて此つぎには何をかまはせ申さん御このみ次第と申しければ、多勢のけんぶつ口々に大職くはんよいや高だちよ清しげよなどゝ思ひ〳〵に云はやしけるところへ、兼ていひ合せありけん五七人のあぶれ者どもこゝかしこより

をとり出て、いや外の舞は見たくなし、わつもりを舞せよといふ、ふれたる男同じ舞は御たいくつに候はんといへば、かのあぶれもの共いや我々がすきじや、敦盛を舞さずんば芝居を蹈くだかんいやつかみひしがんなどゝいふほどに、又敦盛をまはしけるが、舞はてゝ又前の男出て口上をふれければ、又溢れもの出ていやわつもりといふまゝにつゞけて四五番まはせける、其後はまづ今日は御いとまごひとて追出し、木戸口にて明日は取かへ御らんに入ると評判とふれければ、前の日よりも人は多く入りぬ、御定のわつもり一ばん舞はし、次はといへば又前日の如くかねて仕ぐみたる事なれば、幾へんにてもわつもりにて七日までこそは仕たりける、彼浪人たよりを得て一廉の身上となりけるとかや、所の地頭の耳にも入りぬれ共、一休の事なればとて御しかりもなかりけるとなり。

文錢の御咄しの事

ある人問ていはく、和尚さま通寶の中に裏に文の字を書たる錢の候はいか成る仔細にて候哉、とたづねければ、さればの事よ、むかしは亂國多くして親をうしなひ子をたづね我が身の住家も定かならずして寐食もわすれ、中々數の衣をかさね着といふはならざりしと聞しに、中むかしのころよりありがたき聖君の御代となり、御治世ながく百姓町人はいふに及はず、下賤の民までが日に增しおごりに長じ、亂國とやらは軍書でよむばかり、子どもの耳には聞くのみにて衣食住の三つをはしいまゝに美を盡し善盡す世代がありしときゝしが、其時御上樣の御目にあまり、万民のうれひ遠からざる基となるべしと御意をくるしめ給ひし折から、錢を鑄まし廣く日本中へ出し給ふ、印に文の字を書せ給ふ、それはいかにといふに、錢の穴は口なり、口の上に文といふ字は吝といふ字なり、この結搆の寶をおしめよと御しめしありといふことをわれもきけりと仰られき。

文口

濁り酒の問答

一休和尚山居しこおはしますとき、したしく御出入申す仁寒さの御見舞申せし折から、にごり酒をまゐり給ふところへ參り合てよめる。

山居して心すますと聞きぬるに濁り酒をはいかで飲む、

其とき和尚とりあへず、

山居してのむべきものを濁りさけとても浮世にすむ身でもなし

と遊ばしけるとかや、

山伏と問答の事

一休關東へおもひかせ給ふとき、供人など御つれある事をいとひ給ひて、普化僧のすがたとなり、尺八を吹いて通らせ給ふを道にて和尚を見しりたる山伏にあひ給ひしに、山伏しらぬ躰にてとひをかけゝるには、いかに普化僧どの何方へ行き給ふといふ、和尚こたへて仰けるには、風にまかせてと仰ければ、山伏いひけるは、風なきときはいかん、和尚こたへて仰けるには、吹いて行くとありければ、山伏もがをゝられて、口をとぢあとを見ずして過ぎけるとかや。

壁に寄する戀といふ題にて詩歌を詠じ給ふ事

一休和尚のかる口なる御事をよくしりたる人、御作意を聞かんと御庵へ參り、壁に寄する戀といふ題にて歌一首遊し候へと所望なしければ、取りへず、

君まつちこねばやひとりぬるばかり戀にしたぢのなはたちにけり

とあそばしける、又烟の戀といふ題にて詩を一首とこひければ、

冉々輕烟惹レ恨長。　六宮宴罷月昏黃。
羊車不至芙蓉殿。　知有二佳人一慢炷レ香。

不動の古佛の事

或人不動明王の古佛を秘藏して安置し居けるが、常々其家へ一休こゝろ安く行給ふ、あるとき彼不動を御覽じて、やがて一詩を賦し給ひける、

全躰眞黑稱二明王一。　生付片輪目口張。
一生不犯無二念者一。　去何處固護摩堂一。

とかく七言絶句を作り給ひ、汝いかにも不動を信ずるならば、眞の尊像を繪がきてあたふべしとて、筆をとり給ひてさらくゝと大筆にて水中に岩二つ三つを繪がき給ひて、大字にて不動尊とあそばし、かく岩の如くに心をうごかすまじきと示し給へり。

生前死後を示し給ふ事

ある人一休和尚に生じのときはいかゞ心得てしかるべきやと問ふ、和尚のいはく、忠孝仁義に過たるは無しと仰ければ、いかにも有かたく心得申し候、死ての後はいかん、火葬ののちは茅萱葬とやならん、汝何とて死後をはかるぞや、自得せよ、生あるものは必死あり、平生臨終のときと思はゞ、臨終のときも平生なり、目前に死苦いたるとも驚くに足らずして、生死に念

をかけずんば、微塵も屈する事なしとて、一絶を賦してあたへ給ふ。

不辭因果受塵纏。　止水對觀垂柳邊。
明鏡本分月下客。　花晨興到樂皇天。

また問ふ、如何か是佛、一休答て曰く、

河伯來りて水を求む
河伯は水の神なり、世界の水は我手のものをさし置て却て外に水を求むるがごとし、汝が本分の佛性を顧みて自知せよ、

佛にはこゝろもならず身もならずならぬものこそならぬなりけり

一絶を賦して曰く、

無始無終我一心。　不成佛性本來心。
本來成佛佛妄語。　衆生本來迷道心。

しやかといふいたづらものが世に出て多くの人を迷はするかな

蜷川新右衛門戯問答

あるとき蜷川つれ〴〵なる折から、和尚さまの許へまゐりたはぶれたる事を御尋ね申すとて、

このうたのこゝろはしらじ恐らくは釋迦も達摩も定家家隆も

一休返歌　釋迦達摩定家家隆もしらぬ歌くその役にもたゝぬなりけり

蜷川　おもかげのかはらぬときはいかばかりかはりてだにも命をしさよ

一休　おもかげはかはらばかはれ年もよれ無病そく才死なばごつとり

同　世の中にあきかせたちぬ花すゝきまねかばゆかゝ野へも山へも

御一代のうちに狂詩の多かりしを前集に出しぬれど、今またもれたるを出す、餘は狂雲集を見給へかし。

於二一谷一

壽永三年三月天。　九郎冠者乘二兵船一。
源平合戰無二申計一。　凝底死人幾万千。

題二茶釜一

有レ口不レ言全体圓。　不レ離二色相一絶二諸緣一。
幷呑大海江河水。　吐出趙州一味禪。

題二黄鶯一

鳥亦說レ經似レ度レ他。　樹頭樹底妙音多。

林間花若諸菩薩。

又題一谷

打落平家無數兵。
敦盛熊谷進遲速。

落髮之時

東山々下玉毛頭。
移得天台眞羅漢。

題男根

我此貪裸八寸强。
一生不觸美人手。

題那須與市

與一源平第一弓。
塞目祈念鞍馬上。

題宇治川先陣

頼朝大將秘藏馬。
中有黄鶯小釋迦。
九郎冠者大高名。
一朝懸向上時聲。
今日出家作比丘。
平生所望一時休。
夜來抱汝臥空床。
憤鼻禪中日月長。
判官召道射成功。
七花八裂扇眞中。

宇治川先陣給之

生食前非磨墨後。

題蚤

垢邪塵邪是何物。
雖爲人喰十分肥。

歳旦

有錢有酒有金銀。
當寺他山若僧達。

戀

日夜思君長不忘。
夢中携手欲相語。

同

花咲花而易老花。
花時花亦可情重。

同

生天成佛閑思君。
梶原源太一鞭遲。
元來見來更無骨。
瘦僧一抓沒生涯。

今歳初成大德人。
未申案内往來頻。
夜深戀慕臥空床。
被駭曉鐘又斷腸。

花顔花盛夢中花。
花落花過誰問花。
灯下吟詩瘦十分。

有レ力秋風不レ應拂。

題二性靈棚一

飯在二中央一盛曲盆一
慇懃三酒性靈水。

布袋賛

布袋依レ袋眠。
工夫無二布袋一。

漁父

學道參禪失二本心一。
湘江暮雨楚雲月。

辭世

扶桑國裏沒二禪師一
今日窮途無限淚。

同

東海兒孫誰正師。

胸關鐶斷楚山雲。
饅頭無味鐵崑崙。
水出推流地獄門。

人言是坐禪
大食腹便々。

漁歌一曲價千金。
無レ根風流夜々吟。

東海兒孫更有レ誰。
他時吾道竟何之。

正邪不辨盡偏邊。

狂雲身上自屎臭。

同

或儒者或敎家僧。
飛來蝙蝠暮堂裡。

悟の歌

はちす葉のにごりにそまぬ露の身は
佛とてほかにもとむるこゝろこそ
ちればさき咲ば又ちる春ごとの花の
ぬらしつる袖のなみだのかはくまも
おのづから身はいたづらに成にけり
かりの世にあだなる露の身をもちて
世のうさにかへてすみぬる柴の戸に
妙なりし法のはちすの花の身は幾世
其まゝにうまれながらの心こそ
露ときへまぼろしと覺う稻づまの
ねがはずとてもほとけなるべし
かげの如くに身は思ふべし

艶簡封書小艶詩。

不レ管二人天大乘僧一。
怪長二無明一滅二法燈一。

なげくなよ誠の道はそのまゝにふたつともなし又三つもなし
らく〳〵と心にてこそ彼岸にわたるもやすき法のふな人
生死のことはりしらぬ坊さまは犬の衣をきたるなるべし
奥山にむすばずとても柴の庵こゝろからにて世はいとふべし
國いづく里はいかにと人とはゞ本來無爲の物とこたへよ
燒すてゝ灰になりなば何ものか殘りて苦をば受んとぞ思ふ
妄執の雲をはらさで終る身のなり果を見よ地ごく成らん
けぶりたつ野邊のわはれをいつまでかよそに見なして身は殘らなん
ひゞ〳〵に行末とはく成にけりいつをかぎりのいのちなるらん
關もりにわが心をやかしぬらんすぐなる道を行かぬる身は
すみのぼる心の月の蔭はれてくまなきものは本の境界
はかなくもわすの命をたのむ哉きのふは過し心ならずや
さとり得て心のやみの晴ぬればじひもなさけも有あけの月
三日月のみつればかけて跡もなしとにかくにまたわり明の月
はるとに咲るさくらを見るとになはかなしと身こそつらけれ

待得てもほどはなかりし郭公ともをさそひていづち行らん
年々にしぐれのそむるもみぢ葉を四方のうつらふためしともしれ
月は家こゝろは主じと見る時はなはかりの世のすまゐ也けり
こゝろをば墨の衣に染なして身をばうき世の道にまかせて
寺を建堂をたてたるくどくよりたゞ常々のじひやましなん
しばしげにいきの一筋かよふほど野邊のかばねもよそに見へけり
色相は其とき〳〵にかはるとも不生不滅のこゝろかはらじ
見ることに皆そのまゝのすがた哉柳はみどり花はくれなゐ

一休和尚御母君へ水かゞみ目なし艸なんどいふかな事法語を書て進ぜられしのちまた昔よりの祖師知識方の教化ありし言の葉をひきてかな文となし、念頃に示し給ひし文

往昔今に至るまでうき身の有さま夢の如くにさへ思めされ候へば何事も御心のとまる事御ざ候まじく候爰を佛御くはんねんありて法華經の文に觀彼久遠猶如今日と御のべ候此文の意はかの久しきとをき事を見給ふに同じく今日の如くに見給へとの御事にて候天地ひらけはじまりしより己來かはるとなしと萬の事をさとりたまふとの御事にて候しかればさのみ深く御不審あるまじく候佛法と申は生者死苦をいましめ給ふのみさらに心をとゞめても其のか

ひなき諺と見まひらせるを先禪家にもちひ申候かやうに申候事證據なく候へば如何とおぼし召候やと存ぜかしのことを大かた引申入候都に夢想國師とて日本にかくれなき御僧のましける其の頃は尊氏將軍の御代なりかの夢想ごくしさとりの御歌に

夢の世にゆめの如くに生れ來てつゆときへなん身こそやすけれ

夫人間のありさま萬事とゞまるとなしもとより生のはじめをしらざれば死のをわりをわきまへずやみ〳〵ぼう〳〵として苦みの海にしづむなり佛こゝを哀とおぼしめして色々の御方べんにて衆生をすくひ給ふされども人間のこゝろ不同にして惡道へわゆみをすゝみ善かたへばこゞろすゝみがたくいたづらに先陰をおくりあはれみの業果たらずたまたま教にたがふといへども名利の善をなすばかりなり名利と申は其身の名をあげ人にほめられんと思ふ心をたねとして堂塔を建立しときの富貴におごれり斯の如くの人を佛はふかくきらはせ給ふまことの道は萬事法度をそむかず世にしたがひてかたく法を守る人を佛道に成就の人と申なり御年もはやくれ近く成らせ給へば何の御望御ざ候はんや殊さらぢごくの話をもしろしめされ候うへは行く水のごとくに御心をもたせ給ひて御胸のうちに何事御ざなく候へば世尊御一躰の御身と御ざあるべく候こゝをほとけ二部經に己心の彌陀唯心の淨土とのべ給ふ此文字の心おのれがこゝろ彌陀たゞこゝろの淨土と申也しかれば十萬億土は御ねがひあるまじく候

佛とはなにをいはまの苦むしろたゞ慈悲心にしくものぞなし

此うたのごとく御じゆよう候へば何事も佛心と見まひらせ申べく候古しへ舟田の御はうじやうにて宗建をはじめまひらせ人々すぎさせ給ひ候事夢とはおぼしめされず候や申までもつくじがたきはかやうにけなげに御入にてわたくしもながらへ佛法の御事ども申上まゐらせ候御事は他生の緣ふかくとぞんじ候因果經に自以唯ならんと佛も御のべ候また母にて候ものは七十六にて去年相はてられ候心昌と申せし辭世の歌

世々ごとに見へつかくれつすむ月のかはらぬ色をたれかしらまじ

此歌をくちずさみて其のちはそれさまへ參りて御菩提の心をすゝめ申候へとくりかへし申され候つるかの御めいをそむきがたくぞんじ候てたび〳〵參り候つる母にて候ものゝ事おもひ出しまひらせ候へば一しほそなたへ參りたく社候へはやそれさまの御覺悟も大あんらくの道に御心づき候へばめでたく滿足いたし候御なぐさみなどには御かんきんもしかるべく候御心づくし候へば夢々御沙汰候まじく候大船若の文に一切不行を佛の行とすと御座候爰をもつて昔さる知識のうたに

あら樂や虛空を家と住みなしてこゝろにかくるそらさへもなし
出るとも入とも月をおもはねば心にかゝる山の端もなし

これは生死にとりあはぬところの歌にて候よく〳〵御くふうあるべく候又弘法大師の御辭世に

今はゝや後世のつとめもせ　りけりあうんの二字のあるにまかせて

いづれもさとりの人はかやうに日まあき候やうに申おかれ候また慈鎮和尚のうたに

かりの世にまた旅ねしてくさまくらゆめの世にまたゆめを見るかな

引よせてむすべば草い庵にてとくればもとの野はらなりけり

是は相色のうへをかろく思しめし候へとの心にて候いつの日いつのとき御大事きたり參らせ候とも御心のうちに何事も思召候まじく候病難もしいたくせめ來候ともそのくるしみにまかせて相果候へと大唐の黃檗禪師の傳心の法要と申にも書おかれ日本にては聖德太子病なんのとき御歌遊ばされ候

うき雲はいくへもかくれ空に消月はくまなきひかり成けり

此歌のこゝろは何事もとりわひ候はで無念無想の所をもちひ候へとの御事にて候又ゆらの開山のうたに

何ごとも夢まぼろしとさとり來てうつゝなき世のすまゐなりけり

此歌のこゝろはいかなる大王ささき其外上下の人々かなしみ給ふは死の道にて候こゝをさへ

御かくご候へばすなはち安ようの淨土九品のれんげにまとはれて大安樂の御身となられ給ふべし大世尊の御說法にも女人成佛のかたき事をかくとき給ふかようの事を聞こしめして御道心すてさせ給ふまじく候其ことはりを荒々申わげ候男子に生をうけ申候てのこらず成佛すべきにあらず殊に龍女は八歲にして三國に名を殘し申候御經にもほめ給ふ然者女人社なほたのもしき候事にて候へば成佛とてべつにたつときひかりもはなち奇特をも見せ申事はあるまじく候御さとりの御心中にこれぞ御不審候はぬと思召候事御座なく候を大のさとりと申事にて候佛御入滅のゝち祖師先德のさたし給ふ御法にも見理受用のふたつにて御入候三ぞくをも御太儀に思しめしましく候五戒百かい五百かいをたてられ候事もたゞ一身のさたにて御入候御女房衆の御さとり有しは　嵯峨天皇の御きさき檀林皇后なり其外人の數をしらず美濃のくにゝは興性寺の千代能と申女さとりて候其歌に

とにかくにたくみし桶の底ぬけて水たまらねば月もやどらず

かやうの事を聞しめして今日より禪宗のさんがくに御心をつくし給ふべし愚僧御手を引申すべしまづ〳〵くさ〳〵の御心をたゝせ給ひ後世を御たすかり候はんと御かくご候へとすゝめ申ものは何者ぞや又かやうに不審をうけ申ものは何者ぞやと目に見へずしてさま〳〵なりゆくゆゑに六道りんゑのたねと成とを佛これを三どくと說給ふ一にけんどん二にいかり腹立る

と三にぐちの心この三ッをたち候へといにしへ今にいたるまでしめすなりこれをしらざれば愛じうの心ふかき故に人をねたみそしりあればうらみこんじてたがひに苦しみのなみだを流し袖をしぼるなり是みな一心のわざなり久しく遠き事を觀じ物をわすれざるも一心なり四百四病をうけ大苦をうくるも一心也雪霜のさむき事をいとひ大溫を苦となすも心なりされば此心一つを取とめがたければ六道のごらたらず生に生をかさね死に死をつぎうき沈むのみなり此心といふものはいかにとはんじ申に影かたちもなきものなりかたちもなき故に消うせずしかれば生もなく死もなしこゝを佛とも金剛の正體とものべ給ふなり無相にして有たるが故に古來より行とゞまる事なし住所さらになし色相の生滅にあづかるによつて無常と說き又は大死とのべて是をわはれみかなしみて定離と申なりかやうに申入候は御心にかたちなき所を御らんぜられ候へと申事にて候何ものか色相をさつて佛神とも鬼神とも成申べく候なり淨土と穢土の事こゝを以て御分別あるべく候御不審のはれ申候はゞまよひの雲千里萬里の外にはらひ一つとして御心とゞまる事あるまじく候こゝを大正覺と申なりこゝにいたりて心經にも色即是空空即是色ときゝ給ふ一心の外にべちのものなし本より經にもなし心は無始無終にして住所なし爰を開て天地草木の畢竟して見る法はあさく候見ざる法はふかしはやく生死のきづなをはなれて大解脫の御身とならせ給ふべし

御工夫にも古則話頭御不審はなれ候よし仰られ候尤に候むかしの御僧たちの集め給ふなぞらへをわら〳〵かなにて御なぐさみにしるし參らせ候

本來の面目のしめしやう不思善不思惡未生已前いづれの所より來る又はいかなるが是本來のめんぼくと計もとひ申候此言葉をうけとりて三十日五十日乃至一年二年くふうをとげて案じ申やうは我が身の生の所は佛もいづれの祖師もしられまじく候佛祖ふしぎの所是にて候と申候へば此上にじゆようとていろ〳〵大事あるよし長老申され候問また是を工夫して申やうは天地開闢よりこのかた知られまじきとじゆようす爰にて長老尤のよし申され候學者の智にをしえによつて其語をするなり大かた此分に候

はくじゆしの話頭とていかなるか是そしさいらい意といふこゝにて祖師のいはく庭前の柏樹子とこたふ心をさんせよと申にしかふして學者の曰祖師の再來庭前のはくじゆしも同じ心にて候たゞ天然の理にて候前後しらぬ心にて候とてぢやく語に松は直く荆はまがれりと申又色相分離してのちいかにとふ松直からず荆曲らずと申三度四度申かへしてこれを至極の道理と申す是は柳はみどり花はくれなひのこゝろなり此極意は口といふ根本無相なる處をしらんがためなり大かた此分に候

萬ぼうふりうといふ古則よろづに友たらざる人これ何人ぞやと問ふがくしや耳をそばたてゝ

是を聞き年月へて申やうは我が一心は萬法の外にて候躰も色もなく候物にくみせぬものに候しかも天におはひ地に滿りしがれば左右もなく脚下まん〳〵として有ける故に法界一心とくはんじて大國のはう居士名を殘すこれは目に見ぬ物の有所を見出してかくのごとく申也此地獄ときやうれ申候心御入候也

本有圓成の事はんらいの佛何の緣をもつてめいといふの衆生となりたるぞや學者くふうして申やうは根本は無念無相の佛なるを衆生の色緣にひかれてかやうに寒うん苦樂を得る身となり來て候爰に念をとどめ此界にりん廻なくば本身の佛性になるとて此時種々無量となしさま〳〵の言葉をつくし善根しやうと見るなり

たその話の事釋迦みろくはかれが奴かれはたそこのさとりをうけり年月へて老僧の前へ出て座上に和尙無く眼せんに我なしと申て一味平等のところ何か差別あらんや然らば奴もなし我もなし上下元來佛も衆生も一躰ならずや大かた此分の心にて候

いかなるかこれ地獄としめされて年月を經て工夫して申すやうは眼前これ地獄と申又とふ何事に地獄ぞ色相これぢごくなり色相分離してはいかに眼光落地すこゝに見へず智惠によつて種々の語をうけ大利益に落候てあさましく候

こはんかけざるときはいかん學しやのいはく小魚大魚を呑又かけてのちいかん大魚小魚をの

む此心は舟の帆掛りてあるときは大なる魚がちいさきうををのむといふ也はのかゝらざるときは小さなる魚が大なるをのむといふこゝろなり此こゝろは諸宗に少しも知らず禪家の大事なり有と申さんとては世にある事を吐く語をかくし又無なる事を申さんとては世になき事を吐て心をかくして生死思推の處をむづかしく申さん爲なり御理り御座候直に申べく候なり

りんざいの三よう三玄と申事の候かやうの事は申つくしがたく候天地の間に三つもとむ三つくろしと申事何ぞや是をしかも三ばうと申事ありととくの心は父母と我と是三つの寶なり一つもかけては物ならず候三玄と申はみなもとの無性はくろきかたちなり出生して万の事を行ひ候爰に大秘密のとありようの字これ則大事なり

大國のなんせん和尙此猫兒を切る事は大衆こたへざるゆゑなり趙州爰に來りてさうわひを取てかしらへあげ衣を貌にあてゝ和尙のまへに出る和尙このときぬこを切て後悔すてうじう甚もつてめんぼく成る第一に色相の逆意をきるなり迷ひの衆生色心ともに切とを得ずたまゝ切といへどもぞんだうなれば放るゝ所なし文珠のりけんはふたゝびつがずと申心にて候

りんざいの四かつとて人の死たる所にいたりてかつすこの心たしかに心得たる僧まれなりたゞじやうしゆう僧と申は本ぶんにおとしてこれを至極す古人の見理此所にあらずゝでにりんざいは命根木不絶といべりしかれは當時の僧たち大なるあやまちなりとはみぢくにして衣を

かへ人の眼をつぶして布施物をとりおのれが生々世々のはのはをまねぐわはれむべきの第一なり

百丈やこの話の事大しゆぎやうていの人かへつて因果あるや又なしやと丶ふ答て曰く因果に落ずとなり此報によりて五百生野狐の身に墮していんくはゝれき然あるものと申むねにて候未ださとらずして別にふかき事御座候はんと思召まじく候此ふたいろの因果と申はいんぐはにくらからずとの事なり深く因果とはおちずといふ心にて候此話問のまなこは生々世々の事をきつねによせてとかれたる所大智なるゆゑ　大智禪師とかや申なり一朝大國にていろ〳〵佛道しゆ行の事れん〳〵に申上まゐらせ候又申す人迷ふときは火をもつて火をけさんとし土をもつて山をかこはんとすかやうおろかなる事は人々佛道に心の遠ざかる事萬里をへだて丶手には百八ぼんなうのきづなゝる珠數をつまぐり二世三世を祈り生れう死れうのたゝりを見いだし石塔卒都婆にきどくのありとおもひ梓にかけて死人と言葉をかはす事はいひて袖をしぼるもろ〳〵の教もろ〳〵の道理を失ひ佛ぼさつにまう語をかけ義理をそむきいよ〳〵もうもくの如く竹のうちより天をはかる物は生々世々うかむとわるべからず西方非西東方非東無地獄無極樂淨土非淨土けんどんをきらずしてしかも又しかも外の大空さんまいにして大蓮花のうちにありたゝい正直のじひぎやう無ざんなり念をきつてしかもきらず是を通力自在のさう

と申也から國我朝にいたり上下萬民佛道をねがふ事何宗かしうとて色々たてゝはありといへども其源はいづれも極樂じやうどにいたり地獄におとすまじきとの方便也此淨土といふは何國なれば我心のうちにあり又地獄はいづれぞなれば大事我心のうちにあり或人達磨大師にとふ地獄はいづれの所ぞやこたへていはく汝が心中にとんじんちの三毒これなりとんじんちとは貪は欲とて萬の愛念執着の欲を申なり嗔とは腹をたつる念を申痴とはぐちとて何事も心のまゝになき事をなげき歎しみ我とわが心を惱ます事を申なり此三毒かくの如く善惡の報をつくり出し地獄におつるなりぢごくとて別に餘の世界にある事にてはあらず又問極樂とはいづれのところぞやこたへていはく極樂淨土とて外にあるべからず汝が心中の三毒を拂ふ處すなはち淨土なりと答給ふ佛と衆生とへだて有事なし迷ひの衆生此とんじんち我本心にてなき事をしらず一念あいし又にくむによりて地獄におつるなりこの三毒をもとゝして八萬四千のぼんのう發るなりこれ則地獄なり佛といふもさとるといふも名はかはれども同じ道也わが本心をさとる人をすなはち佛と名づくるなりしかれば我心の外に別に佛なき事をよく心得て此上を常々てゝろにかけ御工夫あらば道に御わたり候はん事うたがひわるべからず候現在の果を見て過去未來をしると御經にときおかれ候この心は今こゝにて惡心惡逆をこゝろにわすれずしてつゝしみ善事の心あつく取出し行ふ事也今此生にて其心をわすれずば又今の心を未

來へ引て人に生をいたすべきとの事なり佛は萬に自在を得たりといへども見わたらざる事わり一には無縁の衆生度するとわたはず二には衆生がいをつくる事わたはず三にはさうごう轉するとわたはず前世のがうゐんによりかんとくしたる善惡のこつはうなりかやうの決定の業はうをば佛ぼさつの身にても轉ずるとかなはず形の善惡福德の大小壽命の長短衆生の高低の事これら皆前世の業因にたへたる定業なり慈悲しんは福德の家にうまれ慳貪は貧苦の身にいたり柔和にんにくの心ゆゑすがたよく生れさては高位高家にうまるゝなり殺生したるものは短命にうまるゝかくのごとくいづれもみな前世の惡ゐんにより惡果を得たる人このことはりをしりて今世にて惡行をつくらずば來世はかならず善果を得べき事唐土わが朝の祖師達をはじめ數多き知識のふみにも書殘し給ふ事どもをしめし參らす

一休諸國物語圖會拾遺地之卷 畢

一休諸國物語圖會拾遺人之卷

宗純抄

摩訶般若波羅密多心經

是は天竺のことばかり、摩訶とは大といへるこゝろ也、大といへる心をしらんとならば、先わが小さきこゝろをつくすべし、小心とは妄想分別なり、まうさう分別あるゆゑに、我と人とのへだてをなし、佛と衆生のへだてをなし、有無をへだてゝ迷悟をわかち、是非善惡の隔あり、是を小心とはいふなり、この心を盡せばわれ人のへだても、佛と衆生の隔てなくして有無の心もまよひといふ事も、さとりていふとも、皆平等にして、さらにへだてあることをしらず、これを大心といふなり、此意は虛空のかぎりなきがとし、是則一切衆生のわれ〳〵の上に、元來そなはりたる本性なり、しかれども、凡夫は妄想分別の小きこゝろにおほはれて、此大心を見ることをしらず、色々わけへだての心あるゆゑに、有無の二つにまよひ、生死のふたつに隔られしゆ〳〵の顚倒迷妄するなり○般若とは智惠といへる義なり、このはんにやの智惠とは、凡夫の思へる分別才覺わりて、小ざかしきをいふにあらず、この分別才覺は世間の智惠なれば、小智は大智にあらずして、世知辨聰とて、佛道に入とをしらず、さるによつ

て小智は菩提のさまたげといへるも、此心をもつていふなり、眞實般若の智惠といふは、安想分別をはなれて、大虛空の如くなるをいふ也三世の諸佛その外もろ〳〵の知識たちも皆この智惠をもつて無上菩提をさとりたまふなり、無上菩提は分別まうざうの及ばざる處なり、去程にこの般若の智は生死の苦界をわたる船にたとへたりなり〇波羅密多とは彼岸にいたるといふ心なり、彼岸とはかの岸とよめり、凡夫はまよへるゆゑに生死苦界をわたるとをしらず生死流轉するを此岸といふなり、此岸とはこの岸とよめり、佛ぼさつは般若の智惠によつて、一切の諸法はみな空にして、元より生死もせず、滅しもせずといふ道理をさとつて、はんにやの船にのりて、生死のくがひをわたり過て、不生不滅のねはんの岸にいたるを彼岸といふなり、則ねはんは生せず滅せずといふ義なり、こゝにいたるを極樂といふなり、凡人間の種々無量の苦をうくる事は生死のふたつに因てなり、生を願ふては樂を好み、死をいとひては苦をうくる、たのしみを求めてもわたはざれば、樂もくるしみとなる、さるほどに般若の智惠をもつて、自心はもとより空にして生せず滅せずひつきやうなりと悟れば、生死をいとふべき事もなく、樂もなく、是を眞の極樂といふ也、こゝにいたるを彼岸にいたるといふなり、至るといへば田舍より京へのぼるやうの事にあらず、一念生せざれば、北立處すなはち西方極樂なり、あるひは自心の外に極樂をもとめなば、いよ〳〵遠く十萬億土をへだて

〻、終にいたる事あたはず、自心すなはち佛なる事をさとれば、阿彌陀をねがふに及ばず、自心の外に淨土なしかくいふとも求むべからず、自惑をもつて自心をもとむる道理なきによつてなり、たとへば我が目にてわが目を見ざるが如し、たとへば寶を手に持ながら、うしなへりとおもふは迷ふが故也自心元來ほとけなるを、外にたづねわるひは自心の上に於てもとむるは、失なはざる寶をうしなへりとおもふが如し、たゞ尋ねず求とめず、捨ず、取らざれば、おのづから佛のこゝろにかなふなり〇心經とはすなはちはんにやの心なり、此般若の心は一切の衆生もとよりそなわりたる心なり、愚痴無明のくらきにもくらまされず、煩惱もうざうのけがれにもそまず、元より生せず滅せず、故に生に死流轉をもうけず有にあらず無にあらず、中道にも止まらず本來空寂にして取事もあらず、捨事もあたはず、詞にもいひがたく、心をもつて量がたし、一切の相をはなれたり、釋尊一代の間色々にとき給へども、終にとき盡す事能はず〇神妙ふしぎなるもの、經とは詞にあらはし、文字に書うつしたるを心經といふにあらず、此經は則自心をさしていふなり、文字に書たるは、文字般若なり、自心をはなれて外に文字にて書たる經をもとめなば、是則愚痴の心なり、はんにやの智惠にそむくなり、念々皆般若經なり、たゞ口にとくばかりにてこゝろははんにやならねば、隣のたからをかぞへるがごとし、佛この經をとき給ふ事は、はんにや本覺の智惠をもつて一切の衆生を

して妄心もうねんを除き正さしめて生死大海のこの岸をわかれて不生不滅のねはんの彼岸にいたらしめて衆生をして本心本性を見せしめんがためなり此故に般若波羅密多心經と名づくなり。

月清　此法はうけてたもてる玉なれば永きよてらす寶成けり　後京極攝政
新拾　心をばこゝろの底に納おきて塵もうゞかぬ床の上かな　同
摘題　浮世わたる法のうきゝを尋ぬればしるしも深き元にぞ有けり　參議雅經
續拾　里わかず詠る人の袖とにかげもおしまぬ山の端の月　同
摘題　なべて皆むなしとゝげる法なくづまよひ悟を分てこそ見め　師兼
新千　そのまゝの心の外に言の葉もなきこそ法のしるしなりけれ　大僧正忠性
新後遷　言の葉も及ばぬ法のまことをば心よりこそつたへそめしか　見性法師
艸庵　ことの葉もおよばぬ法の道芝を心の外は誰にとはまし　頓阿法師
續千　世にたゝず法のしるしを傳へきて昔くてらす日本のくに　法皇御製
夫水　しづかなる光の都たづぬれば胸のはちすの月ぞすみけり　爲家
拾玉　おほかたのむなしき空にあればこそ何もさながら其中にすめ　慈鎮
新古　にごりなき龜井の水を結び上て心の塵をすゝぎつる哉　上東門院

古今　いづくにか世をばいとはん心こそ野にも山にも迷ふへら也　素性法師
新拾　三界をひとつ心としりぬれば十の境こそ直に道なれ　慈覺大師

觀自在菩薩

是則ち此はんにやを修行する菩薩なり、般若の知惠を以て自心のもとを清淨にして煩腦のけがれをうけず、不生不滅不去不來空成事を觀念して、一切のものにさはらず、自由自在なり、たとへば万物の虛空の中にあれども、虛空をさへぎるが如し、菩薩とはさとる衆生といふ心也、去ほどに心なければ人々みな觀自在なり、外を求むべからず。

行深般若波羅密多時

行とは、修行する事なり、深般若とはふかき智惠なり、世間よの常のあさき有漏の智惠にはあらず、眞實出世無漏の知也、漏とは煩腦をいふなり、有漏とはぼんのふ有といふ義、無漏とはぼんのうなしといふ心也、有漏の知は妄相分別なれば世間のうちを出ず無漏の智はぼんのふもうざうをはなれて、三界を出離する智惠なれば出世無漏の智といふなり、則この般若の眞空實想の事なり、波羅密多とは、ひがんにいたるといふ義なり、則此ぼさつの修行す

る法をいふなり、又時とはこの菩薩の般若を修行する時なり、修行するといへばとて、しゆ行仕つくしすべき事の無き所にいたり、得たるを般若の修行とはいふなり、はんにやはひつきやう空なるがゆゑなり、此空の上に修行すべき道理なし、しゆ行すべき事のなき處にいたり得るを修行とはするなり。

是は僧俗のへだてなく士農工商ともに業體とすべき道を修行なし盡し、其身の職分なに一つくらからぬ所にいたりぬるを示し給ふなり、萬法出離のしゆ行とは、實に佛ぼさつの上ならでは成得がたしといへども、銘々受もちたる一業をしゆ行しつくしその道にくらからずば人たるべきなり、時とは何業にもせよ學び得べき時あればなり、其習ひまなぶべき時を等閑に年老て後悔する事かず多し、わかきといふとも時ありとしりたるを、一業の知見といふべし。

照見五蘊皆空

照見とはてらし見るなり、觀念の心なり○五蘊とは五つをつゝみあつむる心なり、五つとは一つには色なり、地水火風のかりに和合したる色かたちある身をいふなり、二つには受なりうくるとよむ、苦樂をうくるをいふなり、三つには想なり、おもふとよむ、深く思ひたづね

るをいふなり、四つには行なり、おこなふとよむ、五つにて識なり、しゆ〳〵の分別をなすものなり、受と想と行との三つも、この識の分別よりおこる也、この五蘊は畢竟色心が、身の二法なり、色とは地水火風の四大が假に和合して、色かたちのあれば色法といふなり、受想行識の四つは、こゝろになすわざなれば心法なり、五蘊のうちに識といふものが先最初に何事につけても分別をおこすなり、たとへば苦樂などの事につけても、是は苦なり、これは樂なりと、分別するものは、識なり、さて分別によりて、樂しみを樂なりと心にうけ入、苦をば苦なりと心にうけ入おくを、受といふなりさて又其苦の事をわひついで、たへず、しゆ〳〵におもひたづねてやまぬは、想なり、さて又おもひ尋ねてやまず、終にその苦樂などの事をくわだてゝなすは行なり、其なすわざの善惡によりて未來に餓鬼畜生などの、わしき身にうまれ、あるひは人間天人などの身をうくるは色なり、則色身の事なり、五蘊元來自性なく、四大無主なれども、衆生は愚痴なるが故にまよひ、眞實に有しうじやくして、此四大をかり、和合の身を我身なりとおもひ、受想行識の四蘊を我が本心也とおもひ、わが身を愛するゆゑに苦にいとひ樂をねがひて色々と業を作りて無量の苦を受て、五道六道に輪廻して、つひに苦厄まぬかれがたし、しかるにこの觀自在菩薩は、はんにやのふかき智惠をもつて、生死の苦界を越て、彼岸にいたる法を修行す、時に五蘊本來空にして、四大無我なる事を

くはんねんして、もろ〳〵の苦をまぬかれ給ふなり、さて又般若の御法をときて、苦界にしつみたる衆生どもすくひたすけて、生死のこの彼岸にいたらしむるゆゑなり。

度一切苦厄といふなり

拾玉　色ふかく染はてぬれば立歸り心すゝしきわまのはごろも　慈鎮

聖教　世中に我物とてはなかり鳧身をさへ土にかへすべければ　空也上人

古今　紅葉ばを風にまかせて見るよりも果なきものは命なり鳧　大江千里

詞花　此身をば空しき物と知ぬれば罪えんともわらじとぞ思ふ　よみ人しらず

舍利子

是は佛の八萬人の大衆の中にて、智惠第一の弟子なり、さるによつて、大衆たちの爲に惣の名代に、佛にむかひ舍利子法をとひたてまつり、答をせらるゝなり、依て佛色不二の御法をときたまはんとて、其名をよび出してつげ給ふなり。

色不異空。空不異色。色則是空。空則是色。

受想行識。亦。復如。是

色とは、地水火風のかりに和合せる四大色身なり、凡かたちの有ものを色といふなり、容あれば目にそのいろ〳〵見ゆるものゆゑ、色といふなり、今この四大色身のかたちあるは、元來空のかたちなきところより、生ずる程に、色身は空にことならずといふ義なり、さるほどに此色身まことに有物に似たりといへども、夢の如にて、畢竟空なり、しかるに凡夫はまよひて、この眞空の實相にそむひて、空妄の色身をまことに有ものなりと思ふによりて、生をこのみ死をおそれて、しゆ〳〵の苦しみをうけて、生死のりんゑをまぬがれず、故に佛是をあはれみて、此色身も元來不生不滅の眞空があらはれたる物なれば、色も空にことならずと說給ふなり、さて此空といふものも、色がめつして空となりたる程に、空も色に異ならぬぞ、かぐの如くいふも又色と格別なる物を、一つになしたるやうにして、へだてがあるに似るあひだ、其色空の二見をはなれしめんが爲に色即是空空即是色なりと說給ふなり、則といふはやがてといふ心なり、色の當躰が其まゝやがて空なり、空の當躰がそのまゝ色なり、空をはなれていろなし、色をはなれて空なし水と波のごとし、波すなはち水なり、水すなはち波なり、さらに二つある事なし、たゞ一心實ばかり、これは先の五蘊のうちの色蘊の一つをあげて、空にことならずとときたまふなり、さればのこりの受想行識の四蘊も色蘊のごとく、皆空とことならぬといふ義なり、色蘊の一つをもつて、殘りの四蘊もしるべし、ひつきやう皆空なり。

續古　古もいまもかはらぬ月かげを雲の上にてながめてしかな　後嵯峨院

向　聞人もはるかにこれを仰げとて空にぞ法をとく聲はせし　法性寺入道

新後撰　色も香もむなしき物とをしゑずは有を有とや思ひ果まし　應司院

金葉　いろもかも空しと說る法なれぞ祈るしるしは有と社きけ　攝政左大臣

新古　色にのみ染し心の悔しきをむなしと說るのりのうれしさ　小侍從

詠藻　春の花秋のもみぢのちるをみよ色は空しき物にぞ有ける　俊成

艸庵　雲晴てみどりに晴る空みれば色こそやがて空しかりけれ　頓阿法師

拾玉　天の原思ひかゝらぬ雲の上もまことの道の宿となりぬる　慈鎭

續拾　春秋のはなも〻みぢもおしなへて空しき色ぞ誠なりけり　大僧正道玄

後千　隈もなき月をうつしてすむ水の色も空にぞかはらざりけ　瞻西上人

續古　露わくる花すり衣かへりては空しとみゆる色はありけり　信生法師

續千載　受がたき身をいたづらになすものは後の世しらぬ心也　平政長

舍利子。是諸法空相不生不滅
不垢不淨不增不減

しやりしとは、又聞人の名をよび出すなり、是諸法とは前の色受想行識の、五蘊をさしていふなり、前にとく如く四大色身五うんの諸法、みな元來空なるほどに、初より生もせず死もせず、穢もせず淸まりもせず、增もせずへりもせぬぞ、虛空のかたちなきが如し、ねんごろに空なることを示したまふなり。

是、故空中無色無受想行識

このこゝろは、右の如く眞空想なしのうへには、生滅の道理もなく、けがれもせず、きよまりもせず、增といふ事なし、又減といふともなきものなれば、此故に受想行識の五蘊もみな無ぞ、無といふは空といふ心也、空とは有無をはなれたるを云ふなり。

無眼耳鼻舌身意

是は六根をあげてみな空也と說給ふなり、六根といふは眼根、耳根、鼻根、舌根、身根、意根これなり、みな根の字をつけていふ事は、艸木の根あるが如し、根あればよく生するなり

そのごとく眼こんはよく識を生ずるもの也、識とは眼にみる時に青黃赤白黑をよく見分るものをいふなり此識といへる物がなければ、見わくるとならぬぞ、さてまた識といふ物が有ても元根といふものがなければ、此識を生づる事がならぬぞ、たとへば目をふさぎ、耳をふさげば色ありといへども見へず、聲ありといへども聞へず、さるほどに色を見るときは、識が元根によつて生ずるなり、聲を聞ときは識が耳根によつて生ずるなり、のこりの鼻根舌こん身こん意身もかくのごとし。

無色聲香味觸法

是を六塵といふ義は、この六ぢんも皆空なりと說給ふなり、六塵といふときは、みな塵の字をつけていふぞ、色塵、聲塵、香塵、味塵、觸塵、法塵これなり、塵はちりとよめるは物をけがすものなり、眼も耳も物の色をみず、いまだ聲を聞ざる已前は、元來淸淨にして、無念無想なるものなれども、色を見、聲をきくによりて、いつくしきものを見ては、はしく思ひ、おもしろき聲を聞てはこゝろをとられ、見る事聞くことにまよひ貪着のおもひをおこすゆゑに、ぼんのうの穢にそむをもつて塵といふなり、しかるに般若の智をもつて皆空なりと觀ずるときは、六根六塵ともに無き物なり無しといふとても、今まで有つる物を、はらひすてゝ今よ

りはじめて無しといふにはあらず、この六ぢんの自體もとより空なるがゆゑになしとはいふなり。

無眼界乃至無意識界

是は十八界を空するなり、まへの六根六塵を合て十二所といふなり、此十二所に六識を加て十八界といふなり、六識とは眼識、耳識、鼻識、舌識、身識、意識なり、眼に青黄赤白黒の色、大小長短のかたちを分別するを眼識といふなり、耳にはしゆ〳〵の音聲を聞わくるを耳識といふなり、鼻によきにはひ悪きにはひをかぎ分るを鼻識といふ、舌に五味をなめしめるを舌識といふなり、身に暑き寒きをふれて覺へ、いたきかゆきを分ちしるを身識といふ、意に一切の是非善悪を種々にふん別するを意識といふなり、十八界といふ心は物の堺かぎりあるを界といふなり、眼は聲をきかず、耳は色を見ず、其司どる處のかくべつなる故に、眼界耳界といふなり。

後拾遺　おのづから法の界にいる人は夫こそやがてさとり也けれ　法性寺入道

四種　身こそあらぬ心の塵を外にして浮世の色に染じとぞ思ふ　徽安門院

千載　月影の常に住なる山の端を、だつる雲のなからましかは　藤原國房

新紋　このまゝにすまば住べき山水ようき世の塵に濁らずも哉　榮仁親王

雪玉　一枝の花にほゝえむ色見せてやがて心にうつしつるかな　道遙院

古今　風の上にありか定めぬ塵の身は行衛もしらず成ぬへら也　よみ人しらず

無々明亦無々明盡

乃至無老死亦無老死盡

是は十二因縁を空するなり、十二ねん縁といふは、一つには無明なり、これは本心本性をあきらめずして、道理にくらきをもつて迷ひをおこすをいふなり、一切のぼんのふの根元は無明よりはじまるなり、二つには行なり、是は無明のこゝろおこりてより、一切善悪の業をつくるをいふなり、三つには識なり、これを妄想もうねんをもつて、父母にあひぢやくの念をおこして、初て母の胎内にやどるをいふなり、四つには名色なり、たいなひにやどりて、目口鼻手足などのかたちが出來て受想行識の四蘊のそなはるをいふなり、名色のめうとは四蘊のこゝろのわざなれば、目に見へぬものなる間名をつけてよばざれば、あらはれがたし、かるがゆゑに名といふなり、色は目に見るところの眼耳鼻舌身などをいふなり、心法と識法とのふたつをかねて、名識といふなり、五つには六入なり、是は心識が眼耳鼻舌身意の六根に

行入て六根となるなり、六つには觸なり、是は六根と六塵とあひたひするをいふなり、さなこは色にたいし耳は聲に對し、鼻は香に對し、舌はあじはいにたいして相觸るゆゑに觸といふなり、七つには受なり是は善惡の事を心にうけ入をいふなり、樂をば樂とうけ苦を苦とこゝろにうけ入をいふなり、八つには愛なりこれは五蘊などのらくを心にうけ入て、さてそれにあひじやくの心をおこすをいふなり、九つには執なり是は愛じやくのこゝろによつて、深くしうぢやくするをいふなり、十には有なり、これは執着の因緣によりて、未來の身を受る事あるを有といふなり、十一には生なり、是は前の有のゐんえんをもつて、終に又うまれ來るをいふなり、十二には老死なり、是は生れてより又やがて、年よつて死するをいふなり、是を十二因緣の流轉といふなり、過去の無明の業緣によつて、今現在に苦をうくる身とうまれ、又今このげんざいにて作る業緣によりて未來世にて又生をうけ、死してはうまれ生れては死し、三世の因果たらず、三界に流轉して、無量のくるしみをうけて、終にやむ事なし是皆最初の無明の一念のまよひによつて、種々のくをうくるをいふなり、さるほどに般若の眞空の智を以て、無明はもとより空にして實性あることなし、夢幻のごとくと觀念をなせば、一切煩惱も有ぞう畢竟みな空にして、しゆ〳〵の夢さめたるが如くにして、過去のこゝろも不可得、現在の心も不可得、未來の心も不可得、三世のゐんぐは一念にくうじ、六道のりんゑ一時にやむなり、

無苦集滅道

是は四諦を空ずるなり、四諦とは則苦諦集諦滅諦道諦なり、先苦諦とは過去のごうじやうによつて、今この身をうけて、種々のくるしみあるを苦諦といふなり、集諦とは集はわつむるとよめり、是は過去にもろ〳〵の惡がうの因をわつめもちたるをいふなり、滅とは一切の煩惱妄ざうを滅しつくすといふなり、道とは煩惱をめつして不生不滅のねはんの樂界にいたる修行の所を道といふなり、是を取あはせていふときは、先今この界へ生れ、色々の苦をうくるは、いかなる因緣ぞといふと、過去にて惡業煩惱をわつめてもちたるゆへに、其因をもつて今この苦をうくる、身をまねき得たるなり、さるほどに此苦をいとひ出離をもとむるには、先惡がうぼんなふをめつする道を修行して、さて不生不滅の、じやくめついらくのところにいたる、苦集の躰元來自空なる間、めつすべき苦集もなく、修行すべき道もなきがゆゑなり。

無智亦無得以無所得故

といふこゝろは般若の知をもつて、五蘊十二所の十八界十二因緣四諦等をくはんずるに畢竟みな空也、その知も空なれば、一ぽうの得べきなし、これを人くう法くうといふなり。

菩提薩埵

これは天竺の詞なり、悟る有情といふ義なり則觀自在ぼさつなり。

依般若波羅密多故心無罣碍

といふ心は、ぼさつ般若の空智によつてしゆ行す、ゆゑに心虛空界の如くなる事をさとつて一切の業障にさへられず。

新古　花みんと植けんひともなき宿は櫻は去年のはるに咲まし　大江嘉言
古今　あすしらぬ吾身と思へと暮ぬまのけふは人社悲かりけれ　紀貫之
山家　野にたてる枝なき木にもおどりけり後世しらぬ人の心は　西行法師
千載　鷲の山月を入ぬと見る人はくらきに迷ふこゝろなりけり　圓位法師
新千　有しにもわらぬ姿の何れをか又うけかへて身を碎くらん　行蓮法師
高野卒　六つの道に迷ひ初しは此法の心をしらぬこゝろなりけり　爲明

新勅撰　法の身は月は我身をてらせども無明の雲の見せぬ也けり　千觀法師
拾玉　とにかくに人の心にかなふ身はもとの都を出るなりけり　慈鎭

無罣碍故無有恐怖遠離一切顚倒夢想究竟涅槃

といふは眞實想の上には、元來生滅なきゆゑに、生死の恐れある事なし、顚倒想とは、一切の有爲のほうは、夢の如くまぼろしの如くにしては、實にあるとなく、しかるを凡夫は迷ひて實に有とおもへるは、あだ成夢をまことゝおもへるが如し、是てんどうむさうなり若一念空するとき一法も得べきなし是則遠離なり、究竟とは、きはまりつきたる義なり、万法みなねはんを至極とするなり、ねはんとは不生不滅のところなり、圓滿淸淨の義なり、淸淨とは空の異名なり。

三世諸佛

三世とは過去現在未來をいふなり、佛とはかくしやと一切有情みな覺しやうをそなへたり、迷ふがゆゑに衆生といひ、さとるを佛といふなり、自心の外にはとけなし、人々自心則佛なれば、是を成佛といふなり、三世といふも遠き事にあらず、前ねんすでに滅したれば、過去

後ねん未しやうせざるは、未らは其中間のすでにおこりたる當念は現在なり、過去佛げんざい身、げんざい佛、未來佛なり、過去心不可得、げんざいじん不可得、未來しん不可得なれば、たゞ一念一佛にして、二心二佛ある事なし、不去不來三世常住なり。

依般若波羅密多故

得阿耨多羅三藐三菩提

六字をば無上成等正覺といふなり、この六字を、則人々本來ぐそくしたる眞性をいふなり、佛を覺しやうといふも此眞性をさとる故なり、一切のものこの眞性にこえたるまで平等にして佛にわつても增す事もなく、衆じやうに有てもへる事なく、ひとしく平らかに行わたりて、かけずあまらずみな備たる故に成等といふ、さてこゝにいふ、こゝろは菩薩ばかりはんにやによつて修行して、ねはんにいたるのみならず、三世諸佛も皆はんにやによるが故に、此上の妙道を成就したるなりといへり。

故知般若波羅密多是大神呪是大明呪是無上呪

呪といふは、諸佛の密語なれば、凡夫のしるところにあらず、二つとも無く、三つともなき、

佛法第一の義なり、神とは神妙にして、はかりしるとあたはざる義なり、いふこゝろはこのはんにやの、功力神變ふしぎにして、よく一切の惡魔の障げを破るゆゑに、大神呪と名づくるなり、これは般若の智をもつて、よく佛法至極の、みやう利をあらはすと、諸經にこゝたるゆゑに、無上といふなり。

是無等々呪

これははんにやのこうゆうによつて、妙覺の佛果を、さとりきはむるほどに、この呪にひとしき呪なし、かるがゆゑに無等等といふなり、初よりこゝにいたるまで、顯說般若となり、顯とはあらはすといふ字なり、文字詞にて義理をあらはするゆゑに、顯說といふ。

能除一切苦眞實不虛

といふ心は、此はんにやのくりきによつて、一切衆生の苦をすくひ、樂みを得さしむる事眞實にして僞りなし、さるほどにもろ〳〵の衆生此般若心經を信仰して受行といふ義なり。

故說般若波羅密多呪

是は上にいふが如く、はんにやはらみつたは、大神呪、大明呪、無上呪、無上等々呪、にして、よく一切の苦を除事眞實なる間、すなはちこの呪をとくといふ義なり。

卽說呪曰。揭諦揭諦。波羅揭諦。波羅僧揭諦

この十三字は呪なり、是を密語のはんにやといふなり、呪は諸佛の密語なるがゆゑなりたゞ佛といふのみ、よく是を知りたまふなり、餘人はしる事あたはず。

菩提娑婆詞

菩提は天竺の詞なり、これ智得道ともいふなり、合ていふ時は覺智成就といふこゝろなり、道のさとるべき無き處にいたり得たるを成就といふなり、菩提ははじめの義也、娑婆詞は末の義也、はじめ菩提心をおこして退屈なく、ゆうもふにしやうじんして、修行をおこたらず、大道をさとつて本來空の處にいたるは、則ぼだいなり、悟り終て畢竟空なれば娑婆詞なり是佛道成就のところなり、

御集　おろかなる心の中を尋ね見よ外にほとけの道しなければ　後鳥羽院

千載　世間は皆ほとけ也おしなへていづれの物と分ぞはかなき　花山院

玉葉　様〳〵に千々の艸木の種はあれど一つ雨にぞ惠み初ぬる　崇德院

新葉　長き夜の闇路の雲は晴ねどもゝとの光りはありあけの月　御製

續古　世を治め民をたすくる心こそやがて御法のまこと成けり　中務卿親王

玉葉　しな〳〵にひもとく法の敎にて今ぞさとりの花は開くる　前大政大臣

新勅　世々を經てとき分る法は多かれど是ぞまことの心也けり　選子內親王

草庵　色も香もなへて空しと說く法の言の葉のみそ誠なりけり　頓阿法師

山家　何事も空しき法のこゝろして罪ある身とは露もおもはず　西行法師

新古　露わくる花すり衣かへりては空しと見るぞ色はありける　信生法師

續後撰　くもりなくむなしき空に澄月も心の水にやどるなりけり　素覺法師

新古　阿縟多羅三藐三菩提の佛たち我たつ杣に冥加あらせ給へ　傳敎大師

風雅　出るとも入るとも月を思はねは心にかゝる山の端もなし　夢窓國師

新千　開わくる心のうちの誠こそをしえにならぬさとり成けり　權僧正桓覺

夫木　心をはいかなる物と知らねども名を稱ふれば佛とそなる　一遍上人

水鏡　夜もすがら佛の道をたづぬれば我心にそたづねいりける　一休和尙

一休諸國物語圖會拾遺人之卷畢

西行物語目錄

卷之上

○西行憲清といひし時の事
○烏羽殿障子の繪の歌の事
○佐藤左衛門尉憲康頓滅の事
○憲清出家を思立事
○保延三年八月終に出家を遂事
○西山に庵むすびて住事
附詠歌の事
○伊勢へまふずる事
附大神宮の御事

卷之中

○神路山の花を愛る事
○東國下向天龍の渡にて難に合事
○武藏野を分入て都芳門院の侍に逢事
○陸奥へ下る道すがらの歌の事
○秀衡に對面の時西行に戀の歌百首勸進の事

卷之下

○西行都に歸り上りて北山に住事
○法金剛院紅葉見の事
○四國の方へ修行せんとて賀茂の社へ御いとま申に參詣の事
○江口の君がもとに宿る事
○讃岐院のわたらせ給ふ松山へ行事
附白峯の御墓へまいる事

○二度都に上り娘にたづねあふ事
○娘をすゝめて出家せしむる事
○娘の尼高野のふもとあまのへ下る事
○西行東山双林寺に住事

西行物語卷之上

西行憲清といひし時の事

鳥羽院の御時、はくめんにめしつかはれし人侍りき、左兵衛のぜう藤原憲清、出家の後は、西行法師といふ、かの先祖は大職冠鎌足公より十六代のこういん、鎮守府の將軍秀卿に九代のばつそん、名もんの大夫ひできよには孫、康清には一男なり、弓矢の家につたはり、武藝のはまれをほどこす、養由が百矢のかいなづしをならひ、張良が三略の書をきはむ、をよそ文をこのみては菅家紀家のきうさうをがくして、ほたるをひろひ、雪をあつめて、身をてらすなかだちとす、管絃のみちもくらからず、かるがゆへに我國のふうぞくなれば、和歌にいたりては、素盞嗚の尊八雲たついづもやへがきの詠を本として、三十一字のやまととばをはじめをき給ひしよりこのかた、人丸赤人の事は申にをよばず、其外此道をもてあそび、とみのをがはのながれをくむもの、在原の業平、みつね、つうゆき、宇治山のきせん等なり、されともかれたる木に花をさかせ、なさけなき鬼神の心をやはらぐる事、いにしへの歌仙先達にもはづべからず、

花の春の詩歌、もみぢの秋の月のえん、かゝりの下のしうきく、南庭の御弓、四季にしたがひての御遊にも先これをめされき、鳳闕の庭に侍る日は、清涼の雲にのぞみて日をくらし、夜宿の御いとまを給はらざりし時は、紫宸の床をまゐりて夜をあかす、朝恩他にことなり、家ゆたかにしては、須達檀彌梨がいきをひをうつし、所從けんぞく七珍万寶にあきみてり、かゝりしかども、若なをあきおぼしめさずして、いそぎ廷尉にもなさるべき、御きしよくしきりなりしか共、莊周がもゝとせのさかへ、おもへばたゞ一夜こてふの夢いく程のたのしみかわらんとおもふにも、とかく申のがれ、ほかには奉公をいたせども、内には世のあたにはかなき有樣をなげく、かの坂の上の政佐は、地獄におつると夢に見て、撿非違使にならじとて、五位のかふりを給りきなど、おもひ出られて、妻子珍寶及王位、臨命臨終時不隨者、唯戒及施不放逸、今世後世爲伴侶と、常に此文を心にかけける、そも〳〵しづかにわんずるに、人身をうくる事、梵天より糸をくだして、大海のそこなる針をつらぬくがことしといひ、又佛法にあふ事、盲龜のうき木のあなにわへるにおなじとみえたり、されどもまぼろしの榮に心をかけ、一且の妻子にはだされて、後世の苦因をうくる事、あはれなるかな、過にし二十五年のたのしみ、おもへばうたゝねの夢よりもはかなし、たとひ此後二十年三十年ありとも、いくばくのおもひ出かわらん、われらかたちを東域にうけたりといへども、はるかに西天のけうぼうをきく事をえたり、たれか此ときつとめをこなはずして、たからの山に入て手をむなしくせんや、此ゆゑに龍樹菩薩は富りといへ共、願心やまざれば、これを貧なりとし、まづしといへども、求る心なければ、これをとめりといへり、書寫の上人は、ひぢをかゞめてまくらとす、たのしみその中にあり、なにゝよりてかさらに浮雲のゑいようをもとめんやとの給へり、これらのことはりを思ふにも、出家の心ざしいよ〳〵ふかしといへども、大かた朝恩のかたじけなさ、恩愛すてがたさにわんじわづらひて、むなしく月日ををくりける事あさましく覺えて、

いつなげきいつ思ふべきとなればのちの世しらで人のすぐらん

いつのよにながきねよりの夢さめておどろく事のわらんとすらん

何事にとまりこゝろの有ければさらにしも又世のいとはしき

此人つねに難波津の風をあふぎ、心のうちのちりをはらひ、とみの小川のながれをくみて、思ひをこらすたよりとす、此ゆゑに君よりも、折にふれ時にしたがひて、題を下されければ、時をうつさずよみ奏しけり、立春の題にて、

岩間とちし氷りもけさは翁そめてこけの下水道もとむらん

うくひすのこゑぞ霞にもれてくる人めともしき春の山ざと

鳥羽殿障子の繪の歌の事

大治二年十月十日の比、鳥羽殿に御幸ならせ給ひて、はじめたる御所の、御しやうじのゑども
ゑいらんあるに、まことにゆふなる御けしきにて、その比の奇よみたち、經信、匡房、基俊、な
らびに慈清などをめされて、此繪共を題にして、をの〳〵一首の詠をたてまつるべきよしおほ
せ下さたけるに、面々にいとなみよまれける、中にものりきよその日のうちに、仕てそうし申
ける、春の雪つもりたる山のふもとに、河ながれたる所をかきたるに、

ふりつみしたかねのみ雪とけにけりきよたき川の水のしらなみ

山里のしばのいほりにひじりの居て、梅を詠めするやうをかきたるを見て、

とめてかし梅さかりなる我やどをうときも人はおりにこそよれ

花の下にて月をながむるおとこを、書たる所を、

雲にまがふ花のしたにて詠ればおぼろに月もみゆるなりけり

夏のはじめほと〻ぎすをたづぬとて山里の原の杉の村だちの中に、わけ入たる所を、

きかずともこゑをせにせんほと〻ぎす山田のはらの杉のむらだち

郭公の初音たづねるかひありて、聞えたるところを、

時鳥ふかきみねより出にけりと山のすそにこゑのをちくる

清水ながるゝ柳のかげに、旅人のやすむさまをかきたる所を、

道のべの清水ながるゝやなぎかげしばしとてこそ立とまりけれ

秋の初風草葉をむすぶ下葉の露もをき所なく、こゝろぼそき所を、

あはれいかに草葉の露のこぼるらん秋風たちぬみやぎ野のはら

山田もるいほのほとりに、鹿のなきたる所を、

小山田のいほちかくなく鹿のねにおどろかされておどろかすかな

小倉山の紅葉あらしにさそはれ、月さやかなる所をかゝれたるを見て、

をぐら山ふもとの里に木葉ちればこずゑにはるゝ月を見るかな

高き山に雲かゝり、うら時雨たる風情を書たるを、

秋しのやと山の里やしくるらんいこまのたけに雲のかゝれる

かやうに十首奏し申ければ、ゑいかんにたえざせまし〳〵けり、その時の手書、定信、時信を
めされてかゝせらる、又慈清をめされて、頭の辨をもて朝日丸といふ御劔を、にしきのふくろ
にて給ふ、其外、女院の御かたゝめされて、中納言のつぼねのうけ給はりて、御はしたもの
をとめのまゝをもて、かさね十五の御衣を給はりて、かたにかけてまかりければ、見るもの上

下目をおとろかし、うらやまずといふ事なし、我身にも生界の面目なに事かこれにしかん、今生の執心　いよ〳〵ふかくやとぞおぼえし、その夕宿所にかへりて、妻子けんぞくつどひあつまり、さかへのまゆをひらき、よろこびの色みをふく見ける、これにつけても名聞利養は、惡道の因緣、妻子所從は、生死のきづなといふ事も恐ひ出されて、返りて佛道をすゝむる善智識かなと、うれしきかた黨侍りき、かくて日にしにかたぶき、月東にいつるほどにをよひで、あひしたしき佐藤左衛門尉憲康といふものと、うちつれてまかり出、みちにて憲康かたりける、我等が先祖秀卿將軍、東域をしづめてよりこのかた、ひさしく朝家の御守として世をしづむ、今われらにいたるまで當帝の朝恩によくして、ひろくはぐくみをはとこす、此程いかにやらん、なに事もたゞ夢まぼろしの心ちして、けふあればとてあすをまつべき身とも覺えず、おはれいかならんたよりもがな、家を出さまをかへ、かた山ざとのすまゐも、あらまほしくこそおぼゆれなんど、誠しくかたれば、憲清もいまさらかゝる事をかたるはいかならんずるやらんとむねうちさはき、たがひにたもとをしぼりける、さて憲康は、朝はたれもいそぎ烏羽殿へまいるべきなり、うちよりさそひ給へとて、七條大宮にとゝまりけり。

佐藤左衛門尉憲康頓滅の事

憲清次の朝憲康を誘はんとて、大宮にうちよりたりければ、門のほとりに人おほく立さはき、内にもさま〳〵にかなしむこゑきこゆれば、あやしとおもひて、いそぎすゝみより、なに事ならむととへば、殿はこよひね死にしなせ給ひぬとて、十九になる妻、七十有余なる母、あと枕にたふれふして、なきかなしむ、これを見るに、かきくらす心ちして、かくあらんとて、思はざるはかの世のはかなきことを、かたりけるとおもふにも、はじめておどろくべき事ならねども、あやなしといふもおろかなり、我身も身とも覺えずいとゞうとましきかたのみしげくて、

朝有二紅顏一誘二世路一　夕成二白骨一朽二郊原一

と口ずさび、少水の魚に心をすまし、屠所のひつじに思ひをかけ、やがてこゝにて、もとゞりきらまほしくおもへども、いま一たび龍顏をも拜し、御いとまをも申さんとおもひて、こまにむちをすゝめて參りけり、そも〳〵此人はのりきよには二年のあにゝて廿七ぞかし、老少不定のならひといひながら、哀に覺えて、

こえぬれば又もこの世にかへりこぬしでの山こそかなしかりける

世中をゆめとみる〳〵はかなくもなをおどろかぬわがこゝろかな

とし月をいかて我身にをくりけんきのふの人もけふはなき世に

ことにきらめきて參りたりければ、折ふし烏羽殿に歌御遊ありけるに、やかて憲清をめさる、

御ゆふはて丶後、頭辨殿をもて出家のいとまを申入たりければ、おもはずのほかの御けしきなりとばかり、仰せ下されけれ共、君の御いましめをおそれ、今度出家をとゞまりて、又愛着のすみかにかへりなば、いつをか期とすべき、夫奇恩入無爲は如來のをしへ、剃髪染衣はげだつの門出なりとくはんじて、禁中をさがり出けるにも、花のもとの好客、月のまへの門人につらならんも、たゞ今ばかりとおぼして、たび〳〵仙洞をかへり見、駒をひかへ〳〵、なく〳〵つくりみちにぞかゝりける。

憲清出家を思ひ立事

過にし二月の頃、出家の事を思ひさだめたりしに、おりふし空かすみ、心ぼそかりしに、

空になるこゝろは春のかすみにて世にあらじとも思ひたつかな

心ざし淺からずといへども、その期や來らざりけん、なにとなきわざ共にさへられて、むなしくはせ過ぬ、おなじ秋の頃思ひ立たりしに、風のをとさへ物わはれに、月のひかりもくまなかりしかば、

をしなへてものをおもはぬ人にさへこゝろをつくる秋のはつかせ

世のうさに一かたならずうかれゆくこゝろとゞめよ秋の夜の月

物おもひてながむる頃の月の色にいかばかりなるあはれそふらん

秋もむなしくのがれぬ、ねがはくば三寶、此たびの出家さはりあらせ給ふなと、いのり申て歸りけり、夕にをよび宿所にかへりさし入れば、年頃いとをしく思ふむすめの、四になるがふりわけがみもかたすぎぬほどにて、よにらうたけなる有樣にて、なに心なくえんにはしりいで丶、父のおはしますうれしさよ、などやをそく御かへりありける、君の御ゆるしなかりけるにやなといひて、よにいとけなきなでしこのすがたにて、かりぎぬのたもとにすがりけるを、たぐひなくいとおしくは思へども、すぎにしかた出家をおもひとゞまりしも、此むすめゆゑなり、されば第六天の魔王は一切取生の佛になる事をさへんがために、妻子といふきづなをつけをき、出離の道をさまたぐといへり、これをしりながら、いかで愛着の心をなさんや、これうそ陳のまへの敵、ぼんなふのきづなをきりはじめなりと思ひて、此むすめをなさけなく、えんより下へけおとしたりければ、ちいさき手をかほにおはひ、なを父をしたひなきければ、これにつけても心ぐるしくはおもへども、きゝいれぬさまにて内へいりぬ、かたはらの女房下部にいたるまで、よにわへなき事に思ひて、こはいかなる事やらんとさはぎあへり、しかれどもかの女房は、かねてより夫の出家の心ざしある事をしりたりければ、むすめのなきかなしむとをもおどろく色なし、是につけてもあはれにおぼして、

露の玉きゆれば又もあるものをたのみもなきは我身なりけり

月すでに中ばふけて、みねのありしのきばの松にひゞき、よそのきぬたうゑうれひ、霜にまじるむしのね、まくらによはり、よろづ心ぼそからずといふ事なし、此時にあたりて、年頃のつまにむかひて、あるべき事どもさま〳〵にちぎれ共、返事にもをよばず、たゞなくよりほかの事はなし、むかしあなんそんじやは摩登伽女といふ、外道のむすめにあひ、すでに禁戒をおかさんとし給ひしを、佛神通をもて見給ひて、文珠におほせて、佛頂神呪をみて給ひしかば、よく心やう〳〵うせて、戒をやぶり給ふとなし、これ一世二世のちぎりにあらず、五百生のえんなりとほとけときたまひき、これらを思ふに、この世ひとつにあらず、後生にはかならずひとつはちすの身となり、ともに無生忍を證すべしと、さま〳〵にかたれども、なをかへりともせず、大かたはいなくばおもへども、とゞまるべき道ならねば、心づよくおもひ切て、みづからもとゞりを切て、持佛堂になげいれ、かどの外へいでけるが、さすが廿五年のあひだ、すみなれし屋となれば、たゞ今ばかりと思ふにも、心のうちかきくらし、その外ちぎりをかうばしうせしつま、四になるむすめの事、かた〳〵せんかたなくて、思ひの涙は袖にあまり、道しばの露にもあらそふばかりに覺え侍りけり。

保延三年八月終に出家を遂る事

年頃西山の麓にあひしりたりける、ひじりのもとにはしりつき、あかつきがたにをよびて、つねに出家をとげにけり、法名に西行といふ、又年頃身ちかくめしつかひけるもの、おなじくさまをかへにけり、かれをば西住とつけにけり、次のあした、いはりのわたりなるひじりたち、あつまりて、こはいかにおもはずの御ことかな、わさましくもとて、おどろきあやしみければ、西行、

うけがたき人のすがたにうかひ出てこりずやたれも又しずむべき
世をすつる人はまことにすつるかはすてぬ人をぞすつるとはいふ
よをいとふ名をだにもつば留をきてかずならぬ身のおもひ出にせん

それ、ねはん經の三馬のたとへにあたりて、はやくも世をすてぬる事、うれしくおほし侍り、心をしづめておもへば、たま〳〵佛法にまいりあひ、因果のことはりをしり、さいわひに善縁にちかづき、ぼだいの妙道をきく、しかるにいづれの宗をも學し、いかなる行をも修せずして、常住の佛性をぐしながら、流てんのもうごうをつくり、出離の善因なき事、返〳〵もをろかなり、この今生一世のみならず、後生には彌流轉のごうによりて、六しゆのちまたにめぐり、四

生のかたちにくるしみ、無窮の生死をうけ、多劫の苦にしづまん事、あさましかるべし、先剃髪染衣のかたちとならば、戒儀をむねとし、よくをすて、愛をはなるべきに、なを妻子をたいし、三どく五よくをほしいまゝにし、五戒十善をもたもたず、こゝに無常の殺鬼、貴賤をえらばず、別離、魔業老少をろむせぬならひなれば、事とおもひと。たがひたのしみと苦しみと共なり、されば此時をんあひのきづなをきり、無爲の家にすみ、俗塵をすてゝ、道門に入事うれしくぞ覺えける。

西山に庵結びて住事　附詠歌の事

さて西山のへんに、しばのいほりをむすびて、すみ侍りけり。

さびしきにたゝたる人の又もあれないほりならべんふゆの山ざと

身のうさを思ひしらでやゝみなましそむくならひのなき世なりせば

としも重ね、去年まではなにとなく、公私につけて、ありし事共おもひ出て、

としくれしそのいとなみはわすられてあらぬさまなりいそぎをぞする

むかし思ふ庭にうき水をつみをきて見し世にもにぬとしのくれかな

あらたまのとしたちかへりわしたは、君の御ため身のため、千秋萬歲、富貴萬福と、いはひし

事ども夢まぼろしのごとし、有漏の妄法なりけりとあさましくて、にしにむかひ、臨終正念、往生極樂とぞいのりける、數ならぬすまゐなれども、春をわすれぬ花なれば、いほりのまへなりける、梅さかりにさきにはひ、人をとゞむるならひにや、ゆきすぐる人すぎかね、たちよりながめければ、

こゝろせんしづがかきねの梅のはなよしなくすぐる人とゞめけり

香をとめん人をうそまで山ざとはかきねのむめのちらぬかぎりは

そのとなりなりけり軒端の梅、風にさそはれてよそのたもとまで、つねに匂ひければ、

ぬしいかに風わたるとていとふらんよそにうれしき梅のにをひを

しばのあみ戸のあけくれは、佛の御むかひをいつならんとまちたてまつるに、さもあらぬむかしの友、花見にとてあつまる、頃にも、何となきむかしがたりにも、心のみだるゝかたもありければよしなしとおもひ、

花見にとむれつゝ人のくるのみぞあたら櫻のとかにはありける

伊勢へまふづる事附太神宮の御事

扨も太神宮にまふで侍りぬ、みもすそ川のほとり、杉の村立の中にわけ入り、一の鳥居の御ま

へにさふらひて、はるかに御殿を拜したてまつりき、そも〳〵當社、三寶の御名をいみ、法師の御殿ちかく參りぬ事は、むかし此國いまだなかりける時、大海の底に大日の印文あり、これによりて、太神宮おまのさかほこをさし入て、さぐり給ひけるに、そのほこのしたたり、霞のごとくになりけるを、第六天の魔王はるかに見て、此したたり國とならば、佛法流布し、人輪生死を出べき相ありとて、うしなはんとしけるに、太神宮三寶の名をもきかず、我身にもちかづけじとちかひ給ひき、その御ことばによりて、外には沙門のかたちをいみ、內には佛法を守護し給ひき、天の岩戸ををしひらき、終に日月の御光に當るもの、みな是當社の恩御なり、そうじて大海のそこの大日の印文より事おこりて、胎金兩部の大日、內宮は胎藏界の大日、玉がきみつがきわらがきなど、重々なる事、四重曼荼羅をかたどれり、外宮は金剛界の大日、あるひは彌陀ともならびたてまつる、しかるに我朝に鎮座ありし御事は、垂仁天皇廿五年にいたりて、太神宮のみとのりによつて、伊勢國度會郡五十鈴川のみなかみに、宮ばしらふとしきたて〻、天照太神をあがめ奉りて、やがて天皇の皇女大和姫を齋宮といはひ參らせて、あまつひむろぎをそなへ、あめがしたをおさめ、代々の御門の宗廟として、いまにめでたくまし〳〵き、なかんづく御殿のかやぶきなる事、御供のたゞ三杵つく事も、國のついへ、人のわづらひをおぼしめすゆゑなり、千木も鳥居もすぐに、かつは木たる木もまがらざる事、人の心をすなほならし

めんとおぼしめす、されば心すなはにして、民のわづらひ國のついへをおもはん人、さだめて神慮にかなふべきなり、まことに不生不滅毗盧遮那法身の内證を出て、ぐちてんだう、四生のぐんるゐを助けんを、跡を垂御座本意、生死の流轉をやめて、常住の佛道に入しめんとなり、生をも死をも、ともにいみ、佛法を修行し、淨土ぼだいをねがふ人、ことに神の御こゝろにも叶ひ、たゞ今生の榮花福德をのみいのり、道念なからんものは、神慮にもかなふべからず、なんと本地のふかきりやくをあふぎ、和光のちかき方便を思ふに、しんがうのなみだすみそめの袖にあまる。しばらくありてかくなん、

宮ばしらしたついはねにしきたてゝつゆもくもらぬ日のみかげかな

ふかく入て神路のおくをたづぬれば又うへもなきみねのまつ風

神路山のあらしおろせば、峯のもみぢ葉、みもすそ川のなみにしき、にしきをさらすかとうたがはれ、御かきの松を見やれば、千とせのみどりこずゑにあらはる、おなじみ山の月なれば、いかに木の葉かくれもなんとおもふ、とに月のひかりもすみのぼりければ、

神路山月さやかなるちかひありてあめのしたをばてらすなりけり

さかき葉にこゝろをかけんゆふしでをおもへば神もはとけなりけり

いづくもつゐのすみかならねば、かたじけなくもあまてる太神のにはに侍りて、後世菩提のこ

とをいのり申さばやとおもひて、おなじくは名にしおふ所なればとて、二見のうらにいはりをむすびて、輔親の祭主が、玉くしげ二見のうらのかいしげみ、まきゑにみゆる松のむら立、と詠せし事どもおもひ出て、かすみのひまよりもりくる月かげ、とはき浪間にかすかなりける、おりふし、

おもひきや二見のうらの月をみてあけくれ袖になみかけんとは

波こすとふた見の浦にみえつるはこすゑにかゝる霞なりけり

西行物語卷之上　終

西行物語卷之中

神路山の花を愛る事

花のさかりにもなりければ、神路山のさくら、よし野の山にもはるかにすぐれたりければ、神官ともみもすそ川のほとりにわつまりて、えいじけるに、

いは戸あけし天つみとのそのかみにさくらをたれかうへはじめけん

神路山みしめにこもるはなざかりこはいかばかりうれしかるらん

風の宮の花、とにわりなくさきみだれたるを見て

この森は花をおしまでよそならんこゝろを風の宮にまかせて

月よみの宮にまふでたりけるに、まとになにしおひて、月のひかりおもしろくはるさかりなりければ、

こずゑみれば秋にかきらぬ名成けり春おもしろき月よみのもり

さやかなるわしのたかねの雲まよりかげやはらぐる月よみのもり

わしの山月をいりぬとみる人やくらきにまどふ心なりけり

さくらの宮のはな、風にさそはれ、木のもとにちりうき、雪のつもるやらんとおぼえて、やるかたなかりければ、

神風にこゝろやすくそまかせつるさくらの宮の花のさかりを

さてもこのところにやすらひて、すでに三とせわまりにもなりぬ、心ざしたりしわづまのかたもゆかしければ、命のほともしりかたしとて、すでに出んとするに、日頃わさからずなれちぎりし人〳〵あつまりて、夜もすがら名殘をおしみ、絃歌のきよくにこゝろをとゞめ、たがひに袖をしぼりけり、折ふしその夜、月おもしろかりければ、

君もとへ我もしのばんさきだゝば月をかたみにおもひいでつゝ

東國下向天龍の渡りにて難に合事

すでにわづまのかたに下るに、日數つもれば遠江國天龍のわたりといふ所にて、武士の乘たりける舟に便船をしたりけるほどに、人おほくのりて船あやうかりけん、あの法師おりよ〳〵といひけれ共、わたりのならひと思ひて、きゝ入ぬさまにてありけるに、なさけなくむちをもつて西行をうちけり、血なんど頭より出て、よにあへなくみえけれども、西行すこしもうらみ

たる色なくして、手を合せ舟よりおりにけり、是を見て、供なりける入道、なさかなしみければ、西行つく〳〵とまもり、都を出し時、みちの間にて、いかにも心ぐるしき事あるべしといひしはこれぞかし、たとひわし手をきられ、命をうしなふとも、それまつたくうらみにあらず、もしいにしへの心をも持へくは、かみをそり衣をそめでこそあらめ、佛の御心は、みな慈悲を先として、我らがとくの造惡不善のものをすくひ給ふ、さればわだをもてわだをはうずれば、其恨みやまず、恩をもて讎を報ずれば、あだすなはち滅すといへり、經の中には、無量劫の間修したる善根も、一念の惡をおこせばみな燒失すともいへり、又不輕菩薩は、うたるゝつえを いたます、我深敬汝等、不敢輕慢、所以者何、汝等皆行菩薩道とて、なほ禮拜恭敬し給ひき、これみな利他をむねとし、佛道修行の姿なり、自今以後もかゝる事はあるべし、たがひに心ぐるしかるべければ、なんぢは都へ歸れとて、東西へぞわかれける、この同行の入道も西行がそのかみの有さまども思ひいで、かゝる事を見て、心うく覺えけるも、ことはりとこそおはれなる、西行心づよくも同行の入道をばおひすてたりけれとも、年比あひなれしものなれば、さすが名ごりはおしかりけれども、たゞ一人小夜の中山、ことのまの明神の御まへに侍りて、若以色見我、以音聲求我、是人行邪道、不能見如來と禮拜して、さやの中山をこえてかくなん、

年たけて又こゆべしと思ひきやいのちなりけりさやの中山

たゞひとりあらしの風の身にしみて、うき事いとゞ大井川、しかいのなみをわけ、なみだも路もおきまがふ、すみ染の袖しぼりもあへずゆく程に、するがのくに、をかべのしゆくといふ所に着きて、あれたる御だうにたちより、やすみて居たりけるに、ふるきひがさかけられたるをあやしと見るに、過にし春の比みやこにて、たがひにさきだゝは還來穢國、最初引攝の、ちぎりをむすびし同行の、あづまのかたへ、修行に出し時、あながちにわかれをかなしみしかば、是をかたみにとて、我不愛身命、但惜無上道と、かきたりしが、笠はありながらぬしはみえざりければ、をくれさきだつならひ、はやもとのしづくとなりにけるやらんと、あはれにおぼえてなみだをゝさへて、やどのものにとひければ、京より此春修行者のくだりてありしが、此御だうにていたはりをして、うせ侍りしを、いぬのくひみだして侍りき、かばねは近きあたりに侍るらんといひけれと、尋るにみえざりければ、

かさはありその身はいかになりぬちんあはれはかなきあめのしたかな

かくうちながめてゆく程に、はつ秋風も身にしみて、いつしか野べのけしきもあはれに、むしのこゑ〳〵、をとづれたるとつてを、まつとしもなき、こしぢのかりもをとづれ、こゝろはそく覺えて、

秋たつと人はつげねどしられけりみ山のすその風のけしきに

おぼつかな秋はいかなるゆゑのあればすゞろにものゝかなしかるらん

しら雲をつばさにかけてとぶかりの門田のおもの友したふなり

むかしなりひらの中將、つたかへでに道まよひ、夢にもあはずなりゆくとながめけんうつの山べをすぐるにも、むかし人こひしき心ちして、清見か關につきぬれば、おきのなみゝぎはの岩にくだけ、月のひかり、しほにみちたるありさま、聞しよりも、わりなくおぼえけれは、

清見かたおきのいはこすしらなみにひかりをかはす秋の夜の月

するがの國にかゝりて、在中將の山はふじのねいつはそりといひけんもことはりとおぼえて、はるかにふじの高嶺を見あぐれば、おりしりがはの煙立のぼり、山のなかばは雲にかくれ、ふもとに湖水をたゝへ、南には郊原あり、まへには蒼海まん〳〵として、釣漁のたすけにたよりあり、都出てをはく、山川江海をしのぎし旅のうさも、此所にてすこしわするゝ心ちして、おぼえける、

風になびくふじの煙の空にきえてゆくゑもしらぬわがおもひかな

いつとなき思ひはふじの煙にてまどろむはどやうきしまが原

あしがら山にかゝりて、むかし實方の中將の、名もあしがらの山なればと詠め、又白雪山深鳥一聲といひし人のことゞも思ひ出さるゝおりふし、木がらしの風、身にしむばかりなりけれ

ば、

山里は秋のすゑにぞおもひしるかなしかりけり木がらしの風

相撲國大庭といふ所、砥上が原をすぐるに、野原の霧のひまより、風にさそはれ鹿のなくゝゑ聞えければ、

ゑばまどふくすのしげみにつまこめてとかみが原にをしかなくなり

その夕ぐれかたに、さはべの鴫、とびたつをみしければ、

心なき身にも哀はしられけりしぎたつ澤の秋のゆふぐれ

武藏野を分入て隱遁の僧にあふ事

さしていづくを心ざすともなければ、月のひかりにさそはれて、はる〳〵とむさし野にわけ入ほどに、おばなが露にやどる月、すゑこすかせに玉ちりて、小はぎがもとのむしのね、いと心ぼそく、むさし野の草のゆかりを、たづねけんもなつかしく、やどをば月にわすれて、あすのみちゆきなんと、くちずさびてゆくほどに、みちより五六町ばかりさし入て、經をどくじゅするとゑしければ、人里は此すゑに遙にへだゝりたるとこそきゝしに、あやしと思ひて、こゑにつきて尋ね入てみれば、わづかなる庵のうへをばうすかゝる萱にてふき、萩女郎花、いろ〳〵の

秋の草にて、めぐりをかこひ、夜ふす所とおぼえて、東によりてわらびのほとろを折しき、西のかべにゑざうの普賢をかけ奉り、御まへには、法花八ぢくををかれたり、庭には千草の花つゆにかたぶき、むしのこゑ〳〵、所かるにあはれに、いづこぞととふ人もわらしとおもへば、かよひぢもたえにけり、庵の内を見いれたれば、かうべには雪ふり、まゆには霜をたれたる、老僧九十有餘とおぼえたるが、在於閑處、修接其心とよみたてまつる、もし仙人などにてもやと、あやしく思ひて、八月十五夜、名にたがはぬ月のかげなれば、いづくのかくれがまでも、まがふべきかたもなし、あゆみより、まへに侍りけれ共、たがひにあきれたるさまにて、物もの給はず、やゝ久しくありて、西行いかなる人のかくてはおはするやらんと思ひけれども、こたふる事なし、かさねて我はこれ都のほとりのものなり、あづまのかたゆかしくて下り侍りしが、むさし野のけしき、ふるさとにてきゝしよりも、あはれに覺えて、わけ入程になん、これより人すむかたもはるかなりときく、なにを御たよりの御すま居にか、いにしへの御事もゆかしくなんといへば、老僧郁芳門院の侍の一臈にて侍りしが、女院かくれさせ給ひてのち、出家して國々修行せしが、この野べ、佛道修行のかくれがにたよりありとおもひて、廿九の年より、すでに六十餘年、此所にとゞまれり、されば讀誦の數、七萬餘部なりとかたる、西行も郁芳門院の御事もよそならぬ御事なれば、たがひにかたり、こけのたもとをしぼり、名殘おしくおぼ

えけれども、あかつきがた立わかるゝとて、

いかで我きよくゝもらぬ身と成てこゝろの月のかげを見がゝん

いかゞすべき世にわらばやは世をも捨てあなうの世やとさらにおもはん

秋はたゞこよひ一夜の名なりけりおなじ雲井に月はすめども

陸奥へ下る道すがらの歌の事

みちのくへ下りけるに、しら川の關といふ所にとゞまり、能因入道、都をばかすみと共に立しかど秋風ぞふくしら川の關と、ながめし事どもおもひ出て、ことに月さえおもしろかりければ關屋のはしらに、

しら川のせきやを月のもる影は人のこゝろをとむるなりけり

次の日開山をこえて、はる〳〵行程に、七度くもり、八度雨ふるとかやの心ちして、時々雨うちふり、とにものわはれなりける、その夕ぐれ、

たれすみて哀しるらん山里の雨ふりすさぶ夕ぐれの空

さても關屋をたちて日數すぐるほどに、はるかなる野中にゆきくれて、しづがふせやのありけるに立入けり、夜ふくるまゝに、月くまなく、みやこにてながめかずにもあらずおぼえて、さ

ても月見んたびには、たがひに思ひ出んと、ちぎりし人の事思ひ出られて、

一　みやこにて月を哀とおもひしはかずにもあらぬすきひなりけり

月見ばとちぎりをきてし古郷の人もやこよひ袖ねらすらん

かくてつぼのいしぶみ、ぬまだち、なんどいふ所〳〵を過て、ある野中をすぐるに、ことありがほの墓の見えけるを、草かりけるをのこに、あれはいかなるはかぞと問ければ、これなん實方中將ときこえし人の御はかといふを聞て、あはれに覺えて、

くちもせぬその名ばかりをとゞめ置てかれ野のすゝきかたみにぞ見る

はかなしやあだに命の露きえて野へにやたれもをくりをかれん

秀衡に對面の時西行に戀の歌百首勸進の事

あくろや、つがる、えびすがしま、しのぶの郡、ころも川、いづれをわきて、ながむべしどもおぼえずして、行ぼどに出羽、陸奥兩國をしたがへ、ひらいづみといふ所にすみ侍りける、ひでひらとて、威勢のもの侍りけり、かねてより和歌のみちなをざりならず、すき侍よしきゝしほどに、かしこへ尋ねゆきたりければ、ひでひらよろこび對面して、我先祖より今にいたるまで、西行にうとからぬ事なんどかたりて、よのつねならずもてなしけり、あるとき秀衡かたり

けるは、たま〳〵さいわいに此國へ下り給へり、戀の百首をすゝめ申事侍り、よみて給はりなんやといひけれども、とかくいなみてよまざりけるが、千里の濱、草のまくらにて見たりし、夢のとなんおもひ出て、少々つらね侍りけり。

たてそめてかへる心はにしきゝのちつかまつべきこゝちこそせね
身をしれは人のとがとも思はぬにうらみがほにもぬるゝ袖かな
くまもなきおりしも人を思ひ出てこゝろと月をやつしつるかな
あはれとて人の心になさけあれなかずならぬにはよらぬなげきを
たのめぬに君くやとまつ霜のまはふけゆかでたゞわけなましかは
あふまでの命もかなとおもひしはくやしかりけるわがこゝろかな

かくて四五年も、とゞまり給ふべきよし、秀衡申けれども、むやくなりとおもひて、秋のすゑつかたになりて、出にけり、あるかた山がけのはにふの小屋にとゞまりたりけるに、ねやの秋風身にしみ、きり〳〵すのこゑ、よはりゆくあはれにおぼして、

きり〳〵す夜さむに秋のなるまゝによはるかこゑのとをざかりゆく

都ならねども、としの暮には、われも〳〵と、そのいそぎをするも、哀に覺えて、

つねよりも心はそくぞおぼへけりたびのそらにてとしのくるれば

うき身こそいとひながらも哀なれ月をながめてとしのくれぬる

とし立かへりければ、み山べのかすみもともにおもひたち、みやこのかたへ行ほどに、ある野の中に、青柳のいとおもしろきをうへまはし、軒ばにはこくらきほどに梅をうへなべらたるが、花さきみだれたりければ、人とゞめぬと、ゆきもやられぬ匂ひゆかしさに、此ふせやにとゞまりけり。

ひとりぬる草のまくらのうつりがはかきねの梅の匂ひなりけり

山かげのかたをかかけてしむる野のさかひにたてる玉のを柳

かくて、山々寺々をつたひゆくほどに、四月のはじめばかりに、美濃國までのぼりたりけるに、さすが捨しながらも、都のかたの事ども床しく覺えて、そなたのたよりかなとうちわるます、おりふしほとゝぎす。二聲三聲をとづれてすぎければ、

ほとゝぎす都へゆかばとつてんこゑをくれたる旅のあはれを

西行物語卷之中終

西行物語卷之下

西行都に歸り上りて北山に住事

こゝろにまかせぬ命なれば、二たび舊里にかへり、都のありさまをみれば、をくれさきだつためし、末の露、もとのしづくとなりはてゝ、此十余年の間にめぐり來て、なれむつひし人々をたづぬれば、みな鳥邊野の夕べのけふりとのぼり、舟岡山のあしたの露ときえはてゝ、むなしき名のみあさぢふや、よもぎがもとにとゞめをき、そのすみかをとへば、庭もそともゝひとつにて、むくらの門、草の戸ざしのみふかくして、うづらのねやと、あれはてたる所〳〵百六十余家なり、さればこれほどに、あだなるうき世に、我身いかにとして、つれなくのがれきつらんと、淺ましくおぼえて、なほ胡馬北風にいはへ、越鳥南枝にすくふとやらんの風情に、古郷をしたふ、心にひかれて又かへりきぬる事我心なくも、うたてしくおぼえて、

數ならぬ身をもこゝろのもちがほにうかれては又かへりきにけり

これや見しむかし住けんやとならんよもぎか露に月のかゝれる

としころしりたりける人のもとへ尋ねゆきたりけるに、男ははやうせにけりとて、女房ばかりなきゐたりければ、西行出さまにしやうじにかきつけゝり、

なきあとのおもかげをのみ身にそへてさこそは人のこひしかるらめ

きへぬめりもとの雫をおもふにもたれかはすゑの露の身ならぬ

京中もなにとなく、そう〳〵なる事のみありて、心みだれければ、

はるかなる岩のはさまにひとりゐて人めおもはでものおもはじや

衰れとてとふ人のなどなかるらんもの思ふやどのおきのうは風

しはりせて猶山ふかくわけいらんうきことときかぬ所ありやと

大内右近の前をすぐとて、見いれたてまつれば、鳥羽院の御時にもにず、かはりはてたりければ、西行

情ありしむかしのみ猶しのはれてなからへまうき世にもふるかな

かくうちながめて、北山のおくにかたのごとくなる柴の庵をむすびて、をこなひ侍りけるに、おなし心なる友なりかければ、心すごく覺えて、

山里にうき世いとはん友もがなくやしく過しむかしかたらん

法金剛院紅葉見の事

神無月の比、法金剛院の紅葉見にとて人〳〵さそひければ、待賢門院の御時、女房達あまたもみぢをおらせなどしてたはふれ給ひけるを、西行見て、むかしの事どもおもひ出されて、近衛のつぼねのもとへ申つかはしける、

紅葉見て君がたもとやしぐるらんむかしの秋をおもひいでつゝ

近衛のつぼねの返事、

色ふかきこずゑを見ても時雨つゝふりにしとをかけぬまぞなき

次の年七月十五日の夜、ことに月わかゝりけるに、京中の貴賤、みな〳〵船岡れんだい野にあつまりて、なき人をかず〳〵にとふらふを見るにもわはれに覺えて、

いかでわれこよひの月を身にそへてしでの山路の人をてらさん

人々かず〳〵に、火などともすを見て、

はつ秋の中の五日のこよひこそなき人かずのほどはみえけれ

むしの音をきゝて、

そのおりのよもぎがもとのまくらにもさこそはむしのねにもむつれめ

中院の右大臣出家の心ざしあるよし、夜もすがら御物がたりありける、折ふし月くまなかりければ、

夜もすがら月をながめて契りおきしそのむつことに闇ははれにき

御返事、

すむと見し心の月もわらはれてこの世のやみははれもしにけん

中の院の右大臣うけ給りにて、戀の百首めされければ、勅定そむきがたきによりて、

なにとなくさすがにおしき命かなありへは人やおもひしるやと

數ならぬ心のとがになしはてゝしらせてこそは身をも恨みめ

おもひしる人有明の世なりせばつきせずものは思はざらまし

おもかげのわすられまじきわかれかなごりを人の月にとゞめて

うとくなる人をなにとてうらむしらんしられずしらぬおりもありしに

あひしりたりける人の、あづまへくだるよし、きゝつかはしける、

君いなば月まつとてもながめやらんあづまのかたのゆふぐれのそら

四國のかたへ修行せんとて賀茂の社へ御暇申に參詣の事

四國のかたへ、修行せんと思ひ立に、年頃つかうまつりし、賀茂の宮にも、御いとま申さんとて、御幣なんど用意して、仁安二年十月十日頃の事なるに、御まへに近づかん事も此たびばかりなどおもひて、内へもまいらぬ身なりければ、なみだをながしかくなん、

かしこまりしでになみだのかゝるかな又いつかはとおもふあはれに

此秋、とをくすぎやうすると聞しめして、白川の大納言殿よりをくられける、

あらしふく峰の木葉にともなひていづちうかるゝこゝろなるらん

返事、西行、

なにとなくおつる木の葉もふく風にちりゆくかたをしられやはせん

待賢門院の女房、世をのがれて小倉山の麓に庵を結びてすみ侍りける所に行てみれば、聞しよりも猶かすかにあはれなるすまゐなり、風のをともあはれに、かけひの水もたへ〳〵にをとづれ、嶺のつま木をひろひ、谷の下水をむすぶたよりまでも、一かたならぬ哀に、涙をもよほさずといふ事なし、此人世にありし時は、かたち人にすぐれ、心ざまゆうに萬人の心をつけ給ひしぞかし、今は引かへて、みどりのかみは雪にかはり、青柳のまゆずみは霜をかさねたり、老の波かはによせ、こさすみぞめのたもとに、かはりはてたる有さま、よにあはれに覺えて、

山おろすあらしのをとのけはしきはいつならひける君がすみかぞ

此歌を見て、おなじ院の女房、兵衛のつぼね、あひしたしかりけるが返し、

うき世をばあらしの風にさそはれていゑを出にしすみかとそ見る

江口の君がもとに宿かる事

天王寺へまふでけるに、道にていと雨ふりければ、江口の君がもとに宿をかれども、さゝいれぬさまにて、さやうの人をばこゝにはとゞめずと申ければ、西行かくぞ書付て出けり、

世の中をいとふまでこそかたからめかりのやどりをおしむきみかな

遊君ども是を見て、よび返して返事、

世をいとふ人としきけばかりの宿にこゝろとむなとおもふばかりぞ

すでに天王寺に參りてしばらくありけるが本より四國のかたへ下るべき心ざしあるうへ、新院のあらぬさまにて、ながされさせ給ひし御事も、にげなくも御有樣ゆかしさに、讃岐のかたへ下らんとするにあひなれし同行どもあながちにとゞめければ、

たのめをかん君も心やなぐさむとかへらんことはいつとなくとも

月の色に心をきよくそめまして都をいでぬわか身なりせば

讃岐國に下り付て、新院の御ありさまたづね申に、後世の御つとめなんども、わたらせ給ひけ

るよしきゝて、若人不嗔打、以何修忍辱と申ておくに、
世中をそむくたよりやなからましうきおりふしに君かおはすは

讃岐院のわたらせ給ふ松山に行事附たり白峯の御墓へまゐる事

新院はやかくれさせ給ひぬと聞に、なみだもとゞまらず、四五年ばかりありて、讃岐の松山といふ所に付てわたらせ給ひける所をとふに、跡もなかりければ、

松山の波にながれてよる舟のやがてむなしくなりにけるかな

むかしは一天四海をなびかし、百宜万乗にあふがれ、いさゝか天氣にそむかず、いかにもして龍顔にも近付、綸言をもかうふらばやなんどこそ有しに、十善の玉の臺をふりすてゝ、佛法の名をだにきかぬ、遠き島、ふかき山中に、すてをきたてまつる事、あまりの御いたはしさに、御墓のまへにしばらく侍りてなく〳〵

よしや君むかしの玉の床とてもかたらんのちはなにゝかはせん

かくてすまゐありき、同國善通寺と申は弘法大師御誕生の砌、弘法流布の靈地なりければ、かしこに庵をむすび、二三年侍りけり、さてしもあるべきならねば、都のかたへと思ひ立けるに、軒端の松も人ならば、たかひに名殘もいかにおしからんとおもひて、

こゝを又我すみうくてうかれなば松はひとりにならんとすらん

すでに都にかへりのぼりて、むかしゆかりありし人のもとへ、尋行てとゞまり、夜もすがらいにしへいまの事どもかたりて、たがひに袖をしぼりけるに、あるじのかたりいふ、さてもさばかりいとをしがらせ給ひし、姫君の事いとをしさよ、御出家の後やがて、母御せんもさまかへて、一二年はひめ君と一所におはせしが、九條の刑部卿の姫、冷泉殿の御つぼねと申御子にしまいらせて、よにいとをしくしまいらせ給ひ候き、その〳〵ち母御せんは高野のふもと、あま野といふ所に、をこなひておはしき、此七八年は、かりそめのをとづれもなし、此程冷泉殿ひかへ服の御むすめに、伯耆の三位殿と申人をむこにとりて、此姫御せんを上らう女ばうにし參らせて侍り、たゞ明くれは佛神に御宮づかひをのみ申て、今生にて父の御行衛をしらさせ給へとて、なき給ふより外の御事なしと語ければ、西行聞入ぬさまにもてなしてかへりけり。

再都に上り娘に尋ねあふ事

かくて次の日、西行冷泉殿あたりなりける所に行て、あるじをかたらひて、かの娘をよびければ、我父こそさやうに道心おこし給たると聞しかとおもひていそぎ行てみれば、すみぞめの衣にやせ〳〵とし玉ひたる有樣、見もならはぬ心ちしてけれども、我父ときくからになみだもと

いまらず、西行もありし花遊のすがたにもに丈、よにけだかくもねびたるものかなとあはれに覺えけり、西行申けるは、年頃はたがひに行衛もしらざりしに、今こそ見奉れ、抑親となり子となる事、前世の契りわさからずいされば我教訓に付給ひてんやといふ、親にてわたらせ給へば、いかでかたがへたてまつるべきといへば、よろこびて、いまだいとけなかりし時は、心ばかりはいかにもてなしかしづき、院内へもまいらせんなどこそ思ひしに、我身かやうになるうへはちから及ばず、さればかくすてながらも、つねに心のみだるゝはたゞ御うへなり、さしもなき宮づかへは、人にあなどらるゝ事なり、此世はおもへば夢まぼろしのごとし、わかくさかんなるもの老おとろふるに程もなし、たゞ尼になりて、母と一所にて後の世をたすかり給へ我極樂にまふでば、いそぎむかへたてまつるべしといへば、しばしうちわんじて、なみだをおさへて、我おさなきよりして父母にもそひ奉らず、よろづいやしき身となり侍る、さればいかならんたよりもがな、さまかへんとおもひ侍りつるにといへば、西行よろこびて、しかゝるの日、めのとのもとへとぞちぎりてかへりける、其日にもなれば、髪などあらひてまつほどにむかへの車よせたりければ、すでに出んとしたりけるに、いかゝ思ひけんしばらくとて内へ入冷泉殿をつくゝと守りて、泪くみて出にけり、さて待かねて冷泉殿より、むかへにやりたりければ、はやさまかへて出にけりと聞て、此兒六の年よりかた時立はなるゝ事なくて、たゞひなくこそおもひしに、我思ふ程はなかりけりとうらみ給ひにけり、たゞし出さまに我をつくゝとまもりし事こそ哀なれとて、なきかなしみ給ひにけり。

むすめをすゝめて出家せしむる事

西行娘をむかへとりて、たけなるかみをゆひわけ、出家受戒をさづけていはく、我在俗のむかしは、世路をわしりて地獄のすみかをたづね、出仕奉公のおごりをよろこびて、妻子珍寶に心をとゞめ、火宅を出ざりつ、それ花はつねに風にしたがひ、月は出て雲にかくる、昨日見し人けふはなし、風のまへのともし火、いなづまのかげ、夢まぼろしのたぐひと觀じて、頭燃をはらひすてゝ、出家をとげ、山林流浪の行をえて、乞食頭陀の身となるといへども、凡夫惑の身、なを汝が事をわすれず、いますでに出家をとげ給ひぬ、今生の望たんぬべし、人目には女人なりといへども、かならず當來の佛子なり、つねにこの文をたもちたまへとて、極重惡人無他方便、唯稱彌陀、得生極樂、若有重業障、無生淨土因、乘彌陀願力、必生安樂國、常に此文をわすれ給ふべからず、たがひに見え見奉らん事、今をかぎりなり、淨土にては待たてまつるべし、それ高野山は、弘法大師入定のみぎり、彌勒慈尊、下生の佛土なり、されば此山のふもとに、あま野と云靈地あり、汝が母此所にありときく、ゆきてともに佛道をいのり給ふべし

といへば、娘の尼公なく〳〵申けるは、我四歳にして父にすてられ、七にして母にわかれたてまつりて、中有の闇にまよひ、人をおそろしとのみ思ひて、あかしくらし侍りき、さればおさなくよりして、出家の心ざし侍りしかども、女の身なれば、かなはぬ事のみなり、今うれしう出家をとげ侍りぬ、我に万寶をあたへ給ふとも、たゞ一旦の夢なり、今の教化の御ことば、要文を後生の道しるべにて、淨土にては三人かならずとて、なく〳〵わかれけるこそ哀れなれ、西行はるかに見をくりて、

のがれなくつゐに行べき道をさはしらではいかゞすぐべかるらん
月を見て心うかれしいにしへの秋にもさらにめぐりあひけり

娘の尼高野の麓あま野へ下る事

此尼高野のふもとゝばかり聞つれども、いづくをさしてゆくべきかたも覺えず、うき事かたる友もなし、心ひとつをしるべにて、ならはぬ旅の草枕、こよひはじめのかりねとて、我なみだこそあるものを、秋の露さへをきそへて、袖も枕もうきゆめの、すゑもはかなくおどろきて、さすが忘れぬ古郷の、面影のみぞ身にそひて、心みだつゝ夜半なれば、ゆふつけ鳥の、あかつきのこゑと、共になきあかし、ひるはひるとて尋ぬべき、草のゆかりもおぼえねば、をちかた

人のわけそめし、たゞ道しばをしるべにて、なく〳〵たどり行ければ、みち行人のあやしきも是はたゞ人にあらず、いとをしやなんといひてなみだをながしけり、さて日かずもつもれば、あま野にたどりつきて、母のすみける庵にたづねわひて、ありしむかしの事ども、たがひにかたりあひ、ともにつとめをこなひて、明しくらしけるとぞ聞へ侍りし、其後西行、大原の奥にこもりて、をこなひけるに、かけひの水もこほりて、春にならでは、あかの水などもえくむまじきと申あひけるに、春たちたりけれども、猶氷とけやらず、いつくむべしともみえざりければ、

わりなしや氷るかけひの水ゆゑにおもひすてにし春そまたるゝ

みやこそ雪の下水とけざらめやこのそらは春めきぬらん

大原はひらのたかねの近ければ雪ふるほどをおもひこそやれ

一院かくれさせ給ひて、やがて野べの御葬送の夜、高野より西行まゐりあひて、あはれさにかくなん、

こよひこそおもひしるらめ淺からぬ君にちぎりのある身なりけり

すでにおさめ奉らんとて、ひさしの御車、あらぬさまにみえて、御供の人々袖をしぼりければ

みちかはる御幸かなしきこよひかなかぎりの旅とみるにつけても

すでにおさめまゐらせて、御供にさぶらわれける人〳〵かぎりなくなげきかなしみながらも、さてのみあらぬ御事なれば、みなかへり給けるに、西行ひとりとゞまり、後の世の御とぶらひ申さんとて、おくるまで侍りてよみける、

とはゞやとおもひよらでぞなげかまじむかしながらのうき身なりせば

西行東山双林寺に住事

しづかにむかしをおもへば、生年廿五のとし、仙洞の北面を出て妻子珍寶をふりすて、佛前にむかひてたぶさをきりつるに火宅を出て、み山のおくの庵を尋て心を八功德水にすまし、おもひを九品の淨刹にかけき、後には諸國を頭陀し、山林斗藪の行を立て、平等一子のおもひに住じて、衆生の機にしたがひて、教化をあたへき、常に慈悲のたもとのうへには觀喜のなみだを苦人一日一夜をふるに、八億四千念の思ひあり、しかれども、懺悔六根淨のためには、三十のごひ、忍辱のころものうらには、無價の眞實の玉をつゝみき、かくて五十餘年をはせすくし一字のことのはをくちずさむ、此惡心をやめて佛道を成ずる媒と覩じて、東山のほとり双林寺のかたはらにいほりをむすびて、くわんねんのまどのまへには、三明の月のひかりを友とし、稱名のゆかのほとりには、せつしゆの御むかひをまちて、あかしくらしけり、御堂のみぎりに

櫻をうへられたりけるに、おなじく此花ざかり、釋迦入ねはんの日、二月十五日のあさ往生を思ひてかくなん、

ねがはくは花のもとにて春しなんそのきさらきのもち月の比

すでに此歌のごとく、建久九年二月十五日、正念たゞしくして、西方にむかひて、若人散亂心　乃至以一花　供養於畫像　漸見無數佛　於此命終即　往安樂世界　阿彌陀佛大菩薩衆圍繞住所といへて、

はとけにはさくらの花をたてまつれ我後の世を人とふらはゞ

とながめて、千返念佛やむ事なく、空に伎樂のをとはのかに、異香とほくんし、紫雲はるかにたなびきて、三尊來迎のよそほひ、しやうじゆくはんぎのごとし、萬民の耳目をおどろかし往生のそくはいをとげにけり、さて高野のふもと、あま野にありける西行が同行の尼は、西行にはるかにまさりたる心つよきものにて、夫出家の時、やがてさまをかへ、あま野といふ所にこもり、古郷のつてたよりをきく事をいとひ、つねには無言をおこなひ、かのむすめのあまを善ちしきとしてをはりをかねてより覺え、念佛やむ事なく、ねふるが如くして往生をとげにけり、むすめの尼も一生不犯の身にて、正治二年八月彼岸の頃、これも往生ありがたきほどにとげにけり、西行往生の後、みやこの内の歌よみたち、あとをしたひ袖をしぼらぬはなかりけり、中にも左近の中將定家、菩提院の三將中位のもとへ、西行往生の事を申されけるおくに、

一

もち月の頃はたかはぬ空なれときえけん雲の行衛はなしも

三位の中將公衡の變事

むらさきの色ときくにぞなぐさむるきえけん雲はかなしけれども

西行物語卷之下終

神變大菩薩傳目錄

卷之上

○役行者靈驗鐘懸岩之話並譯文をあらはす話
○役行者御誕生之話並優婆塞行呪力をあらわし玉ふ話
○鎌足公御病腦役行者呪驗の話並山階寺御建立之話

卷之中

○役行者金剛山御登山女人禁制足摺岩之話並茅原寺建立御遺像之話
○一言主之神出現之話並法起菩薩之淨土を拜し行者仙術を獲玉ふ話
○攝州箕面山唐人戻り岩之話並元山上義覺義玄之話

卷之下

○金剛山本尊出現之話並行者山上ケ嶽御登山前鬼後鬼之話
○役行者の前生を論ふ話並十二數來復之話
○役行者石橋を架んと慮り玉ふ話並韓國廣足讒奏之話
○廣足謀て行者の母公を呵責する話並行者大島遠流の話
○廣足神罰を蒙り死亡行者歸洛之話並行者唐土へ飛行の話

附錄

○吉野山千本櫻の話並楠正成侯武德之話

神變大菩薩傳卷之上

浪華　藤東海著

役行者靈驗鐘懸岩之話並證文をあらわす話

抑役行者神變大菩薩ともふし奉るは、七生のむかしより、天竺唐土吾朝に修行し、大和國葛城郡金剛山といへる、三災不壞の寶山をひらき、孔雀明王の咒を持誦し、修行滿足仙術を得て、能鬼神を駈使す、又或時は雲に乘じて、上は四王自在所に至り、下は龍宮仙府に遊ぶ、攝州箕面山に登ては、龍樹菩薩の淨土を拜し、又或時は金峯山に登り、盤若心經を誦して、本尊の出現を祈り玉へは、地藏菩薩出現し玉へども、かく柔輭の相にては、强剛の衆生を化度せんこと難しとてなげいだし玉ふ、是を吉野の拋地藏とはもふすなり、次に出現し玉ふは、彌勒菩薩なり、是も心に不叶とて、なげはらゐたまへば、次には青黑忿怒の相にして、左の手には劒印を結び腰をおさへ、右の手には、三股杵を執て出現あり、是はいかなる佛にてましますやと伺ひたまへば、汝が心願靈鷲山に通じ、爰に出現す、金剛藏王なりと、直に岩を開て入玉へ

ば、此尊像を等身に作り、本尊として嶮難の地に行場をひらき、強剛の衆生を化度し玉ふ事宜なるかな、鐘懸などといへる絶壁十丈にあまりて、一人攀躋さへ甚危き所なり、かゝる行場に至ては、後世といへども恐れざるはなし、譬は彌陀彌勒觀音執至の佛像といへども踏くだき、念佛を謠ひ題目に雜ひ誦るほどの強剛の者にても、嶮難の行場に至ては、慳貪邪見も忽柔和忍辱とへんし、三毒煩惱の雲晴れ、慈悲菩根の心を生ずる事、行者の方便の功德、廣大無量なり、誰歟是を尊まざらん、千とせの後のいまゝでも、彌益々に敬ひて、彌生なかばの吉野もふで、貴賤老若隔なく、また遠近のいとゐなく、六田の渡りをうち越て、所の名さへ柳宿、綠の空もうらゝかに、千本の櫻吹おくる、匂ひは花の春風に、心よし野の山道を、花のゆうしで、かけまくも、かしこき神を伏おがみ、心しづかに春の日の、かの長峯のなかばより、もとめに見ゆる千本の櫻、是は〳〵とばかり貞室の、其言の葉もおもひわされたり、抑此千本の櫻といへるは、人皇九十五代の帝、後醍醐天皇此山に都を遷し給ふ事、役行者の方便なれば、帝ふかく信じ給ひ、永く役行者へ手向んとて、千本のさくらを植させ、一花一葉といへども折とる事を堅く禁制し給ふは、後世までのたむけなるべし、さればこそ櫻の實生を持出て、藏王權現の御愛樹なりと、童どもの進めによつて、手毎に是を買とつて、御山のうちに植るなり、是より關屋の花、櫻が嶽、金の鳥居高さは二丈五尺にして、柱のめぐりは一丈一尺あり、上な

る額の發心門と書きたるは、弘法大師の筆とかや、二王門の金剛力士は、雲慶湛慶の作、金峰山寺の本堂には、藏王權現、觀音彌勒の二菩薩を始め、役行者の御遺像を拜し、種々さまゝの禰宜言するもおふかりき、是等は花のよしの參り、四月八日を始とし、大峰參とて、町々在々いづ方も、因を結び山上講と號し、おくり迎の其時は羅紗猩々緋の幟を建て、さて參詣の人々には、螺鈴かけ金剛杖、實にいかめしき出立にて、先達にしたがふは、皆强剛の衆生にて、是こそ行者の御目的なり、さてまた山上嶽へ攀躋ては、西の臨東の臨、蟻の門渡り屏風岩鐘懸などは恐しく、忍辱柔和の心を生じ、下向の道はいさぎよく、子をもつ親ははしりいで、夏惱の咒を賴ますると子をいだせは、御山を蹈し此わらんず、他行の足とはかくべつなり、戒かさんと、先達は、此方の女子も向ひの男子も、また幼きは乳母ともに、またゐでこそは通りける、是ぞ行者の功德なるべし、また靈驗のあらたなる、鐘懸のゆらゐを尋るに、嶮難の行場にして、高き事は雲に聳へ、峨々たる其岩上に、一つの銅鐘をかけたり、一人として恐れざるはなし、其銘に曰く、遠江國佐野郡原田村長福寺、天慶七年六月二日とあり、是を尋るに、長福寺の門前に一人の山武士あり、貧にして峯入のてあてもなく、ふかく是を歎きける、生得正直にして、役行者を信仰する事霎時も怠る事なし、しかれどもいかなる因緣にや、人のもちゐもなく、貧にして賴むべき方もなく、是をのみ苦勞し、日用の不足はさらにいとふ心もなく、

ひたすらに行者を念じ、勇猛精進の行ひをぞなしにける、或時おもへらく、遥に役行者の教へをうけ、子雀明王の法を持し、深山魔所の幽谷に入り、修行するこそ本意なれ、譬飢餓におよぶとも、居ながら拜せん事恐れあり、今日より出立、峯入の數にいらんと決心して、常にもちひし古着のまゝ、所々の破れをつぎあわせ、垢じみたるもいとゐなく、頭巾鈴かけ金剛杖、心も急ぎいらたかの、數珠とりいだし佛前に、盤若心經を誦し終て妻子にむかゐ、是まで幾とし月をすぎにしも、行者の御恩に洩たる事はなし、報恩の爲なれば、道中にて飢餓におよび死するともいとふ心はさらになし、汝等もいかにもして、我るすをしのぐべしと、さとしければ、妻は幼子を懷にして乳房を含めながら、うれしげにおくりいで、女の身の夫のわかれをよろこぶにはあらざれども、唯峯入の出立と心うれしくおもふなり、必しも妻子の事は按じたまはず、いさぎよく峯入し玉へと、貧苦もさらにいとゐなき、貞女の眞心、麻に連る艾とは、是等の事を言なるべし、御說かの山武士は、旅よそはゐはなけれども、先村長の家にゆき、峯いりのよしを屆け、それより村中を家毎〳〵に挨拶し、當年はひさびさにて、峯入の爲出立いたすなり、しばらくの暇を乞ひもふすなり、猶るす中のことどもを賴み入なりと、懇懃に演ければ、皆相應に挨拶して、出行後を指さして、不笑者なわかりけり、爰に一人高聲に謗る者あり、旅粧もさらになく、古着のまゝの旅立は、定て路用もわるまじく、今日より直に門に立ち、一錢づゝを乞請て、また或時は螺に袁寐をおこし、子を持親に服たゝせ、なんの功德になる事ぞや、恥を知ざる山伏かなと、謗を聞て立とゞまり、恥とは何を言ぞや、古着のまゝの旅立を、はじといへるもさる事なれど、我身のうへはさにわらず、峯入せぬこそ恥かしけれと、隣の家にいりにける、是類はしき詞なり、神職出家、醫者山武士、士農工商いづれも道に差別あり、唯金銀の乏きをのみ、恥と云にはあらず、皆それ〳〵の道に暗きを恥と云ふべし、神職にして儒佛にまよひ、遊藝に樂み、皇國の古風を知らず、僧は一寺の住職といへども辨舌にまかせ、檀家講中に諂ひ、金銀を欲し、堂塔をかざり、美服を着し、婦女の尊敬をうくるとも經說に暗く、或は破戒し、醫は常に美服を着るを專一とし、富家に入ては、笑美を含で脈をとり、芝居はなしに、流行役者の紋を知り、家に在ては衆方規矩、醫道重寶記のかちふ本に眼をさらし、傷寒論は蠶魚の住居となり、日毎におふくの藥を賣り、急病といへども、貧家に行事をきらひ、唯富貴の家に諂ひ、仁術の道に違うて、多くの黃金を設く、是等皆悪俗の尊敬をよろこび、實に恥かしきをしらず、士農工商皆おなじ、如是は近世には有ましけれど、昔はありしと聞およべり、金銀の多きをのみよしとし餘事にかゝはらず、唯貧しきを恥とするは、商家の事にして、餘は貧しきを好とするにはあらざれども、專恥べきは道の暗きなり、却說山武士は長福寺にゆき、和尙にむかひ、當年は峯入の心願を發し、今日より出立いたすなりと、挨拶におよびける、

然るに當寺の住僧、齡七十にあまり、慈悲を旨とし、美服を着ず、常に恪心なく、身の儉約を專一とす、實に正直の老僧なり、山武士に對していへらく、夫信心とはまごゝろなり、貧苦に勞せず道を行ひ、峯に入て修行せん事を願ふ、是眞の修行者なり、感ずべし、去ながら何れの道に入るとても、皆それ〴〵の用具あり、用具調はざれば其法行ひ難し、譬へ勇猛の士といへども、戰場に向ふに、甲冑に身を堅ふし、手に刀鎗を執ざれば、何をもつて敵に勝ん哉、拙僧常に眞言法を信じ、盤若心經を誦すといへども、年老て靈場に參拜せん事かなわず、依之修行の用具、且路用等の足にしたまへ、是は愚僧の寸志なりと、少しの黃金を差いだせば、かの山武士は夢のごとく、よろこぶ事限りなく、譬へば潛龍の雲を得て、天に登るが如く、急ぎ用具を調へ峯入して兎鳥を累、下向してまづ老僧に一禮し、また村中へも執行の札を配りける、是より每年峯入の頃になれば、老僧より路用の手當をおくる事に定りて、每年とゞかふりなく峯入を勤めけり、しかるに老僧も今は八十餘歲となりて入滅し、弟子なる僧をもて住職とさだめける、さて此僧は佞奸にして諂ふ事を專とし、甚しき吝嗇にて、人の惡みをうくる事少なからず、しかるにかの山武士は、峯入も頃にもなれば、長福寺に行て住僧に對し、先代より年々助成にあづかり、峰入もとゞかふりなく勤しゆゑ、不替相御助成のほど賴入ると懇懃にのべければ、僧はこれを聞て、それは筋違ひ賴と云ものなり、出家沙門は何れも俗家の助成にあづかるなり、當寺も先代には金も有りし歟、此頃は金といへば鐘の外にはなし、若それにて用に立ば、持行玉へとなじりければ、山武士は甚腹立て、さて〳〵僧には似げなき詞かなと、外の方にいで鐘樓を見て、我力の有るならば、此鐘を此所にはおくまじものをとつぶやきて出ゆきける、僧はうち笑ひて、さて〳〵大ひなる虛氣者の云事かな、譬行者の力にもおよぶまじ、天狗なりとも鬼なりとも、勝手しだいに持行べしとそしりける、早日沒になりければ、下男は鐘樓に登りてつきならし、天狗なりとも持行は此役は免るゝものをと、口にまかせて入合の鐘つきながら謗りけり、さても山武士は我家にかへり、僧の惡口をふかく惡み、佛前に盤若心經を誦し、夜もふけぬれど、夜の着ものも別には無く、唯其まゝに臥しければ、寢いりもならず、峯入の事のみ工夫して、うつ〳〵としてありけるが、枕のもとに錫杖の音しけるゆゑ、驚て頭をあげて是を見るに、神人忽然として立玉ふ、山武士畏みてはゐし奉るに、神人告玉はく、當年の峯入は勞する事なかれ、汝に代て峯に入者ありと曰へば、山武士は如何なる者の代り候哉と、伺んとして夢はさめたり、不思議の靈夢を蒙りし事かなと、直に起て身をきやうし、又心經を誦し居けるに、東天の頃になりて、あわたゝしく門戸を叩くものあり、誰をと問に、近隣の百性なり、老分三人うちそろゐ、昨日長福寺の和尙、甚不禮の挨拶あり、その後役行者をも謗りし言あり、其間にや、今朝下男七つの鐘をつかんとて、鐘樓に登鐘木の綱にとりつ

ねて、つけどもならず、懲てよく〳〵見れば鐘はなし、依之一山の騒動となり、近邊の者も集會し、種々に評すれども、是は凡人の力にわらず、必役行者の祟ならん、されば僧のちからおよばず、御坊を賴み、役行者へ佗言せんと申合せたり、先代のとふり路用の事は云に及ばず、今度は別段に日雇にして、心まかせに賃銀を出すべし、何卒峯入を賴度し、昨日の過言さぞ立腹も有べけれど、曲て承知に預度く吳々も賴入とぞ歎きける、祟りをうけて祈禱を賴むは、燒跡に用水の置くのたぐゐなり、憂世の中の人心、轉ぬさきの杖は、何れの店に賣るやらん、却說山武士は、賴を聞てよく思案し、曉の夢に當年の峯入は、勞する事なかれと告玉ふてそ不思議なれ、容易にうけひき難しと決心し、さて〳〵餘ぎなき賴みなれども、少しくおもふ旨あれば請がたしと、敢て肯ず、依之ちからおよばず、立歸て是と話りければ、僧は大に驚き、此後は如何なる祟りおやなさん、命にかゝわらんと深く心を痛めけるが、再び申合せ僧俗うち連て、山武士の家に行き、再三再四懇懃に頭をさげて、當年をはじめとして、毎年峯入の手當、出銀の事永く相違無之よし證書にても差出すべしと、皆一同に賴みければ、山武士も深く思慮して、左ほどおもひ玉ふなれば、御僧も參詣し玉へ、某し先達いたさんと云ければ、一統にしかるべしとぞすゝめける、僧心中に恐しくはおもへども、是非なく先達を賴み、遠江國を發足し、三河國をうちすぎて、さて尾張路にさしかゝり、熱田の宮を伏おがみ、七里のわ

たし帆をあげて、是も吹來るや神風の、伊勢の桑名の岸に着き、行ばほどなく追分の、とりゐのもとに額つきて、天照神を遙はゐし、伊賀の山道踏分て、大和路さして急ぎける、さても大峯に一ッの不思議あり、夜中山鳴震動して、おそろしき事限なし、黎明の頃よう〳〵靜になり、參詣の人々も、恐しながら登山して、四方を見るに、遙の岩上に一鐘をかけたり、皆奇異のおもひをなしにける、長福寺の僧は、山武士を先達とし、日を累ねて、大峯に來り、往來のはなしを聞くに、高き事十丈にそびへたる、岩の上に鐘のかゝりしと云をきゝて恐しくて、足の踏所もおぼへず、行て見るに、疑ひもなき我寺の鐘なり、爰にはじめて慳悋の邪念を捨て、慈悲の心を生ず、是より眞言法を信じ、毎年怠りなく、峯に入て修行し、天晴の正僧とはなりにける、鐘懸岩の名は、是よりはじまるといへり、如是靈驗のわらたなる事、かぞふるにいとまあらず、後世に至ては、尊敬彌增にして、去る寛政十一年、一千百年の御遠忌に付、神變大菩薩の勅號をおくらる、誰か是を尊まざらんや、今嘉永二年は、一千百五十年の御遠忌に付、御行狀の尊ときよしを著さん事を願ふて、日本書記をはじめ、元亨釋書、靈驗記、箕之面山之緣起、此外諸の書籍を集め、煩しきを省き闕たるを補ふ、しかるに元亨釋書に曰く、年三十二、乘ニ家入ニ葛木山一、居ニ巖窟一者三十餘歲也と、靈驗記に十七歲金剛山に登ると在り、箕之面山之緣起に、二十五歲箕面山に登ると在り、また御流罪の年を考るに、靈驗記に、持統天皇十

一年と在り、元亨釋書に曰く、配豆州大島、居三年晝守禁而居、夜必登富士山、行道踏海而走、猶行陸其疾飛鳥不可及也、黎明歸島、大寶元年放廻、近京師凌虛飛去と、是によつて考るに、大寶元年は文武天皇五年なり、島に居る事三年にして、大寶元年にかへるとあれば、配流は文武天皇三年なり、何れの書にも配流は文武之御宇とあり、如是相違有りといへども、日本書記について、時代年歷を考へ、都て元亨釋書の文に隨ふ、他の書には異なるべし。

役行者御誕生之話並優婆塞行咒力をあらわし玉ふ話

大和國葛木上郡、茅原郷賀茂役公氏、一人の婦女あり幼さより、父母に孝をつくし、長う國色ならびなく、紡績の業も拙なからず、心ざま優艶にして糸竹の道も闇からず、類ひなき女なれば、遠近より迎んと云も多かりけれども、敢て肯ず、常に神佛を信じ、五辛酒肉の類をさらねかつて是を用ゆる事なし、精進潔齋して、比丘尼のごとき行ひをなしければ、是を惡み、世の中の曲強者なりと謗る者も多かりき、頃は人皇三十五代、舒明天皇五年、癸巳三月の事にてありしが、帝御遊獵のとき、茅原郷に行幸あり、郷人は皆いでゝおがみけり、其後の事なりしが、かの女常にかわりし躰に見えけるゆゑ、兩親は易からぬ事におもひて、尋けるに、女答けるは或夜の夢に一ッの獨股杵天降り、口中に入と見てさめたり、あやしき夢なりと驚きけれども、

他言も何とせんかたなく、其まゝにうちすぎけるに、腹中常ならず、月水も滯りて心易からずと話りければ、兩親驚きながら、かねて聞およぶ天竺の摩那夫人は、佛躰の口中に入ると夢見てより懷姙し、釋尊をうみ玉ふといへり、賤しき身には比し難けれど、佛のやどし玉ふたる歟と、喜事限りなし、里人どもは是を洩聞て、皆口々に云觸し、中にも物知り顔の老人は、手を組み頭を傾け深く考へかねて、聞く唐土にては國王の后、炎暑をしのがんとて鐵の柱に身をよせ玉ひしが、つひに孕て鐵丸をうむ、是をもて二ふりの劒を作ると云ひ傳ふ、また吾朝の近江國に一人の女あり、若かりしときより、癱痪の持病あり、常に按服して甚心よき事におもひてありしが、常ならぬ身となり、月滿て人の手をうみし例もあり、彼是思ひあはせば、獨股杵にても產ならんと云ふを聞て謗ぬ者はなかりけり、却説かの婦女は、常よりも猶つゝしみふかゝりしが、かれこれ月も重りて、十月に滿けれども、さらに効驗もなし、明れば同御代六年、甲午正月元日、俄に產の催しありて、安々と玉のごとき男子出生し母子ともに健なりければ、兩親の喜び限りなし、按ずるより產のやすさとは、是等の事なるべし、出生の男子凡兒にあらず、額に一角を生し、面貌魁悟にして、形體頗る世の人に異なり、依之幼名を小角と稱す乳房を含め養育するに他に異なる事甚おゝし、三四歲の頃より步行するに、猛蟲を不踏まず華を摘み菓を拾ひ、佛に供養し、常に食するに、魚鳥の肉は云もさらなり、五辛の類をさらね、

かつて食せず、聰明叡智にして小兒を友とせず、伯父(母の兄也)願行といへる人に屬て、物學びするに、一遍にして二遍におよばず、七歳の頃より慈救の呪を誦る事、日々十万遍に餘れり、教へされども自密乘を感悟し、常に孔雀明王の呪を持誦し、鄕人の交を禁じ、霎時も怠る事なく、修行ありしかば、雨中歩行するに、衣をぬらさず、是等を不思議と云ふべきなり、常に賤愚の應答をきらね、咒を持し經を誦るに倦む事なく、例せば龍は諸虫にして、諸虫と鱗牙をならべず、獅々麒麟は諸畜にして、諸畜と脚蹠を連ねず、友を撰むといへり、人は万物の長なるゆゑ、心をもつて友とす、己をしらむとおもはゞ、友を見よといへり、行者賤愚のまじわりをなさずといへども、倦む事なきは心をもつて友とするゆゑなり、是にても凡人ならざるをしるべし、又歩行するに、額に帽子をわて丶角をかくす、是によつて角帽子と云ふ、木履をはきて不淨を踏まず、錫杖を振虫を追ひ、まことに勇猛精進なり、家にあつて頂髮を剃らず、といへども、餘は皆比丘僧の威儀の如く、五事を斷ず、一に肉食、二に五辛、三に飲酒、四に婬欲、五に不淨の家に食せず、是を優婆塞行者とはもゝふすなり、後世に至ては、神變大菩薩と敬ひ、四海に御德を耀給ふ神仙なり、佛人界へ生をうけ、衆生を化度し玉ふ事、おふしといへども、父無して生れたる其例を聞ず、予是を愚按するに、佛祖釋尊は、久遠の佛なれども、中天竺摩迦陀國迦毘羅城、淨飲大王を父とし、摩耶夫人を母として生れ玉ふ、吾朝には聖德太

子、救世觀音の化身といへども、人皇三十二代、用明天皇を父とし、穴穗部皇女を母として生れ玉ふ、後世には讃州多度郡屏風浦の領主、佐伯眞氏の妻、阿力氏といへる人、或夜金色の僧來て曰く、我は西天の僧なり、宿緣有るによつて、汝が胎をかると口中に入と夢見てより懷姙し頃は人皇四十九代、光仁天皇の御宇、寶龜五年六月十五日、出生、幼名眞魚と稱す、弘法大師是なり、淨土門の祖師法然上人は、美作國久米南條稻岡に出生す、父は漆間時國母は秦氏なり、夢に剃刀を呑と見てより孕て、人皇七十五代、崇德院の御宇、長承二年四月七日に生る、勢至菩薩の化身なり、法花宗の祖師日蓮上人は、房州長狹郡東條鄕市川村小湊に出生す、父は貫名二郎重忠、母は梅千代と云ふ重忠夢に、虛空藏菩薩空中に影向あり、顏よき靈兒を掌にすへ、汝にあたふ、一切衆生の爲上求菩提の因緣、三世常恒の大道士なりとて、さづけ玉ふと見たり、母は比叡山の頂に腰をかけ、近江の湖水に手を洗ひ、富士の峯に日の蓮にのりて出るをおがみ、其日の口中に入ると夢見てより孕み、人皇八十五代、後堀川院の御宇、貞應元年壬午二月十六日出生す、本化上行菩薩なり、如是佛の化身といへども、何れも父母あり、是人界へ生をうくるの例なり、地水火風の四ッのものを色と云ひ、空の一ッを心と云ふ、色心和合して人となる、心の一ッは神佛の授け給ふとも、地水火風の色と號するものは、父無く何者か是をなさん、まだ死するときは、火風の二ッは、心につゐて去ども、水土の二ッのものは

殘り止る、是をなすものは父母なり父母の作る色あるゆゑに、神佛心を授け玉ふ、是を色心和合の躰といふ、依之佛祖釋尊をはじめ、神佛の權化といへども皆父母あり、しかるに役行者ばかり父なしといふ事、深く考ふべき事なり、是に一說あり、舒明天皇茅原のさとに行幸し、鷹を放ちて御遊ありし頃、行者の御母は二八の春をむかへ、艶色十分して彌よひなかばの花よりもなをたをやかなりければ、帝近くめして深く愛玉ふ事ありけり、然れども唯一度の恩幸を蒙しばかりなれば、深く慎みて御胤なりといはん事を畏みて、獨股杵天降りて口中に入ると夢見しと披露せしは、深き心あるたとへなり、後世一休禪師は、人皇百一代、後小松院の御胤にして御母は藤持從といへる人なれども、藤持從は、國母通明門院に奉仕女房なりしが、通明門院の御庭の花盛りにて、俄に花見の宴を催し玉ひ、帝も行幸し玉ひ、御酒宴の興を催し玉ひけるに、藤持從は優艶にして、糸竹の道にも勝れたれば、深くめでさせ玉ひ、其夜恩幸を蒙るといへども、容易ならざる事ゆゑ秘して出生の御子は出家させ、後には天下の大德となり玉ふ例もあり、行者の御事、たしかに天子の御落胤やと、書顯はさずといへども、御高德をおもひあはせても知るべき事なり、行者の御母清淨堅固の御身に、御胤をやどし玉ふゆゑ、佛心を授け玉ふなるべし、行者は七生の前より佛にて、三國に生れ衆生を化度し玉ふ、其七生の譯は次の卷にあらはしたるを見るべし、又云ふ、額に一本の角有り、然れども角の有るは鬼のやうにて

賤きすがたとおもひて、なきやうに云ひなしたるは甚しきあやまりなり、神農の像を見るに角あり、又古書には、人身牛首と見えたり、是を賤といはず、諸神の中には角ある神もあるべしかれども神像を畫く事稀なる故知人なし、行者に一本の角あるゆゑに、御名を小角と稱す、天竺摩伽陀國に一人の論師あり、名を提舍と云ふ、其妻を舍利女と云ふ、眼舍利鳥に相似たるゆゑ名づくといへり、其子を舍利弗と云ふ、是等の例なるべし、角有ゆゑ、角帽子を用ひ玉ふ今山伏の頭巾を用ゆるは、義覺（行者の御弟子也）の代にはじまるなり、帽子とは頭におくものにて、頭巾なり、黑く塗かためたるは烏帽子と云ふ、是は色形烏に似たる故なり、角帽子と云ふは角かくしなり、是を以ても角有る事疑べき事にあらず、また角ある事は、恥べき事にあらず、今も遠國には女の用ゆる帽子を角かくしと云ふ所もあり、是は行者の用ひ玉ひし、古言の殘りなるべし、却說行者は修行怠なく年を累ね、今は天眼通を得玉ひ、居ながらにして百里の外を知り、心中の善惡を見貫き、また病症を觀るに、老醫もおよぶべからず、しかれども却て是を謗り、母におなじき曲强者なりとて、信用する者さらになし、まことに深山櫻のごとくにて、我より外にしる人ぞなき、石中の玉とやいはん、例せば曇れる鏡にうつすが如く、愚俗の眼暗ければ、行者の正行を見る事あたはず、爰に一ッの不思議あり、同村に名を作麿呂とよび、年の頃は二十三四にして、力强く相撲を好み、又力試などに勝を、慢心して、

里人を眼下に見くだし、傍若無人の無賴者なり、然れども是に敵する者なければ、よき事に思ひ、大酒の後は喧嘩を好み、非道の振まひをなし、人をなやまし、是を樂とする惡黨なりしが或時大ひに醉て唯獨り夜も深くふけて山路をかへりしが、月さへて晝のごとくなれば、一疋の狐を見て是を殺し食はゞやと思ひ、石をひろゐて擲たり、狐は尾のさきをうたれ、危きを逃れ去らんとす、作麿呂は殘念なりと追事三丁ばかり、狐は高き岩の上に飛わがり、作麿呂をかへり見る、其眼中光りを放ち、尋常の狐にあらず、作麿呂少しも恐るゝ色なく、また石をひろわんとするに、狐はこう〳〵となきて、遙の谷へ飛いつて、すがたは見へず、作麿呂は腹たちて、さても〳〵命冥加のある狐かなと、つぶやきながら我家にかへり、臥戸に入て寢入しかば、家内の者は、狐の事をさらにしらず、朝はやく粥などたきうちよりて、食するといへども、作麿呂はいまだ臥戸をいでざれば、父なる者は高聲に、やよ作麿呂よ、いつも〳〵呑すごし、朝寢するともほどがある、今日は田植でいそがしゐ、早とく起よと云ひければ、作麿呂は起わがり、走り出て上座につき、父にむかひ、大音上に、汝よく聞け、作麿呂は少しき力を賴にして喧嘩を好み、非道の振舞すくなからず、種々の惡業常に惡しとおもへども、我かゝわらぬ事なれば、是まではゆるしたれども、昨夜の月は隈もなくさへわたり、甚心よき事におもひ、我身の影をたのしみて、作麿呂の來るをしらず、不意に飛來る石は、我尾さきにあたる、今五寸高

かりせば、陰囊を破られ死すべきに、尾先にあたり、危きを免れしは、我高運と云ふべきなり年經其うちには獵人に追れ、また或時は矢にあたり、種々さま〳〵の危きをのがれ、百三十年の功を積み、大和國におゐては恐者もなくまた、多くの眷屬もあり、狐なかまの定めとして、五十歳にして能變化し百歳にして美女と化し、人の交をなす、千歳にして天に昇て神に仕へ、天狐と云るゝ身となるべきなり、しかるに作麿呂などに擲れたると眷屬どもへも恥べき事なり暫此家に止り、汝等を惱して樂んとおもふなり、子の惡事は親しらずと云べし、併ながら、唯一人の男子なれば、幼きより子の言まゝに養育し、人の道たる敎をなさず、また成長の其後は、相模に勝を悅びて、それより段々增長し、非道の喧嘩に勝つさへも、心うれしくおもひし、は、親の道には違はざる歟、例せば畑によき種をまくとも、耕作もなさず、養ひも不足なれば花咲實をむすぶ事もすくなかりべし、育によつて善惡なり、眞實我子のかはゆきを、しらざるにはあらず、道をおしへぬ親こそ道に暗きなり、子の惡業は親のつみいかに、免れは有まじと、狐に似あはぬ勸善懲惡、家内の者は云におよばず、隣家の人々仰天し、恥入てこそひかへけれ、誠に獸るゐといへども、其詞眞理にあたれり、後世是のごとき例多し、富貴の家は一人の愛子あり、乳母側女伽の者大勢屬副ひ、公家大名の公達のごとく、たま〳〵泣聲を聞けば兩親は魂を天邊に飛し、下女下男を呵り何匂り、言儘にして育る子を、炎暑の頃ことに六月土

用の丑の日などを撰み、乳母にいたはせ、兩親は手足をとり、立入の按摩は小兒の脊に火を置き、小兒はかなしくあつき事限りなし、泣聲は門外にきこへ、焦熱地獄の苦るしみも、かくやわらんとおもふばかりなり、是は何ゆゑなると、問に、炎治をすれば無病になるとしるゆゑなりといへり、聖賢の道を敎へては善道に入こと、炎ほどにしるならば、おしへぬ親はあるまじく、よき事を敎へて、よき者になるとしらぬ者はなけれども、深くしると淺くしるとの甲乙あり、例せば玉の盃に諸白の上酒をもり、見るに、淸けれども、もし糞の匂ひ少しにでもあらば呑者なし、是不淨なりと、深く知るゆゑなり、都て深くしれば用をなし、淺ければ用をなさず、極樂往生を願ひ念佛を唱ふるに常にとなふるは用にたゞず、臨終の唯一べんの念佛にこそ用われと云ふ、しからは常には唱へざるがよき歟とおもへばさにあらず、寢ても起ても唱ふるがよし、常にとなへざれば深くしらず、怠りなくとなふる念佛の功を積めば、臨終の唯一遍がよくできるなり、是不斷稽古して、深くしるゆゑ心にまよひなく、無量の功德あり、是を安心決定と云歟、しかし念佛の功德は眼前にあらはれがたし、早く見んとおもはゞ、淨留理の稽古するに、常に稽古足らざれば、床にわがりて聲の調子を損ずる事あり、是稽古の足ざるゆゑなり、親の心によき事を深くしらざれば、子の敎へはとゞきがたし、貝原篤信翁の著されし古書の意をかながきにせし、文にも、百萬錢をいだして、女子を嫁せしむる事を知て、十萬錢を出して

子を敎ゆる事をしらずと在るは、誠に尊むべき言なり、狐の詞此意にかなへり、大和國ゆゑ源九郎狐なる歟、又源九郎の先祖なる歟、予是をしらず、いづれすぐれし老狐なるべし、狐の理解によつて皆口を閉ぢ、互に顏を見あはせてひかへたるは、貴人の御前に出たるが如し、作麼呂いよ〳〵座をすゝみ、席をうつて曰く、先今日のもてなしに眷屬どもゝおふき故、米三斗を赤飯とし、隨分小豆をおふく入れ、生魚をそへて出すべし鰤なくは鯛にてもくるしからずと好みしは、流石大和の狐なり、是より狐のつきたるをしり、村中寄合ひ相談して、好のまゝに篦三斗を赤飯とし、生魚をそへて作麼呂の前にさしいだせば、是は我食ふにあらず、眷屬どもへつかはすなり、早々谷間へ持行き、淸淨なる所をえらみ置べしと云ふにまかせて、山中にすてさせけり、かくて其日はしづまりけれども、また翌日も早朝より、油あげのもち三百、小豆餅五百ばかりを好けるゆゑ、父なる老人大ひに當惑し、日々如是大そふなる好にては、此痩身上の中々及ぶ事にあらず、併ながら今日を限りに退ならば、好にまかせんと云ひければ、作麼呂は笑美をふくみて、いかにも退べしと答へけるゆゑ近隣の人々を賴み、餅のやうゐをなし、さて油屋に行て子細をものがたりければ、亭主は大におどろき、さても〳〵きのどく千萬なる事かな、御心痛のほどさつしいるなり、隨分ねんいれ、上品をえらび、常より下直にさし上もふずべし、御逗留中は相かはらず、御用仰付られ下さるべしと、我身勝手に答へける、さても

日没の頃になりて、やう〳〵に調ひければ、また昨日の所へすてにけり、老人は我子作麻呂にむかひ、約束の如く執はからひたれば、早々退く歟否と云へば、作麻呂は大ひに立腹し、親として子を追いださんと云ふなれば、行先おてはなけれども、何國へなりとも出行べしと走りいだせば、老人は周章てひきとめ、汝に出行けと云ふにはあらず、狐にこそは云ひしなりと止めける、作麻呂はいよ〳〵増長し、種々の好をなし、調はざれば荒いだし、力は日頃に十倍し、中々とゞめ難く、村中うちより談合して、呪ひ祈禱はいふにおよばず、老若男女の差別なく、智惠藍の底をたゝいても元來無智惠のいづべきやうなく、困りいつたる中に一人、急と思ひ付たる事ありといへば、皆一同に耳聳て、其謀はいかにと問ふに、答ける、役優婆塞は、世中の幼弱者にて、人まじわりさへならぬ者なれども、近頃は不思議なる事多きよしをきけり、此人に賴み呪にても祈禱にても心まかせに行さば、萬に一つの驗もあらんとはいへば、一人手をうつて曰く、其事我も心づかぬにあらず、此頃河内國より、眼病の者を連れ來り、加持祈禱を賴みしが七日の中に手の筋を見分るやうになりしときけり又津國より、若き女を連れ來る何の病ひかしらねども、是も全快したると云ふ今一人は都の人、十年以來の病なるも、全快したりと云ひければ、皆一同に詞をそろへ、それをしらぬは何事ぞや、燈臺本闇しとは是等の事なるべし、また其上によき事は、少しの謝禮もうけぬと聞く、是最上の祈禱なりと、欲と迎立

つ里人とも、申合せて五六人、うち連てこそ出行きける、さても行者の家にゆき、常にかわりて慇懃に、作麻呂が事を申のべ、親類一統の願なり、何とぞ御祈念下され度とぞ賴みける、行者は日頃の不禮惡しと、おぼしめせども、とるに足らざる下賤の者、猶また危難を救ふ心願なれば、早速に承引玉ひ、其家に行て祈禱せん、はどなくそれへゆくべしと、仰を聞て里人ども悅び勇てかへりける、さても作麻呂が家には、村中うち寄り不淨をはらひ、行者の來給ふをまちうけたり、行者は御身に白袴の淨衣をめし、額に角帽子をあて、木履をはき、左の手に獨股杵を持ち、右に錫杖を振り、作麻呂が門に彳み玉へば、家内の者は周章迎に出にける、行者しづ〳〵として家内に入らんとし玉へば、作麻呂大ひに驚き、臥戸の内に走りいり、堅く戸をさし身を屈め、須臾行者の御入を留奉れと云ひければ、村人どもは一同に、さては行者に恐れたるぞ、早御入をと願ひけるに、行者是をきこしめし、言ことあらば言ひ置て立去るべし、願に仍て少しの猶豫は免すなりと、仰に漸〳〵作麻呂は頭をあげ、永く此家を惱さんとおもひしが、行者の御入とあれば、片時も止り難し、今より直に退くなり、我百三十年の其間、道を闇まし人を迷し、又或時は異類異形に身を變じ、婦女を驚し、千變萬化するといへども、人の身に執つきたる事なし、作麻呂は常に惡業をなすゆゑ神佛の守なし、我又是を惡しとおもひ、身に入て惱すなり、しかれども行者の來玉ふを見れば恐しく、すこしの間も厭ふなり、汝等行

者に呪力ある事をしらず、却て正直の行を謗り、世の中の幼强者と云ひしは甚愚なり、我は畜生なれとも通力を得べき者なるによつて、行者の尊きをしる、今退くにつゐては、汝等がために行者の功德を言きかさん、謹でよくうけたまはれ、抑役優婆塞行者は、七生の其むかしより佛にて、今此里に生れ玉ふは、かたじけなくも天子の御落胤あるによつて、衆生を化度し玉はん爲、佛の御靈をさづけ玉ふゆゑ、凡人にあらず、雨中に步行し玉ふに、御身のぬれざるを油のつよき生れつきなど、己が心の及ばぬをもて、是を謗るは愚なり、我は幽冥の者なるによつて、是を見るに、常に四天王天蓋を持て、守り玉ふゆゑなり、是にても權化なる事を知るべきに、尊としとはおもわず、詞を工にして謗る事、言語に絶へたる頑愚の土民とは汝等が事なり、我は今より退くなりと、云ふぞと見へしが其まゝに作麿は倒臥し死たる如く寢いりしは偏に行者のおかげなりと、村中奇異のおもひをなし、今までそしりし者までも、敬ひ尊み、行者のあとをふしおがみ、かゝる尊とき生佛、外の村には有るまじと、謗詞を飜す、自謾詞ぞ可笑けれ、是より行者を尊敬し、神と云ひまた佛と云ふも道理なれど、善といへば神佛、惡といへば鬼なりと、よきほどしらぬは下賤の癖、尾に鰭そへて言觸し、近鄕近里は云に及ばず、遠近の國々までも聞えけるは、天に口なし人をして云はしむるとは、是等の事ならん、行者の御德日々に益し、傳へ聞たる人々は、貴賤の差別なく群參して、加持祈禱を願ふ者少からず、神

佛の罰を蒙り、或は難病惡靈の崇り、種々の難苦を願ふといへども、一人として苦惱を免れざるはなし、其數幾千人といふ事をしらず、行者の呪驗は神の如しと敬ひ尊み、恩謝のため金銀卷物山海の珍味、日々に持運ぶ事山のごとく、寶の山に入りしとは此事なるべし、しかれども行者は一品も請たまはず、返し玉へば人々は、頭は低く尻高く、疊に鼻を摺つけて、冥加の爲の寸志なり、何卒御受納下されたしと、同音に願ひければ、行者聞し召され、さほどに思ふ志を、其まゝ返すも破戒に似たり、汝等が心ばかりを請おかん、是へと仰ありければ、我劣じと珍物奇肴ところせましとならべけり、一々是をとり揚げて、熟覽玉ひ、心を盡せし品々は我心にも滿足せり、早持歸れと差戻し玉へば皆々互に顏見合せ、あまり麁末の品なれば、何れも御意にかなわぬゆゑ歟、何なりとも御差圖しだいに奉んと伺ひければ、イヤ左にあらず、又上品下品に好惡なし、何れを見ても皆平なり、唯喜は汝等が志しなり、品を止てなにかせん、持かへるべしと一品だにも請たまはず、依之ちからおよはず、神や佛に備へし物を直會したる如くにて、皆々もちて歸りける、是ありければ日々夜々にしたひ來て、願ふものさらに絶まなし、又呪驗を蒙り、危きを免るゝ者、數しらずといへども、先一二ヶ條をあらわす中に、河內國倉造りといへる所に、名を勸意と云ふ老人あり、其家の富る事近鄕にならびなく、田畑山林もおふくて、召つかふ男女もかれこれ二十人にあまる大家なり、此家に一人の男子あ

り、名を善見と稱べり、成長にしたがひ、孝心ふかく父母につかへ、少しも逆ふ事なく、物學びするを樂みとし、身の行狀正直にして、年は廿三四にして美男なれば、懸想する女もおふかりき、中にも善見が側女に名を阿古とよびて、まめ〳〵しき女あり、此者は同村の百姓の娘なりしが、幼ふして父母にわかれ、賴なき身となりしを、勸意ふびんにおもひ、十一歳の頃より我方へひきとりて、養ひ育てしが、鄙の生れにはまれなるやさしき、女なるゆゑ、側近く召つかひ、今年二十二歳になれども、耕す業もおぼつかなく、唯與向に在て、縫績の事のみして勤しが、よく恩を知る者にて、かげひなたなく仕へけるゆゑ、勸意も憐みて、めしつかひける善見はいまだ妻もなく、何かと阿古をして、側なる事をまかなわせけるに、慇懃に懈怠なく仕へけるゆゑ、其實弟なるを深く感じ、愛みければ、女もまた實情の深さをよろこび、互の感に通じ、鴛鴦の中とはなりにけり、忍び逢ふ事百度におよびけれども、慎みふかければ知る者さらになし、しかれども召つかふ下女なれば、妻とせんには父の免しもあるまじ、また親類緣者への憚りもあれば、言出しかたく、忍びてながく召つかはんとおもひ、諸方より申來る緣談は事を左右によせ、何れもことはりにおよびければ、父の勸意は忍び女の有りとは夢にもしらず早くしかるべき緣をもとめて、家督を讓らばやと種々に心を勞しけるに、今幸ひの事あり、同里に富貴の家あり、勸意が家には少し劣れども、他には稀なる家がらにして、一人の女子あり

名を子良司と稱べり、今は二八の春もすぎ、艶びやかなる事限りなし、兩親は手裏の玉の如く寵愛し、藝を敎へ行を正しうして、養育するよしを聞き、勸意好もしき事におもひ立入る、者の中賢きをゑらみて、內意を問はせけるに、勸意が家は近鄕にならびなく、また善見の實躰正直なる事も聞および、おれば早速相談にもおよびたきよし答へけるゆゑ、勸意はよろこびて直に媒をもて言いれ、また善見にも此よし云ひきかせ、万事心を配りける、善見は心中すゝまずといへども、父のふかく勞したる緣談なればもだしがたく、愛事におもひしが、早速熟談によびたれば、勸意は急ぎ吉日をゑらみ、都て滯る事なく調ひ、既に當日にもなれば、親類緣者出入る者皆集りて、賑はしき事限りなし、阿古は我身の賤しきを顧て、嫉妬心もなく動きしが黄昏も近くなれば、善見は衣服を改め、媒の者とうち連立て女の方へ出行きける、(女の方に行て祝盃する事古へへの風也)阿古は心さへやらず、善見が居間にぬぎ捨し衣類をたゝみなどして在りけるは、甚あはれなる事なりけり、善見は滯りなく、婚姻を調へ次の日我家に歸り、女はまた次の日よしみが方へ來り、月勸意をはじめ、親類の盃を請納め、萬事殘るかたなく相すみ、日を累ねけるが、善見は阿古をふびんにおもひ、わざと側近くめしよせて、何歟の事をはからはせなどして、阿古が心をなだめけるに、子良司はさらに含みをしらず、唯めしつかふ女なりとおもひければ、善見のはからふを見習ひて、万事に阿古をよびてかなわせけり、さても

阿古は如何なる因縁にや、かゝる憂命にあふことかな、ありてかひなき世の中にながらへんより淵川に、身をしづめてなりとも日毎に見る苦を免れんと、既にかくごをきわめ、忍び出んとせしに、此時善見の聲にてよびけるゆゑ、氣をとり直し行きて見れば、さしたる用にもあらざるに、近よせて詞やさしく宥むれば、せまりし胸も少しく開き、そのまゝにすぎけれども、唯おもひ立ち、既に其場に臨むといへども、善見が心にひかされて、止る事いく度も重りて、其念の晴る方もなく、皆子良司が身に請て、重き病に臥しければ、勇勸意をはじめ皆々驚き、醫療を加へ、良藥を用るといへども、其驗もなく日を累て、面部に惡瘡を生じ、美玉のごとき面も、鬼女の如くに變じ、日々に面ていくずるゝばかりに見えければ、神佛に祈り、又子良司の實父母なる者は、歎き悲みて、我命に替たきおもひをなしけれども力およばず、一門のこらず集會して評しける中に、おもひ出たる者あり、大和國茅原郷に、役優婆塞行者といへる人あり加持祈禱を願ふに、神佛の崇り、又惡靈物怪など、其驗の見へざるはなし、又或時は者婆扁鵲の藥力にもおよび難き病人も全快し、死人も蘇生すと云へり、其行者に願はゞやと云ひければ一統是に同意し、直に病人子良司を連れ、阿古を側女とし、親類家來大勢屬副ひ、茅原郷に行き、先親類兩人、行者の前に額づきて、しか〳〵のやうすを述べ、祈禱を願ふに、行者病人をめし給ふゆゑ、鬼女のごとくなりたる女を召連いで、いかなる因果にて如是恥かしきすがた

になりしやと悲しみければ、行者曰く、此病は身より生ずるにあらず、怨靈のなすところなり、是をもて灑は治する事疑ひなしと、加持水を賜ひ、猶是にて治する時は外にまた惡瘡を發る者有るべし、其ものこそ身より生る病ひなれと教へ玉へば、皆々恐れ入て是を頂戴し、急ぎ倉造りに歸り、行者の仰を一統へ通じ、未審くはおもへでも、まづ子良司にすゝめて洗はせけるに盡がきしものを洗ふが如く、日々にうすくなり、七日にして消へうせたり、しかるに阿古が面てに何やらん色付て、癢き事限りなし、終にかき破りて、子良司が面をうつすがごとく、日々に重りて鬼女のごとくになりければ、子良司が惡瘡は、阿古が怨靈にてありし事を知り、且又行者の靈驗神のごとしと、畏み尊まざるはなし、さても阿古は重き病に臥し、今は死を待より外はなかりける、深く子良司を怨むと はおもはざりしが、如是難病をうけしは、行者の方便なり、子良司は父母の免せし本妻なり、阿古は嘗へ深き中なりとも忍女なり、少しにても怨める心は僻事なり、其根元は皆善見の心より出る事なれば、善見は早く心づき、二人の女を惱す事皆我身の罪なりと、是より父母をはじめ、一門の人々へ阿古と密通せし事を懺悔し、猶また子良司にも言きかせ、急ぎ茅原の郷に行き、つゝまず行者へ申あげ、我身に惡病をうくるとも、阿古の病苦をすくひたきよしを願ふに、行者は懺悔したるを感じ玉ひ、また加持水を賜り、是をもつて灑ぐときは、阿古が惡瘡も治し、心も清淨にならんと、仰にしたがひ、善見